

うんちが出ない！

お便秘ガール小説誌

試し読み版

cheer!



# うんちが出ない！ 試し読み版 目次

いっしょにう～んってして！ 著：もちづきうずめ 絵：毒桃	…003
神様ごっこ 著：灰屋	…017
じゅうろくさい はじめてのおべんぴ 著：A J	…027
優しさは時に刃となりて 著：軟球ごるふ	…039
秘めたるお腹、風呂時間。 著：ゆっきゅん	…045
林間学校で便秘薬を使ってしまった少女たちのお話…053 著：できすとりん	
二人は秘密を持っている 著：温雲智子	…061
劣等種のペルソナ 著：早川オコゼ	…071

※収録内容は本誌と一部異なる場合があります。

※本誌表紙は便器透過・黄金差分での製本・配布となる予定です。

いっしょにうくんってして！

もちづきうずめ

◇ 七月 第三週 日曜日／1

文月の頃、七月も半ば。自称メイドちゃんの朝は早い。

……のは平日だけで、学校のない土・日曜日はちよつぷり遅起き。

六時三〇分に起床して身だしなみを整え、キッチンに着いてコップ一杯の水を飲む。朝の大仕事といえは朝食の準備だが、まずは仕事に出かける養父の分だけ。スクランブルエッグとウインナーを焼き、切った食パンをトースターに入れたところで起こしに行く。

冷たすぎる冷気に満ちた寢室を早足で駆ける。冷房が苦手な彼女と暑がりな養父&お嬢様の体温感覚は相性が悪い。夏用の掛け布団を蹴飛ばし、肌着二枚で寝転がる中年男性の寝姿は思春期の少女にはかなり目の毒だが、

「幹臣様、朝ですよ。起きてきてくださいね」  
みきまみ

肩を優しく叩き耳元で事務的に囁いて寢室を出て行く。ついでに冷房を切ることも忘れない。

ダイニングに戻ってコーヒーを淹れている内に起きてきて、定位置に着席するので挨拶を交わしてコーヒーを出す。彼女はまだ朝食を食べない。用意もしていない。

食べ終えた養父がダイニングを出て行った後は皿洗いをし、二人分の朝食の準備を始める。まだフライパンに火は通さない。

できることを終えて、そわそわしながらテレビを眺めているとスー

ツに着替えた養父が行ってくるよ、と彼女に声をかけて出かけていく。

「……さて」

養父の外出を待ちかねたように、ダイニングを出る。その足が向かったのはダイニングのすぐ近くにあるトイレだった。どうやら用を足したいのを養父がいなくなるまで我慢していたようだ。幹臣は毎朝かなり長くトイレに籠もるため、最寄りのトイレが空いていなかったということもあるが……。それなら屋敷にある他二ヶ所のトイレに足を伸ばせばよかった。

空くのを待っていたトイレの前に立つ。ドアノブの窓を目視し、念のためノックをしたが返事はなし。誰もいない開け放たれたトイレだが、彼女はドアノブに手をかけるも回して引くことなく佇む。他のトイレに行かず、養父が出勤するまで待ちかねたのにそわそわ、もじもじ。トイレに入ろうとして、ためらう。目の前の便器を捨てて他のトイレに向かおうと足が動き、すぐ戻る。

ぐるる……っ

(大丈夫です、日曜日は起こすまで起きてこないはず。それに今は催しているのですぐに出ます、よね)

意を決し、ドアノブを回す。ドアを引いて勢いのまま逃げ込むように、やっとトイレに入るのだった。直前に使っていた人が残した僅かな便臭に息が詰まったが、仕方ないと言いつつ聞かせパジャマを脱ぎ下ろして洋式便器に腰掛ける。

初鹿野かんなの朝は早い。愛すべきお嬢様のお世話のため。そして、お嬢様のいるときに大便をすることが恥ずかしいから。こっそりと、秘めやかに大用を済ませるために余裕を持って起きて、お腹を起こし

て行動する。それは平日でも、日曜日でも変わらない。

しよろろろろじよぼじよぼじよぼじよぼ……

肩の力を抜いて数秒、ゆるんだ尿道から朝一番のおしっこが放たれる。熱れた割れ目の周りを濡らしながら、吸い込まれるように濁った体液が便器に注ぎ込まれていく。

「はああ」

まだ覚めきっていない体内から体温が抜けていく。熱の溶けたおしっこが鋭敏な部位を掠めて、飛び散る。おなかの下の方の圧迫感がじわじわと縮み、放熱でぶると身体が震えた。冷静で大人びた少女も排泄という無防備な瞬間には抗えず、しばし全身を便器に預けて排尿の気持ちよさに身を委ねる。

「ふう、っ」

にわかに尿意を催してから約三〇分。我慢をしていたおしっこを済ませてはっと一息の女の子。

頬に映える朱色。しかし顔色良くとも表情は硬く。かんなが無表情がちな女の子でも、排泄が終わった後は顔がゆるむ。

つまりかんなは排泄欲を満たせていない。

パジャマを高くめくり上げ、お腹を撫でる。

（大丈夫です、お嬢様は来ません。まだ寝ています、だから）

「ふ……うう、んっ」

腰を浮かせて便座に座り直し、少し上体を倒した。そして数秒じっとして、息み出す。

（今日はお出ですから、すぐに出してくれる、はず）

息む。トイレに急かすほどではなかった便意を逆に急かすように。

「ん。んっ。ふう、ん。うん……」

換気扇と静かな朝の音に混じり、悩ましげな息み声が染み渡る。お腹を擦ってパジャマが擦れ合い、便意が膨らんで肛門が膨張する。

ねち、みち、と音を立てて大便が顔を出す。

（よかった、今日はちゃんと出てくれそうです）

おととい、金曜日。毎朝の排便の最中にお嬢様に近づかれ、ついっいうんちを我慢してしまっただけかな。朝の便意は一向に収まらず、何度もあったトイレに行けるタイミングもお嬢様が居合わせて先送り。結局下校中にお腹を下して漏らす寸前で自宅のトイレに飛び込んだ。（もうあんな思いはしたくないです……）

最悪の事態——大失禁は免れたものの、壮絶な我慢を繰り返して大便をしたことはお嬢様の知るところとなり、お尻を押さえたせいで汚れた下着を晒す結末に至ったのだった。

うんこを我慢せず言えるようになる、とお嬢様と約束はしたが恥ずかしいものは恥ずかしい。

（昨日はお嬢様がずっとドアの前で待っていて、緊張してなかなか出なかったですし）

決意を新たにした翌日の土曜日。恥を克服すべしと翌朝に勇気を出して朝の便意を告白したが、うんこを済ませるまでトイレの前に貼り付かれ、我慢ができないうちだけ言うことにしようという結論に辿り着いたかんなは、今日もこっそりうんこをする。

「うんっ、うんっ、ん……っ」

にちち にちちち

これからも、朝に一人で大便を済ませることには変わらない。

「ん、出そう。よかったです」

健康そうな黄土色が粘膜を押しつけて這い出ていく。粘ついた音を立てながら、懸命に息む女の子をゆっくりじつくりと焦らすように。

「あ、大便、出る……」

「うん……っ、ん、うーん……」

みち みちち……ずりゅ にちにちにちっ！ ぶりっ！

「んっ。はああ、あ」

ぼちゃん！

つるんとして形を保ったバナナうんこが、着水する。いじつかしく歩く速さで粘膜を撫でていたうんこが一気にずり落ちて、芯の抜けた声が漏れてしまう。

「はあっ、大便、出た……よかった。でも、もう少し」

小さなお尻の直下には、太くも細くもないつるんとした外観のバナナうんこが一本。一日かけてお腹の中を旅してしつかり水分の抜けた、健康うんこの見本そのものだった。

しばし排便の余韻に浸り、再び息み出す。

「まだ出るはず、ですよ。あまり便意はないですが」

前日の食べるものに左右されるが、毎朝のお通じを維持するだけあって、身体は排便量を覚えていて。まだすつきりにはほど遠いと感じ、優しく撫でながらお腹に力を込める。

「うんっ。うんっ。うん……っ」

まだ少女の面影を残す目元に皺を寄せ、頬を赤くし、口の端を曲げてうんこをがんばる女の子。しかし健気ながんばりとは裏腹に、腸が動く感触も、直腸をくすぐる感覚もない。

「ん、大便が、なかなか出てこない……」

出そうな気がするが、便が出ない。間違ひなく大腸の末端近くに大便があるような、小さい残便感がかんを苛む。

「うん……んん、ふう、んっ——あ。ん！ うんっ」

にち…… にちっ ぼちゃん ぶりぶりぶりっ とぼん

「はあ、はああ……はあー」

息継ぎ。安堵。嘆息。三分近く奮闘した末に千切れた塊が一つと、少し長めのうんこが一本。息むというには少々力強く、焦りの見えた踏ん張りの末、ようやくかんは排便を終えた。

「なんとか大便を出しましたが、すつきり、しないで」

朝のむずむず便意はなくなったものの、おなかのやや残便感はまだ健在。毎朝排便少女は煮え切らないまま、トイレトペーパーを手に取り始めた。

さつと後始末を済ませ、便器を見下ろす。バナナうんこ、千切れた塊、短めうんこ。毎日一回分としては十分量を出し切った感じはあったが、まだ出口近くに大便が残る感触を振り切れない。

「便意はなくなりましたが、後からまた大便がしたくなるかもしれないです。でもそろそろお嬢様を起こさないと」

水を流して、トイレを出て手を洗う。ちゃんと朝の習慣を済ませたのに少し調子が上がらない。

「やつぱりお嬢様が来るかもしれないトイレだと、少しだけ緊張しました。そのせいでしょか……早く慣れないと」

一昨日までかんが朝の排便で利用していたのは離れた別棟の客間前トイレ。稀に一人で起きてくるかもしれない樹里が来ないという理

由で遠いトイレを利用していたが、これからは『お嬢様が近くにいても大便ができるようになる』ため、一五歳から始めるトイレトレーニングとして、まずは一階トイレで朝の排便をすることにしたのであった。  
(最終的にはお嬢様の私室に近い二階トイレでも大便ができるようになりたいですね)

トイレに居座りたい気持ちはあったが、排便のみに時間を費やすわけにもいかず二階に上がってお嬢様の私室へ。養父の私室ほどではないが少し肌寒い冷気が満ちている。ドアの傍にかけられた空調のリモコンを見ると、昨晚就寝前に合わせた温度より三度も下げられていた。そして親譲りの暑がりさんは薄い掛け布団を蹴飛ばし、タオルケットをお腹に巻いて寝息を立てていた。寝ている間に暑くなって脱いだであろうバジヤマの下の方が丸まってベッドの片隅に追いやられている。下半身パンツ一枚の姿をお嬢様と呼ぶには些か難しい気持ちはあるが、それでも敬愛するお嬢様に変わりなく。

「お嬢様、朝ですよ。さ、起きましようね」

「ん~~~~ねむい」

「早く起きないとアニメが始まっちゃいますよ」

「む。ん……おきる」

とろんとした瞳と目が合う。かんなど同年だがずっと幼さが顔立ちに残ったままのお嬢様——初鹿野樹里が目覚ます。

「おはようございます、お嬢様」

「おはよお、かな」

二度寝阻止で立ち上がるまで黙って待ち、一緒に廊下に出る。

「樹里おしっこしてくる」

「はい。ぐゅっくり」

樹里の寝起きはまず排尿から。鍵のかかってないドアの横で朝のおしっこを聞き届ける。

「おしっこいっぱいでした」

「今日もお手洗いで済ませられてえらいですね」

一緒にキッチンへ向かい、ぼーっとテレビを眺める樹里の様子を見ながら朝食の準備。スクランブルエッグとウインナーを準備し、食卓に着いたところでちょうどアニメが始まった。

揃っていただきますをして、テレビを見ながら朝食の時間。

「お嬢様、見ながらいいですがご飯も食べましようね」

「うん」

いわゆる日曜朝の子供向けアニメの時間は子供が起きてくれるから助かっているのかなとか。初鹿野家も恩恵に与っており、土曜日に比べて二度寝率は格段に低い。

中学生の女の子と妖精めいたマスコットキャラがわいわいしているちいさいおんなのこ向けアニメ「キュアアリス・リズム・レイン・ボーダイブ」を鑑賞しつつ完食。食後はアニメの後半を楽しみながら紅茶とアイスミルクティーでほっと一息。

アニメが終わり午前九時。男の子向け特撮には興味がないので歯磨きをしに二階の洗面所へ。それからは各々部屋着に着替え。

先に着替えを済ませて樹里の身だしなみを整えてあげて、いつものように口酸っぱくトイレに促そうと思っていると、

「樹里トイレしたいからかなも一緒に行き！」

「お、お嬢様が自らお手洗いにいきたいと言うとは。出そうですか？」

「わかんないけど、うんちするの楽しみだったから」

催していなくて出るかわからないうんちのために、トイレに入るのを面倒くさがる便秘体質の樹里だが、今日は珍しくやる気もとい出す気のようなだ。

(楽しみ……なるほど。毎日すつきりだと気持ちいいですからね)

「ちゃんと朝から大きい方がんばるお嬢様はえらいです。応援しますから、一緒にトイレに行きましょうね」

「うん！」

昨日の朝に排便があつたので、便秘がちだと普通ならお通じが来ることはないし、樹里も出ないとわかつていてトイレに入ってもがんばらない。それが自分から排便に挑戦する……口うるさくトイレの習慣をつけさせたことが実つたのだと、かんなは顔には出さず心の中でガッツポーズ。

一五ちゃんのトイレ習慣トレーニングの成果が嬉しくて、ちよつと微笑むメイドちゃん。

「今日もうんち出るかな？」

「お嬢様はいい子ですから、きつといっぱい出てくれますよ」

「そうだといいなあ。かんなが一緒だから出る気がする」

トイレ前の洗面台横のカゴに着替えたばかりのワイドパンツを脱ぎ入れて、トイレに入っていく。うんちをするときは「スカート以外は邪魔だから」と自宅トイレでは下半身パンツ一枚が癖になっている。はしたない癖も、かんなを信用して鍵をかけないことも今日は指摘しない。樹里のせつかくのやる気を削ぐほどかんなは迂闊ではない。

「じゃあ樹里うんちがんばってみるね」

「はい、がんばってください」

「すうー。うーん、うーん！」

脚を大きく開き、お腹の前で両手をグーにして踏ん張り始めた。

「うーん。うーんっ。うーん……っ。うんっ！」

静かにじつと息むかんなどは対照的に、本当に子供のようになかなかいい声で踏ん張る樹里。ドアで視覚が遮られていれば幼児か小学校低学年の子が懸命にうんちをしていると微笑ましく聞き届けられるが……トイレでがんばっているのは一五ちゃんの高校一年生。

「どうですか、お嬢様。大便是出そうですか」

「んー、わかんない。まだ待っててくれる？」

「どれだけでも待ちますよ。でも無理に息み続けると逆効果ですから、出なかつたらまた今度でもいいですよ」

「もう少しうんちがんばる」

また踏ん張り始めたので微笑ましく見守る。

「うーん！ うーん！ うんっ。うーん！」

(おとといに四日分の大便をして、昨日も朝に少し排便。それなのに今日もがんばられるとは。何か心境の変化でもあつたのでしょうか)

「うーん、うーん……あ。うんち、でる、かも」

「いいですね。もう少しですよ。今日もすつきりしましょうね」

「んーっ、んー！ うんち、出てえ……。はあ、出ない」

それから一分、一生懸命に踏ん張っていたが喜びの声は上がらなかった。

「やっぱりうんち、出ないかも」

「せつかくですからもうちよつとだけ、がんばりましょう。私も応援していますから。はい、うーんっしてしましょうね」

「ん……じゃあもう少しだけ、う～んってしてみる」

「その意気です。お嬢様、う～ん、う～んっ」

「う～ん、う～ん……」

ついつい樹里を子供扱いするように、擬音で排便を促してしまつたが真剣に受け止め気張るお嬢様が

にち、にちち

効果はあつたようで、肛門から黄土色が頭を出した。

「んっ。うんち、でそう……。うんち、でる、っ」

「その調子です。はい、う～ん、う～んっ」

「う～ん！ う～んっ！ うんっ、う～んっ!!」

にちにちにちにち……ぼちゃん！

「あっ、うんちでた！」

「よかつたですね、お嬢様」

「んん……まだでる。う～ん……っ」

むりゅむりゅ とぼん

「はああ、でたあ」

小ぶりのうんちが濁つた水面を打って、樹里の排便は終わった。すぐさま壁のパネルを操作し、温水洗浄でお尻を洗う。人肌に優しい温水で便のかすを落とし、たっぷりとペーパーを巻いてお尻を拭う。

「すごい……いい形のバナナうんちが出た」

「嬉しいですね」

「見る？」

「見ません」

水を流してトイレから出てきたのでワイドパンツを手渡す。

「今日もうんちがでてすっきりした！」

「がんばって大便ができるなんて、お嬢様はえらいです」

褒められ待ちを察して頭をなでなで。くすぐたいとばかりに満面の笑みをかんなに向ける。

「んふふ。うんちがでるの、きもちいいね」

（お便秘だったお嬢様ですが改善の傾向にある、のでしょうか。とてもいいことですな）

「はい、じゃあ次はかんなの番ね」

「私の番……ですか？」

「昨日はかんなが先だつたから今日は後、でしょ。はい、どーぞ」

ドアの前から退いて、トイレを譲るように手のひらを差し出す。何を言っているのかわからず困惑していると、

「次かんながうんちする番だよ」

「あの、えっと、私は別にお手洗いに用はないのですが」

「もしかして今日はうんちしたくないの？ 樹里は今日も出たんだからきつとかんなも出るよ」

「ええと」

何か約束をしたのか頭をひねるが全く思い出せない。

「あれ？ これから朝はいっしょにうんちするんじゃないの？」

「そんな約束をした覚えは……」

「えー！ かんながいっしょにトイレ来てくれるから樹里うんちするのがんばったのに！」

かんなは合点がいつて、同時に激しく赤面した。昨日かんなが便意を告白して用を足した後、樹里も催したと言つて入れ替わりでトイレ



を利用した。自分が大便を済ませた後のトイレを利用され恥ずかしさのあまり脳の処理能力がパンクしている間に何か言ったり言わなかったりしたような――。

「申し訳ございません、あの、ちょっと、覚えていなくて、ですね。」

そもそもお嬢様が朝トイレをするときは一緒にいるじゃないですか」

「ちがうの！　かなと仲良くかわりばんこするのがいいの！」

怒って顔を赤くするお嬢様。昨日のことを思い出し赤くなるメイドちゃん。

「……うんち、したくないの？　それとも樹里のした後はやだ？」

「別にお嬢様の後でも入れますが、今はお手洗い、大丈夫なので」

「もしかしてもう済ませちゃった？」

「あの、えつと……はい、かなはう、うんこ、もう、したので」

「ふうん……。あつそう。じゃあ樹里お部屋でまんが読んでるから」

「でしたらリビングで一緒に」

「今日は一人がいいから、ほつといてね。つーん」

唇を尖らせ、あからさまに不機嫌に私室に引っ込んだ。

（あ、拗ねてしまいました。知らぬ間に約束して忘れていた私が悪いのですが。一緒にうんこ、なんて）

昼食の頃には機嫌にもわかによくなっており、食べ終わりのタイミングでかなが謝ると「別にいいよ」と仲直り。一時的なもので胸を撫で下ろしたのだが……。

「樹里うんちしたくないから今日はしない！」

「お嬢様、せっかく最近はお通じの調子がいいのですから、今日もお手洗いに入ってがんばってみましょう」

「やだ！　どうせ出ないもんっ！」

一歩前進したはずのおこさまお嬢様のトイレトレーニングは二歩下がることになったのだった。

## ◇ 七月 第三週 金曜日／5

初鹿野かなんの朝……がちよつと早くなつて間もない金曜日。

「うんっ、うんっ、んん……はあつ。んっ……！」

六時五〇分。かななは一階トイレに籠もり、緊張っていた。

「ん……ふう、ん、んっ。うん……はああ」

（今日も全然、大便が出ません……）

樹里を起こす七時前にはかななが大便を済ませるいつもの時間。だが普段なら用を済ませているかほぼ終わっている時間。

「んんっ、ん、んううっ、んっ」

かななはまだ、少しも大便を出せていなかった。おしっこで染まった便器の中は、黄土色や茶色――固形物は欠片もない。

（せっかく早めにお手洗いに来たのに、出ないですね）

昨日から少し早く起きたことで確保した五分弱。それは成果なく費やすこととなった。今週の月曜日から強く自覚した「便意はあるが排便に時間がかかり、すっきりしない」状態は改善されることなく、かななは昨日から少し早く起床することでトイレの時間を増やすことにした。今までは三分程度ですっきりできていたのが今週から、正確には日曜日から時間がかかるようになり、今では五分かけてもうんこの頭が出てこない。

更に時間をかけて気張り続けていればなんとか出てくれるのだが、とても快便とは言いつらく、残便感もある。

「ん、ううっ、ん……」

みち、っ

(あ、でそう、です)

時間をかけて便意を膨らませた努力が、実を結ぶ。ようやく大便の頭が肛門から顔を出した。少し乾き気味の濃い黄土色が匂い立つ。

(もう少し、ん、大便が出る)

「ん、ん、うんっ。んー……っ！」

みち みちち…… にちにち ぶりっ！ どぼんっ

(はぁあ、大便、やっと出ました……)

おしっこに染まる便器に、平生より若干大きめの大便が浮かんでいた。昨日も大便を出し切れずにいたため、長く腸に滞在した老廃物のようだ。

それから何度か気張り続けたが、やっと掴んだ便意は一度の解放で霧消したらしく、諦めて後始末。白い紙を疲弊した肛門に何度か押しつけ、成果を見ずに水を流す。

「はぁ……」

(大便が出ましたが、すっきりしなかったです……)

毎日の排便は継続しているが、日に日にトイレに滞在する時間もある量も、そして消費する体力も伸びていく一方。

(出るには出ますが、このままでは出なくなるかも、です。早く何か手を打たないと……。このトイレでもほとんど緊張しなくなったはずなのですが)

五日前の一階トイレでの不調が『少しでもお嬢様に近いトイレで排便に臨んだから』というかなんかの推察は正しい。だが今も快便の習慣に不調を来しているのはもつと別の理由であることには、気付けない。(早く快便に戻らないと。お嬢様を起こす前に済ませないと、やはり不安です)

募り続ける焦りを抱きかかえたまま、憂鬱な一日が始まる。

「うーん、うーんっ！」

ぶうううっ！

トイレに大きな放屁の音が鳴り響く。

「お嬢様、具合はどうですか」

「うんちが出ない！ おならばっかり出る……」

朝食後、歯磨きを終えてからトイレに入って既に五分近く。長引くことを見越して先にパジャマから制服に着替えて戻ってきたかなを出迎えたのは、盛大な放屁だった。

いつもは二度目の朝トイレに行きたがらず、着替えて身だしなみを整えてから、かななが促してようやく排便しようとする樹里だったが、今日は着替えを待たずしてトイレに籠もった。

『なんかお腹が張ってるから、先にうんちしてみろ……』

日曜日に健康便を出してからお通じはなく、樹里は五日目の便秘を迎えていた。便秘体質といえど重度の症状ではなく、調子がよければ三日から四日で出すことができていた。

運悪く五日も溜め込んでも詰まる硬質便で便意が起きて、一応は排便できる。それが今日は便意もなければ放屁ばかり。

「うんち、うんちしたいよお」

疲れたのか踏ん張り声はしない。代わりにお腹を擦る音が絶えない。

「お嬢様、出なかつたらもういいですよ。そろそろ出て、支度しましょう。かわいいお尻が切れてしましますよ」

「いつもはもうちよつと息んでみてつて言うのに……。もう少しだけうんちしてみるから、ほつといて」

大便が出ないイライラが樹里の言葉を尖らせる。

「うう~~~~ん！ うんっ！ んー！ うう~~~~んッ！」

顔は紅潮して真っ赤、擦り続けたお腹は薄赤く腫れ、握りこぶしを作り続けた左手も赤い色。ピンク色の肛門は一向に径を拡げる様子はなく、見えるのは暗い空洞の黒。

「うんちつ、うん！ うんち出てよお、はあつ、ふんっ！」

（がんばってください、お嬢様）

「うんち出てえつ、うんち、うんち、うう~~~~んッ！ っあ」

ブーッ！ ブボボボボボッ！ ブウーッ！！

「はあーつ、もお……。やだあ。もういい、トイレでる……」

今日一番のおならに咳き込みながら、紙を巻き取る。ほどなくして樹里は明らかに落胆した表情でトイレから出てきた。

「お嬢様、お腹は大丈夫ですか？」

「大丈夫なわけないでしょ……。うんち、出ないんだもん。おならしか出ないし、はあ、おなか痛い」

「ひとまず、お着替えしましょうか」

かんなは特に樹里のお通じについて深刻には考えていなかった。

一步前進したと思えたトイレの習慣が元に戻り、また便秘になった

だけだろうと、慰める。

たまにあった長めの便秘と同じだろうと、深掘りを放棄する。

献身的で心配性なかんなが、ただの便秘だと侮っている——わけではなかった。

自身のお通じの不具合に気を取られて、気遣えない。

（私もお通じが良いとは言えないですし、今日したくならなければいいのですが）

「お嬢様、大きい方がしたくなつたら我慢してはいけませんよ。学校で我慢したら、また出なくなりますからね」

「わかつてるもん。言われなくても、樹里いい子だからトイレ行けるもん」

こうして不安と不調と不明なお腹の具合をどうにもできないまま、二人は金曜日を乗り越えたのだった。

#### ◇ 七月 第四週 日曜日／7

「ん……。うん……。うんっ。——はあ」

みちみち みちみちにち ぶりっ ぽちゃん

（大便、やつと出た……！）

色の優れていない息み声と、濡<sup>も</sup>のかかった溜め息。

よく晴れた日曜日にはふさわしくない憂鬱な顔色で、かんなは再び気張り始めた。

「うん、うん、ふうんっ……。はああ」

嘆息し、少し汗ばんだお尻を拭って重々しく立ち上がった。見下ろ

した便器には赤子の拳大の大便が、一つ。かんなが一〇分かけて捻り出した汚物も、水を流すとあつけなく下水に押しやられていつてしまふ。

一応トイレの外の気配を探って、さつと飛び出した。

（大便、出た……ですが、すっきりしない、まだ大便がしたい……）

手を洗い、乾ききっていない利き手をお腹にあてがう。僅かな便意を息んで絞って膨らませ、やつとのことで排便したらなくなつて。擦ったところで再び蠕動は起こらなかった。

一階の廊下にはかななひとり。トイレに入る前からずっと強ばつていた表情と肩の力が抜けていく。

呼吸が気持ちいい。一〇分ぶりのこもっていない空気が、気張り続けて火照った肺を涼ませる。

（早くお嬢様を起こさないと。はあ）

一日一回、苦勞して朝食前に——具体的には樹里を起こす前に排便できるように身体に覚えさせた朝の習慣。

お腹が空っぽになるように就寝前の飲食を控えて、起きたら水を飲み、便座に腰掛けたら息む。それらを習慣づけて、繰り返す。臭いを嗅がれたり、温もりの残るトイレを明け渡したり、後から催して便意を告白したりしないよう、毎朝快便を心がけた女の子。

大便は出た。一日一回のうんちをしてスッキリの、はずなのに。

（もつと大便を出して、すっきりしたいです……）

ここ一週間、かんなは残便感に苛まされていた。

便意は催すし、出ることは出る。一日に一回、朝にうんちができる。だけど、今までのように快便というにはほど遠く。

（今日の便の量もあまり多くなかったですし、少し乾き気味でした。昨日の朝に出し切れなかった分が、出たのですね）

普段の調子ならちゃんと排便できたはずの大便が出口近くに居座り、更に水分を吸収されて直腸に送られる。そして翌朝に便意を催して、一日遅れでトイレに流される。

（このまま快便に戻れなかったらかななもお便秘に、お手洗いに時間がかかるようになったら、お嬢様の前で催すかも……）

かななの考える便秘とは、排便のない期間が三日以上ないことだった。快便体質になる前も特に意識することなく二、三日に一回のお通じがあり、時間がかかるような経験もなかった。

だからこそ、トイレに通って根を詰めても排泄欲を満たせないことに苛立ちを覚える。焦る。不安になる。

（昨日も全然出なかったのに今日もちよびりだけしか出ませんでした。きつと明日はいっぱい出せるはず、ですよ）

二階に上がり、樹里の私室に向かう途中、トイレの前を通る。

（こんな調子ではこのトイレで大便なんて、できませんね）

お嬢様の私室に一番近いトイレで朝の排便ができれば、きつと恥ずかしがることなく便意を伝えられるようになる——そんな健気で恥ずかしい努力の第一歩、一階トイレで朝の習慣は早くも躓いていた。

（今日は一応出ましたから、また明日からがんばりましょう）

昼食後、樹里を買い物に誘おうとかんなは樹里を探して屋敷を歩き回った。リビング、私室と巡って二階のトイレに寄ると鍵はかかっていなかったが、カゴに部屋着のズボンが無造作に放り込まれていた。

わざわざ脱いでいるということは、うんちをしているらしい。

「お嬢様、今よろしいですか？」

ちゃんとノックをしてから、声をかける。

「……なに？ 樹里いまうんちしてるから、後にして」

「もしかしてお通じですか？」

「ちがう。お腹いたいから、う〜んってしてるの」

声に張りがなく、そっけない。昼食後の蠕動で腹痛を起こしているのではなく、便が詰まって腹痛が起きているようだ。

「お昼ご飯の後にお手洗いでがんばるお嬢様はいい子ですね。どうですか、うんちは出そうですか？」

「出なさそう」

「そうですか……。私はこれからお買い物に行きますが、お嬢様も一緒にいきますか？」

「今日気分悪いからお家にいる……。お腹いたいからお外出たくない」

「まだ時間はありますし、すっきりしてからでも、」

「全然うんち出ないから無理！ かなだけで行つてっ」

ぶうううっ！

怒った勢いで放屁してしまう樹里。相当具合が悪く、かなり気が立っていた。かななもそれは理解していたが、お出かけの際は声をかけないと帰ってきてから怒り出すし、たまに泣きながら電話をかけてくるので誘わざるを得なかった。

（気分転換になると思いましたが、一人で行きますか）

「何かありましたら電話してくださいね。すぐに帰ってきますから」

「うん」

最後に排便したのは先週の日曜日。数えて七日目の便秘は樹里にとって珍しく、相当の負担になっている。つい一時間前の昼食のパスタも食べきれず、かななが代わりに完食したぐらいだ。

（どうすればお便秘を解消させてあげられるでしょうか。お薬……はダメですね。使つて嫌われるのは止むなしですが、お薬に慣れてしまふとお嬢様のためになりませんし。今日の夕食は食物繊維たっぷりのメニューにして、便の量を増やせば押し出せ——しかし余計に圧迫する可能性も。ですが私も便通が滞っていますし、野菜中心にして。はあ、どうしましょうか）

長考を繰り返しながら夕食の買い出しへ。あれやこれやと悩みつつ、両手いっぱい買い物をさげて帰宅した。

「お嬢様——？ 帰ってきましたよ。どちらですか？」

食材をしまつてから、リビングや私室を探して回る。まれにお留守番をした日は帰ってきた気配だけで走って駆け寄ってくるのに、足音も声もない。

……ぶうっ ぶううううっ！

樹里の私室に顔を出し、不在に首をかしげていたときだった。静かな廊下に、乾いた音はよく聞こえた。

（おならの音……二階のお手洗いでしたか）

なんとなく足音を殺して忍び寄る。トイレのドアは半開きになっており、部屋着のズボンが床に落ちている。

「ううん、ふううう、ふううううん！」

ぶ〜っ！ ぶす〜っ

（お嬢様、まだ大便が出ないのですね……）

「はあー、もおーっ、なんで、出ないのお」

かんなが出かけている間に僅かに便意を催して、便器に腰掛けた樹里だった。どうやら結果は伴っていないようだ。息み声は重苦しく、放屁は止まらず留まることを知らず。

「やっとうんち出ると思ったのに。う～ん！ う～んっ！」  
（そつとしておいて、あげましよう）

敬愛すべき主が苦しんでいるとき、傍に寄り添うのが自称でも使用人の役目。常々自らに言いかせてはいるものの、時と場合による。お節介が大概煙たがられることは承知していて、それでも世話を焼くが、今は控えるべきだろう。

せっかくトイレで集中しているのに声をかけられては、ささくれ立っている心が余計にとげとげするだけだ。

気づかれないように立ち去り、キッチンでオレンジジュースを氷いっぱいグラスに注ぐ。太陽が中天から逸れたとはいえ、真夏のトイレは暑苦しい。

「あ、帰ってきてたんだ。おかえり」

「つい先ほど戻りました。ちょうどジュースを持って上がろうと思っておりましたが、こちらで飲みますか？」

「うん。汗かいちゃったから、今飲む」

何も知らなかったように接することしか、今はできなかった。

◇七月 第四週 月曜日／8

水の入ったミネラルウォーターを一気に飲み干す。

キンキンに冷えた液体が急に流れ込み、胃がびっくりして縮こまる。空いた左手で思わずお腹を掴み、痛みを堪えた。

（これで少しは催してくれるでしょうか）

一般的に消化器官が空になるまでに八時間かかると言われている。

いわゆる「朝ご飯を食べたら便意を催しやすい」というのは空っぽになった胃に食べ物送られることでより大きな蠕動が起こり、便意が生まれるためだ。

お嬢様を起こす朝食前に排便を済ませたい以上、寝起きの水分摂取は忘れてはならない習慣となっている。当然、就寝前の間食は厳禁。

いつもはコップ一杯の水道水で便意を促しているが、より強い刺激を求めて水を氷で冷やしたらいい。

（ふうう、おなかが痛くなるのはわかっていましたが、冷蔵庫で冷やしただけの水でもよかったかも、です）

痛みが引いて、お腹の上で渦巻き模様。もちもちのお腹のお肉越しに触れた手に、お腹の動いた感触はない。

（朝に排便がなかったら、また身支度るときや通学中に便意を催してしまうかも、しれないですからね。いえ、そのときはちゃんと大便がしたいと言えますが。言える……思い、ます、が）

『ちゃんと、う、うんこ！ したいって言うるように、なりましゅ……』  
樹里の前で嘔みながら言い切った約束を思い出し、寝起きのお顔が典型的な音を立てて深紅に染まり上がる。

かあああつ！ と、耳の先まで、トマトみたいに真っ赤になって。

（かんなは約束を守るので、次こそは我慢できなくなる前に、うん

がしたいと言えます、言えるはずですが、が……どうしてもおトイレに行きたくならないように努めることは、いいことなので」

「かんなのおなが、ぐるぐるしてきますように」

数一〇分後の排便タイムに思いを馳せ、三人分の朝食とお弁当を作り始める。

（今日こそすっきりいっぱい、大便が出るでしょうか。出ると、いいのですが。お便秘のときの気持ちが、少しわかったかもしれません）

かんなに便秘の経験はない。初鹿野家に来る前は数日に一回のリズムでうんちをしていたし、樹里のことを意識するようになってからは快便体質を目指して、朝に出なければ当日必ず催すようになった。

全然出なかった、すっきりしない。今日は出るかも。

残便感と、次への期待。今までのかんなには知り得ない感覚だった。

長期間排便がないことも便秘だが、便を十分量かつスムーズに排出できないこともまた、便秘の症状とされている。

今のかんなも便秘と呼ぶにふさわしいだろう。

「さて、お手洗いにいきましょう」

六時四〇分。かんなは少し浮き足立ってキッチンを後にする。

ぐるぐるぐる……

（ふふっ、いい感じの便意です。大便、いっぱい出そうです）

五分前から感じていた排便欲を少し堪えつつ、ご飯の準備を済ませたかんな。痛くないお腹の動きに、心地よい排便欲求。すっきり出せる予感がいっぱい詰まったお腹を撫でながら、トイレに向かう。

（ここに来る前の私は二、三日に一度の排便が当たり前でしたが、便意を催してもこんな気持ちにはなりませんでした。やっぱり毎日決

まった時間に大便をして、すっきりした気持ちで一日を始められるのは、いいことです）

ばたばたとスリッパを鳴らし、トイレの前へ。最初に入るのにも時間がかった一階トイレも、さすがに一週間毎朝通い詰めれば慣れたもの。……緊張せず排便できるかは別として。

ともあれかんなはすぐに便器に座りたい一心でドアを軽快にノックした。

「入ってるよ」

「え、幹臣様」

癖でノックをしただけで、返答があるとは思っていなかったかんなは面食らう。ノック即握り締めたドアノブを見ると、窓が赤くなっていた。幹臣が自分の力で起きるのは朝早い仕事があるときぐらいで、かんなは幹臣と鉢合わせることを一切警戒していなかった。気にするべきは樹里だけで、別に大きい方をした後に幹臣に入られても何も恥じ入ることはないと思っていた。

「ちょっと朝からお腹が痛くてねえ。かんなちゃんもトイレなら二階の方に行ってもらえると……いたたた」

「いえ、あの、あっ、そうです、起こしに来たらいらっしやなかったの、その」

「しばらくトイレ離れられないから、先に樹里ちゃん起こしてあげて。ううっ！」

「あ、はい。お大事に……」

我慢を察し急いでかんながトイレを離れると、聞くに堪えない空気が混じりの排泄音。いくら義理の家族でも異性に下痢の音を聞かれるの

は恥ずかしかったのか、恥ずかしげもなくゆるい音を鳴らしてデリカシーがないと思われるのを疎ったのか……。かななは極力聞いてあげないようにトイレを離れた。

(さて、あの調子では一〇分は出てこないでしょうね。一階のトイレを待っているとお嬢様を起こす時間が……仕方ないです)

かななは階段を上がり、二階へ。少し歩幅の小さい足取りで二階のトイレの、閉ざされたドアの前に立つ。ドアノブの窓は青色で、洗面台横のカゴに着衣は入っていない。恐る恐るノックをしてみる。返事はない。今度こそトイレには誰もいない。

(大便が、したい。まだ時間はあります。でも、お嬢様が起きてきたら、たまたま尿意が強くなって、起き出したら)

樹里の寝起きの行動は、二階トイレでおしっこ。かななの排便している最中に訪れない保証はゼロ。樹里を一階トイレに誘導しても幹臣が籠城しているし、用を済ませて空いていたとしても「パパが入った後はやだ!」と二階に戻ってくるのは想像に容易い。

(便意、いい感じなのに。どうしましょうか、お手洗い……)

毎朝快便のためにお世話になっていた客間前トイレに駆け込む考えはなかった。お嬢様が近くにいると排便できるように、と少し近いトイレから慣れていつている最中に、自ら誓いを破る選択肢はない。

(さすがに幹臣様が済ませるまで待つのは、時間が……ないですし) 具合が悪い以上いつ出てくるかわからない上に、人生を救われたレベルで大事にしている養父とはいえども、腹を下した後のトイレは少し……ちよつぱり? 入りづらい。

(いえ臭いが気になるとかではなく、幹臣様も嫌がるでしょうし)

だから今は、二階のトイレしか利用できない。多少リスクはあったとしても、今を逃せばしばらくゆっくりと排便できる機会はないだろう。ただし時と場所を選ばなければ、いくらでもある。

……樹里に申告して大便をするタイミングなら、どれだけでも。

かななは慎重にドアノブを回し、そっとドアを引いて飛び込んだ。一週間と少し前、朝の排便を逃して巡り巡って帰宅後、漏らす寸前で駆け込んだトイレ。樹里にうんこを我慢していたことを気づかれ、恥ずかしい約束をするきつかけとなった場所でもある。

(きつとお嬢様は起きてきません。ですから)

抵抗はあってもトイレに入ったことで覚悟は決まったのか、便座に腰掛けるまでは早かった。いつもおしっこをするのに使う便器にお尻を向け、バジヤマのズボンとショーツと一緒に下ろし、そっと着座。暖房機能がオフになった便座がひんやり気持ちいい。

「ふう……。すう、はあ……んっ」

ぶるっ　ぶるるっ　しゅいつ　しゅうううう……

まずは朝一のおしっこ。尿意はあったものの緊張しているせいか呼吸を落ち着けてやっと尿道がゆるんだ。

(早めに大便を済ませないと……!)

「ふんっ、うんっ」

たつぷりと放尿し終わり、いざ大きい方チャレンジ。小さなお尻のベストポジションを定め、息み始める。

(お嬢様が起きてくるかもしれないのです、早く、早く、大便を出さないと、大便、出てください……)



神様ごっこ

灰屋

一

稲刈りが終わって村はすっかり寂しくなりました。

川の南側に広がる狭い田んぼに落ちていた落ち穂は、すっかり拾われました。田んぼは刈られた稲穂の跡だけが残っています。

一匹の狐が、里山の斜面に掘った巣穴から出ると、あたりをきよきよと見まわりました。そうしてのびをしてから、真新しい落ち葉だらけの斜面をすりと降りて、川を渡りました。食べ物を探しに川の向こう側の村の家々のほうへ向かったのです。

とある家の軒先に、川魚が何匹か干してありました。狐はそれを見つけると、食いついてやろうとびよんびよん跳び跳ねました。

そうしているうちに、狐に気づいた家人が鎌をもってやってきて、「またか、この盗人狐め」と怒鳴りつけたので、狐は飛び上がって逃げ出しました。

狐はやつとの思いで村人から逃げ切りましたが、あんまり懸命に走ったので、疲れ果ててしまいました。

どこか休むところはないかと探しながらとぼとぼ歩いていると、いかにもみずばらしく、見捨てられたような神社が目に入りました。

狐は、その神社の軒下に、体を丸めて入り込むと、なんだか眠くなっ

て眠りに落ちてしまいました。

川の下流の町のほうから、灰色の寂しい色をした雨雲がやってきました。やがて、ぼつりぼつりと冷たい雨が降り出し、そこらが落ち葉の濡れた匂いでいっぱいになりました。

狐は雨音でも起きずに寝息をたてていましたが、ぱたぱたという足音が近づく音でにわかに目を覚ましました。

足音は、神社の屋根が張り出している賽銭箱の前で止まって、はあという息遣いに変まりました。

狐は息遣いの主の顔を見定めようとこつそりと軒下から顔を出しました。賽銭箱の前にいるのは、可愛らしい娘でした。その娘は、風呂敷と竹かごを脇に置いて座って休んでいました。その風呂敷からなにやらいい香りがします。

油揚げだ、と狐は思いました。途端に狐は空腹を感じました。

狐はどうにかしてこの油揚げを手に入れたものだ、はて、どうしたものか、と悩んでいましたが、やがて、にやりとしました。この狐は悪知恵が働くもので、いいことを思いついたのでした。

早速、狐は神社の裏の戸に開いた穴からお堂へ入ると、鏡や、色々な祭具の雑然と置かれた裏に隠れました。そうして、どこからか葉っぱを取り出すと頭の上に乘せて、のどを小さく鳴らしました。それから、さも、ものものしい低い声を出して娘に呼びかけました。

「おい小娘」

急に呼びかけられた娘はたいそう驚いて、あたりを見回しました。「おい、こちらだ」

と狐は娘に言いました。

娘は、おっかなびつくりとお堂の扉をそうと開いて、薄暗い中を覗き込みました。狐はそのおびえた様子をみて、にやりとしながら、言葉が続けました。

「おれは、この社の神だ。訳あって、長らく留守にしていた。しかし、久方ぶりに来てみればどうだ。この社はそんなに扱われるばかりか、小娘なぞが勝手に使いおって」

娘はもう小さくなってぶるぶる震えて頭を下げました。

「すいません。雨宿りしたくて」

「どうやら、恐怖で舌が回らないとみえる娘は、狐の演技を疑いもせず信じて切ってしまったようです。狐はますますいい気持ちになつて続けました。

「まあ、よい。おれは心が広いんだ。それより、お前の風呂敷包みの中からたいそういい匂いがするなあ。それを供え物としてもらおうか」

狐が油揚げを欲しがると、娘は顔色が悪くなりました。

「でも、その、それはたのまれた……」  
と言ひ淀みました。

狐は低い声で娘に言いました。

「聞こえなかったのか」

娘はおびえ切った顔で飛び上がって、賽銭箱のところまで駆けてゆきました。風呂敷の結び目をほどくと、中から油揚げを四、五切れ取り出して、狐の前に戻ってきました。

「そうそう。うむ。実にうまそうだ」

狐が鏡や祭具の裏で鼻をくんくんさせました。

「もういいぞ」

狐がそう言うと、娘は早く荷物をもって雨の中へ駆けだしていつてしまいました。

狐は、娘が出ていったあと、鏡の裏からそっと出てきました。そうして、お堂の中で娘からせしめた油揚げをががつと食べると、すっかり満足して、神社を後にしました。それから巢穴に戻って、すうすう寝始めました。

## 二

狐が目を覚ますと、辺りはすっかり青暗い夕闇の中でした。

雨はいつの間にかやんでいました。狐が顔を出すと風が吹きつけました。風は木立に切り裂かれてあちこちらびうびう寂しい声を上げています。

狐は首を引っ込めて巢穴に戻ろうとしましたが、明るい大きな月が昇つてこようとしているのが目につきました。冷たい風のせいか、月が凜とした空気の中に浮かんで、なんだかとても惹かれたのです。

狐は、月が作る木々の影を浴びながら上機嫌で斜面を下りました。

村の家々も明るい月の光を浴びてなんだかいつもと違って見えました。狐は、軒先になにか食べ物がなだらうか、と家々の前に目をやりながら、家々をめぐりました。

一軒の屋敷の前を通り過ぎようとしたときのことです。

背後からどうしようもなく嫌な感じが湧き立ちました。狐は、思わ

ず後ろを振り向きます。

後ろには誰もいません。

まるで、河川敷のどろりと淀んだ沼や夏の腐敗した木に群がるぼろぼろと崩れる気味の悪い茸を思い起こさせる何かがいたように思えるのです。

狐は、なにか妖の類かしら、と思つて周りを見まわしましたが、どこへ消えたのか、もう気配は追えませんでした。

ただ、風の音だけが聞こえました。

そのうちに、なにやら言い争っている声がしました。誰の声だろう、と思つてあたりをきよきよ見渡すと、その声はどうやら屋敷の中から聞こえるようでした。狐は気になつて耳をすませました。

「なんで、コツキの飯だけ少ないんだ。あの娘は、長峰様の得意先の薬屋から引き取ったんだ。あまり露骨に扱うと長峰様に申し訳が立たないだろう」

頼み込むような男の声が聞こえました。

「あなたは、家にいないからお分かりでないかもしれませんが」

甲高い女の声が続きます。

「我が家だつて豊かではないのですよ。それなのに、『やれ、印象をよくするためだ、娘を預かれ、奉公人が一人増えると思えばいい』といつて無理に押し切ったのはあなたでしょう。どれ、實際来てみれば、貧相な小娘ではありませんが。夏も冬もよく寝込んで、人の半分も働かない。まったくんだ貧乏くじを引かされたものです」

女の声に男は氣押されたのか、先ほどよりも弱々しく反論しました。

「まあまあ、そう言うな。あの娘は、その、かわいそうだろう。一人

だけ奉公に出されたのだ。な。縁起が良くないっていうので……」  
と男は最後のほうを濁しました。

「はいはい。旦那様はお優しいでございますね。あの子が捨てられた娘だから許せ、というのですね。いいですか。あの子は恩を仇で返すような不孝者ですよ。今日、使いを頼んでみたのです。ところが、頼んだ油揚げが半分ないのです。さては、卑しくも途中で腹が減つて食べたのでしょうか。」

そう女の声が断言します。

「そうなのか。なにかあの娘にも理由があるとは」

「聞きましたとも。そうすれば答えは、『神社の神さまにおそなえした』ですつて。あの神社は、もう誰もいなくなつて久しいのに。まったく、神様をだしに嘘をつくにしてももっとありますでしょう」

「それは、まあ、そうだが」

男が言いよどみました。それを見て、女は自分の主張に分があると思つたのか、強い口調で言い募りました。

「そうでしょう。しっかりとしつけはしないと。しばらくご飯は半分にします。大丈夫。具合が悪そうなら元に戻しますから」

「ああ、まあ、ほどほどにな」

男の返事を待たず女は続けました。

「それにしてもいやだわ。仕事を半分にしてやつてるといふのに、あのおどおどした態度。本当に嫌だわ」

女の声はまだ続いています。

なるほど、あの娘は、この家の奉公人だったのか。おれが娘からお

かみさんに渡すはずの油揚げをくすねたから、さぞ叱られたに違いない。そればかりか罰を受けて、ご飯も半分にされているのだ。

狐は、「コツキ」という娘をあわれに思いました。

ふいに、屋敷の縁側に続く戸が少し開きました。狐はあわてて物陰に隠れました。

戸をあけて出てきたのは、あの娘でした。

娘はただ一人、縁側に膝を抱えて座りました。そうして、静かに月を眺めていました。

狐の心には、娘がどんな表情をしているのか、知りたい気持ちが沸き起こってきました。狐はどうしてこんな気持ちになるのか分かりませんでしたが、抗いがたく、狐はそうつと顔を物陰から出しました。

娘は、怒りも悲しみの表情も浮かべてはいませんでした。

ただ、何も感じないといったふうに、月が娘を照らしていました。その細い髪から足の指の先まで光を浴びて、薄白く光って、その影法師は彼女の下にひっそりと控えていました。

狐はなんだか娘がとても美しく、しかし寂しいような気がして目が離せなくなりました。

そのうちに、風が強く吹いて庭の木をざあざあ揺らしました。

娘は、風の音につられて狐のいる方にちらりと目を遣りました。

気づかれたか。

狐は、あわてて、飛び出すと夜の道を一目散に巣穴へと戻っていきま

狐が飛び出してからしばらく、月の光にあたる美しい娘を、黒い大きな影がじっと見ていたことに気づいたものはおりませんでした。

### 三

屋敷の縁側で月を眺める娘を見てからというもの、狐の心にはもやもやが渦巻いていました。なんだか、思い出すのが怖い気がして娘の屋敷がある方を避けるようになって、山にばかり食べ物を探していました。

ある秋晴れの日、狐がいつものように山を歩き回っていました。なぜか、その日は栗や葡萄が面白いように取れました。たくさんとれた栗や葡萄を見ているうちに狐の心の内に浮かぶ気持ちがありました。なんととはなしに、娘が月を見つめる姿が思い出されるのです。

このもやもやをどう扱えばよいか。狐はさまざま悩んだ末に狐はこの気持ちを娘への引け目だと解釈しました。

そうだ、あの娘にこの栗や葡萄を持って行ってやろう。狐は、娘を何かしてやろうという気になったのでした。

そう決めると、狐は拾い物の壊れかけた籠に栗やら葡萄を入れると、久方ぶりに村へ降りて行ったのでした。

村へ着いて、狐があたりをきよきよ見回していますと、コツキが前の神社へと入っていくのが見えました。

あのさびれた神社に何の用だろう。不思議に思いながら、狐は、そっ

と神社の裏へと忍びよって、お堂の中の様子を伺いました。

中では、コツキがお堂の中に放っておかれていた古い箒で床を掃いていました。

どうしてこんな誰も来ない神社の中を掃除しているのだろう、そう思った狐はまたこの前と同じように鏡や祭具の裏に隠れて、声をかけました。

「おい、娘。何をしている」

コツキは手に持った箒を落とさんばかりに驚いて、こちらを見ました。驚くさまが、初めて会って、自分がコツキにひどいことをした時のことを思い出させて、狐は苦い気持ちになりました。

「驚かせるつもりはなかった。おまえはなぜ社を掃除しているのだ」  
娘は、自分が何かしただろうか、とびくびくしながら話し始めました。神様の態度が出会った時と打って変わって柔らかくなっていたからです。

「神さまのお住まいなので。戻られて、お住まいが荒れていたなら寂しいと思って」

狐はまるで頭を殴られたかのような思いがしました。

自分が何も考えずにいた「社をぞんざいに扱うな」という言葉を信じるものがあるのか。

おれのせいで、自分がそれでひどい目にあったのだぞ。それで、社を荒らさないようにと掃除しに来ていたのか。

狐の中に、ある気持ちが芽生えました。

口を開けないでいる狐を見て、説明が足りないのかと思ったのか、

コツキはたどたどしく言葉を続けました。

「その、昼でわたしのしごと終わりだ、ので、お社の掃除……」  
狐は思いました。

この娘の為に何かしてやりたい。

狐はある考えを思いついて、にやりとしました。

この娘がおれを神様だと思っているのならば、だまし切ってやろう。おれのせいで叱られた分と受けた罰の分くらいは、ご利益を与えてやろう。

この娘の神様のふりをしてやろう。

「そうか、コツキ。掃除してくれたのか。よい行いだ。立派だ。今日はもうよい。腹は空いたか。栗と葡萄があるんだ。食べるといい」

神様が話しかけると、娘は驚きました。

「名前。なんで知ってるの」

神様は続けます。

「おれは神様だからな」

そういつて「神様」は笑いました。

#### 四

幾日かが経ちました。昼過ぎになると、狐は決まって神社を訪れました。神社を訪れると、たいいていコツキが掃除をしていて、狐が訪れると手を止めてこちらを向いて、挨拶してくれるのでした。

狐はあまりコツキがたくさん神社を訪れるので、心配になり、一度コツキに屋敷はいいのか、と問いました。どうやら体が弱いコツキは屋敷の片づけが終われば、仕事が無くなるらしいのです。最近は体の調子も悪くないから、暇を持て余して、こっそり屋敷を抜け出して掃除をしに来ている、ということでした。

狐は、月の晩に聞いた屋敷のおかみさんの声を思い出して、本当に暇だから来ているだけだろうか、と心の内で思いましたが、口には出しませんでした。

コツキが掃除をしている間、狐はコツキに話しかけました。しかし、コツキはなかなか自分のことを話ませんでした。そこで、狐は山で見た不思議な妖の話や仲間たちのおかしい出来事を語るばかりでした。コツキはなかなか大きな反応こそしませんでした。が、ときどきは小さくうなづいたり、少し笑ったりしました。

コツキが、初めて自分からものを言ったのは、夜空の話でした。あるとき、狐は話すことが無くなって、昨夜は何をしていたのか、と聞きました。

「空を見ていました」

とコツキは答えました。

「空？」

「空の、お月様です。お月様の前に薄いもやで。夢のようでした」  
コツキは言葉を選んでゆっくり言いました。

「月か」

そういえば、昨日は月にきれいな月暈がかかっていたいました。しかし、

狐は、あまり注意は払っていませんでした。

「空一面に広がって。綿のように」

真上から方々の黒い山まで、すきとおった乳白色の手触りの良い絹がこの村をすっかり覆ってしまったように。

コツキはゆっくり言い換えたり手ぶりを交えたりしながら、しかし、熱をもって語りました。夢中なことを語る小さな頬はじんわり赤くなっているようにみえます。

あまり、コツキが楽しそうに話すので、狐もなんだか興味を惹かれました。

「月、よく見ればよかったな」

狐はそうつぶやきました。

「よければ、こんや、見ましょう」

コツキが鏡の近くまで来て、目をきらきらさせて言いました。

一人と一匹は約束をして神社を後にしました。そうして、それぞれ場所で月が出てくるのを待ちました。

その夜は、それは、もう。いい、月夜でした。

次の日の屋下がり、狐はいつもより早く、神社を訪れました。そこには、すでに掃除を始めているコツキが居ました。

コツキはこちらに気づくと少しだけ照れたように笑いました。

「よかったな」

狐はなんだか心がぽかぽかするような気がしました。

それから、狐と娘は毎日昨晚の月について語り合いました。月が欠けて見えなくなってきましたと、星や北風の話をしました。

やがて、二人の距離はだんだんと近づいていって、狐もコツキも神社から帰るのが寂しく思うようになっていったのです。

## 五

十月の風が山から吹き下ろして村の家々の戸をカタカタと揺らしします。

コツキの屋敷でも冷たい風が風よけに植えた木々を揺らしてしました。コツキは、カタカタと音を立てる戸をそとと開きました。それから、勝手口から外へ出ました。寒さに思わず首をすくめます。

コツキは、こそそこそとあたりを気にしながら、敷地の端にある厠へと急ぎました。厠の裏まで回って誰もいないことを確かめてから、表に戻って板張りの戸を開きます。

厠はお屋敷への奉公中、数少ない一人きりになれる場所でした。少しだけ息を吐いて、中にある穴をまたぎます。それから、膝まである着物の裾を帯までめくり上げました。お尻が冷たい空気にさらされます。それから、余った布を腕と脇の間に挟んで、しゃがみました。

戸の上にある隙間から風が入り、無防備な尻をびうびうと撫でていき、思わず裾を挟み込む腕に力が入りました。

唇をかみしめて、お腹に力を入れました。

ふすっ。

娘にしか聞こえないごく小さい音が鳴りました。

んぐ、と可愛らしい声が唇から漏れました。

ふしゅっ。ふう。ふしゅう。

朝の静かな厠にわずかに広がるおならの匂い。眠っている間に娘のお腹に溜まったガスが小ぶりのお尻から噴き出ていきます。細い体がいちいち我慢していたものが抜けていく感覚。我慢していたものが出せることの快感から、小さな体から自分も気づかないうちに力が抜けました。

余裕ができた娘の思考は自然と今出したものの奥にあるものに及びました。ご飯が半分になった日からお腹にとどまっている塊のことを思いました。

「そろそろ出て」

小さい声で独りごちます。

ただでさえ小食な娘は、さらにご飯が半分になっていたのも、お腹の重苦しさはそこまですではありません。しかし、それだけ長い間お通じがないのは、初めてでした。

もう半月も出ていない。頭の中で指を折って、数え終えたコツキはなんだか怖くなりました。頭の中では、ぎちぎちにお腹に詰まった黒い塊が想像されます。それなのに、便意が無いのです。娘は自分のお腹の状況を不安に思いました。いつまで出ないのでしょうか。少しでもお腹を動かそうとお腹をすりすりとしはじめました。

そのときです。

コトは、何かの視線を感じました。べとつとした陰湿でぞわつとする不快な視線です。

また、誰かいる。

一人きりになれる空間の中で無防備な姿の彼女は、しゃがんだまま、折れそうな体をこわばらせてます。

誰かの視線は、まだコツキを捉えています。

こわい。こわい。こわい。

小さな体は無遠慮に何かが覗き込んでいます。

なんとか気を奮い立たせて、すばやく着物の裾を降ろしてお尻を隠すと厠を飛び出しました。胸がとくとくと鳴り続けています。

急いで厠の戸の前を確かめますが、誰もいません。裏に回っても何もいません。

まただ、とコツキは思いました。罰で飯が半分になった日から、コツキが厠に入ると誰かの視線を感じるのです。ちょうど、お腹の中のものを出そうとしていると現れるのです。すると、ほのかに便意を感じていても、恐怖のせいなのか、びたつと便意がひいてしまいます。

最初は、気のせいかと思っていました。が、あまりに続くので、本当に誰かが覗いているのかもしれない、と考え始めました。誰か悪意を持った者がコツキの無防備な姿を覗いていると思うと、怖くてたまりません。それはもう不安でした。

しかし、コツキには相談できる人がいませんでした。

そこで、厠に入る前にだれかいなかどうか厠の裏を見たり、耳をそばだてたりして、誰も周りにいないことを確かめてから入るようになりました。しかし、確かに誰もいないことを確かめた後でも、何かの視線を感じるのです。コツキが使う厠は奉公人用の粗末なもので、誰かが隠れられるような場所はありません。だから覗くものがいれば

わかるはずなのに、まったく分かりませんでした。

もしかしたら、他の奉公人も同じことを思っているかもしれない、と考えたこともありました。他の奉公人たちのうわさ話に耳を澄ませましたが、そのような話題は上がりません。それとなく、厠のことをほかの奉公人に話してみたこともありましたが、奉公人は何も答えてくれませんでした。それは、おかみさんに毛嫌いされるコツキと話しているところを見られたくないためでした。

こうして、コツキは、厠の度に何かの視線を浴びるという苦痛に晒され続けていたのです。

コツキは小さくため息をついて、帯の下のお腹をさすりながら、厠を後にしました。お腹の中の不安はそのままですが、とても厠に戻る気分にはなれませんでした。

## 六

狐は、カラツとした空をぼう々と見上げながら、川沿いを歩いていました。考えているのは、コツキのことでした。

近頃コツキはめつきり元気がないのです。近頃は、どこか顔色が悪く、ぼうつとしていることが多くありました。それから、話の途中で外の掃除に行くと話して、お堂の外へ行くことが度々ありました。

どうしてだろう、コツキのことを案じた狐は、昨日、巣穴のある里山に長く住む物知りの天狗のもとを訪れました。天狗は長くこの山に住んでいて、人間のことも、獣のことも妖のこともよく知っているのです。



天狗は、狐がやってくると、さも面倒だというように顔をしかめました。天狗は狐が普段から村人の物を取っては困らせていたのを知っているの、話したくないのでした。

狐は、神社でのコツキの様子がおかしいと言って天狗に聞かせたのですが、天狗はまともに取り合わず、狐は渋々巢穴に戻ったのでした。

狐は神社に着くと、鏡の裏からこっそりコツキの様子を覗きました。コツキはいつも通り床の雑巾がけをしていましたが、水桶に雑巾を入れるときに何やら渋い顔をしています。

狐は葉を頭の上に載せて、どうした、と聞きました。

「大丈夫です。ただささくれが、しみただけです」

そういつて、赤くなつた指先をかばうようにしました。狐は鏡の前に来て見せるように言いました。近くで見るコツキの顔には二キビが少しありました。コツキの細い指には赤いささくれが痛々しいばかりにあるのを認めました。

「そうか、ささくれか。雑巾がけはやらずともよい。水がしみる」

狐はそう言いました。「早く治せ」

「はい」と答えたコツキの顔に暗い影がよぎりました。

狐は巢穴に帰るとまた天狗を訪れました。今度は、天狗の好物の川魚を手土産にして、ささくれはどうやれば治るのか、尋ねました。天狗は、狐を見ると面倒そうな顔をしましたが、あんまり狐がコツキを心配してうるさいので、

「栄養が足りないのだ。聞けばその娘は痩せているのだろう。滋養のあるものでも食べさせれば良い。何かとってこい」と答えました。

狐はそれを聞くと、ばたばたと急いで山へ入ってゆきました。

## 七

その次の日は、風の強い日でした。冷たい風が吹きつけて、山の本々も、村の家の雨戸も、神社の雨戸もひとりで揺れました。

雨戸を開いて、コツキはお堂の中に入りました。

お堂の中には、柿の実がたくさん入った籠が置いてありました。今日は珍しく狐が先に神社へ着いておりました。

狐は、コツキを認めると嬉しそうに、籠の中身を勧めました。

「コツキ、来たか。どうだ。柿の実を食べないか」

コツキは、おいしそうに色づいた柿を見ました。しかし、自分の重いお腹のことを思うと、口に入れても具合悪くなるだろうと思われる。

「ありがとうございます。でも、おなか、空いてなくて」

そういつて、コツキは断りました。

「そうか、でも、一口ぐらいどうだ。コツキの為にとつてきたんだ」そう言われるとコツキも断りがたく、一口食べました。

口に入れると甘く熟れた柿の風味が舌にじんわり広がりました。

「おいしいか」

神様の問いかけにコツキはうなずきました。

すると、もう一口どうだ、と言われました。そう言われるときつきの柿の味が思い出されてコツキは断れませんでした。一口、もう一口と口にするうちに、コツキは柿一個分を食べてしまいました。

コツキのお腹からむかむかした気持ち悪さがせりあがってきて、ごまかすように、雑巾がけを始めました。

しばらくして、胃のむかむかがうっすらと消えて、祭具の置かれた棚を雑巾掛けしているときでした。

こぼぼぼ。

帯の内側から小さな音が聞こえました。ガスがコツキの細いお腹の中で移動する音でした。ずっと溜まり続けているコツキの便はせつせと帯に圧迫されたお腹の中でガスを放出し続けていました。ガスでいっぱいになっていたコツキのお腹をガスが下って行ったのです。

また、おならしたくなってきちゃった。

実はこのところ、コツキはおならに悩まされるようになっていました。お通じがないせいで、お腹にすぐにおならが溜まるのです。

コツキがお堂の掃除をしているときにもたびたびおならがしたくなりました。そうして、我慢できなくなると、コツキは外を掃除しにくく、いつてお堂の外に出て、こっそりおならをしてからお堂に戻ってくるのです。

気体はどんどん下ってお尻の裏側へ下っていきます。今のうちに、ガス抜きをしないと神様の前でおならが出てしまいそうです。しばらくお通じがないときのおならですから、もし出てしまったらひどい匂いが漂うに違いありません。神様の前でそんなことをすれば怒られて

しまうかもしれない。コツキはそう心配しました。

「あの、外を掃きに」

そう言って、コツキは、外へ行こうとしました。

「コツキ、今日は風が強いから、外は掃除しないでいいんじゃないか」  
狐は体を案じる気持ちからそう言って娘を引き留めました。

確かに、お堂の戸は先ほどよりも強く風に揺られていて、外では風が金切り音を上げています。風が強くて掃除どころではありません。

しかし、今のコツキは、支離滅裂な理由でも、外に出てガス抜きをすることしか考えられませんでした。帯に包まれた白いお腹の中を暴れまわるガスを必死に我慢しながら、言葉を探します。雑巾を持っているささくれだった指先に力が入って白く色が変わりました。

「でも、あの外つ。落ち葉」

たどたどしく、支離滅裂な言い訳は途中で途切れました。

ぶびっ。ぷしゅっ。ぶうう。

お尻から音が漏れます。しまった、と思って、お尻を締めようと思いますが、たっぷりお腹に溜まっていたおならは止められません。

ぶうっ。ぷしゅっ。ぶびっ。

お堂の中にはわかに静かになって、外の風が木々をざわざわと揺らす音ばかりが聞こえてくるような心持がしました。

出ちゃった。コツキの頭に熱がのぼってきて耳が赤くなりました。

じゅうろくさい はじめてのおべんぴ

A J

大熊楓佳おおくま ふうかにとって、朝の排便は欠かすことのできぬ日課である。

いつの頃だったからか定かではなく、きつと記憶も曖昧になるほど幼い頃から染み付いているのだろう。毎朝しっかりと食事を摂って、体を目覚めさせ、その消化管を目覚めさせ、便意を催す誠健康な快便体質である。特段の手入れをせずともすべやかな肌はその賜物だ。

「んっ……ん、んっ、んううう……っ！」

そんな楓佳が、日課を果たすべき小さな空間を重苦しい息遣いで満たしている。純朴で十六歳という年齢の割には幼げなその相貌は全くでも醜くは感じられぬ程度に可憐で、しかし元々童顔なせいとか、目を強く閉じて力を籠めた様は、十歳は幼くなったように見えてしまふ……目元を飾る黒縁の眼鏡と平均には僅かに満たないながら年齢相応の背丈、そして制服が辛うじて彼女を女子「生徒」に押し留めていた。

今日の楓佳は既に十分以上はトイレに籠っている。息を詰まらせ、息を整え、時折苛立ちからかセミショートの髪を弄りつつ、便器に腰掛けて動かない。平素であれば、自然な欲求に引かれた彼女がその腸管を空にするには、五分もあれば充分なはずなのだが。

「うゝゝ、んんっ……ふんんんっ……」

(出ない……なんで……なんで出てくれないのっ……!)

しかし、今朝の長い頑張りの成果は、情けない放屁のいくつつかばかりで、水面に茶色の影は見当たらず、その清浄を保っている。昨日も、

一昨日も、その前も全く同じだった。

つまり、日課が、日々を健やかに生きるために欠いてはならぬ営みが滞っている。小学生の頃も、中学生の頃も、高校生になっても。春も、夏も、秋も、冬も。いつだって当たり前に受け入れてきた行為を果たせていない。楓佳は、十六年も生きてきて、たった五日前まで全く縁の無かった種の不調——便秘に苦しめられている最中であつた。

(もうっ……いい加減、出さないとイケないのに……)

よく食べ、よく出す。そのような健全極まりない日々から後者だけを抜いてしまった結果が、ポッコリと張り出した下腹だった。幸い、制服である濃紺のジャンパースカートの、秘密を覆い隠してくれているが、手を添えればそこに五日分の便塊が眠っていることが分かる。

消化の果てに生み出された、毒とも言える老廃物を、そこまで溜め込んだのだから、心身に変調をきたさないはずがない。便秘が四日目を迎えた頃には始終気怠さを感じるようになり、五日目となる今日の朝は、ベッドから起き上がるのも一苦勞であつた。無論、食欲も落ちている。昨日の夕食では控えめに盛り付けたおかずと茶碗一杯の白飯を辛うじて食べきる程度で、見ていた母親と妹達から本気で心配された。平素であれば、少女らしからぬ旺盛な食欲を隠さぬ楓佳にとって、食事をまともに楽しめぬことが一番の苦痛だった。

(やだっ……お腹気持ち悪いし、五日も出ないなんて絶対おかしいよ。変な病気だったらどうしよう……このままずっと出なかったら……)

そんな辛い症状も、特に女性にはそう珍しいことではないと話に聞く。されど、これまで一度たりとも経験の無かつた楓佳には一大事だ。不安と焦燥に駆られ、真剣に悩み、何度試みても出せないことに恐怖

すら覚え……しかし友人にも家族にも相談しようがなく、悶々とした日々を過ごすしてきたのである。

「はぁ……すうう……んっ、ん、んっ……うんんうう……!!」

（お願いだからうんち出てよ……学校では、絶対したくないもんっ）それに、朝のうちに排便を済ませておく習慣は、外で催し、羞恥と欲求の間で板挟みになる可能性をできる限り削いでおく為でもある。十六歳——高校一年生になっても、楓佳は未だ学校で大便ができない。それどころか、安心して臭い立つ茶色を晒せるのは自宅のみ。小学生の頃に学校での排便を手酷く擲擲されたトラウマと、生来の引っ込み思案で臆病な気質のせいで、幼稚とも言える恥じらいが先に立ち、我慢を強いられることも珍しくはなかった。だからこそ、腹の内の不安の芽は、どうしてもここで摘んでおかなければならない。

「うーんっ！ ふ、んんう！ うっ、んんんっ!!」

学校でうんちはしたくない。知らない生徒に／名前をよく覚えていないクラスメイトに／毎日会話を交わす友達に、うんちをしたと知られたくはない。お腹を空っぽにして、学校でうんちがしたくならないようにする——そのために、顔を真っ赤にして、思い切り踏ん張って腹圧を掛ける。必死に、息が切れるまで気張り続ける。

みちっ……ぐ、ぐ、ぐっ……みちっ……

（あつ……出る、かも……出そうっ……このまま、もうちよつとっ!）

「ふんんっ……ふううっ……っ、んん、うんううう!」

久方ぶりに、実体あるものが肛門をこじ開け、擦る感覚を得た楓佳が、それに勢いをつけるため、なおも強く息んだ。季節は冬真つ只中の十二月であったが、額と脇に微かな汗が滲み、狭い個室は苦しい気な

吐息で溢れ、熱気を帯びているようにすら感じられた

みちちっ……ぼろっ……ぼろっ……ぼちゃんっ!

「はあ……はあ……はあ……はあ……っ!!」

まずは酸素が足りず、荒々しく吸っては吐いてを繰り返す。

苦闘の末、水面を叩き小気味良い音を鳴らしたのは、兎の糞のように黒々として小粒な塊であった。これでは、到底五日分には程遠く、腹の重さは一向に解消していない。

「ふっ……うんんっ……ううんんっ! はっ……はあ……はあ……」

一番硬い頭を出せた。ならば、その奥に詰まったものだって、出せるはず——きつと出せる。出したい。出して辛い便秘から逃れたい。切実なる祈りも、懸命な努力も続くが、平素の健全さを失った消化器官は応えてくれない。出てくれそうない気配は微塵もなく、心までもが重かった。

「うぬぬぬっ……うんんっ! んんんんっ!!」

（うんちしたいのに……うんち出してすっきりしたいのに……全然、出てくれないっ……!）

ずっしり重たい糞便も、やり場のない苛立ちも積もる一方で、眼鏡のレンズの奥にある瞳は、今にも涙を湛えそうな程に弱々しい。

「お姉ちゃん、まだ時間掛かりそう?」

負の感情の螺旋を止めたのは、扉を二度叩く無機質な音に、楓佳よりも僅かに低音域を行く少女の声だった。

「あつ、彩花ちゃん……待たせてごめんね」

聴き慣れた妹の声に言葉を返す。楓佳には二人の妹が——中学二年生の彩花に、小学五年生の春香——がいるが、今扉越しに向き合っ

いるのは上の妹の方だ。

「一階のトイレは春ちゃんが使ってるのかな」

「そうだよ。またタイミング被っちゃって、じゃんけんも負けちゃったからこっちに來たって訳……春ちゃんを待った方がいい？」

二人の妹も楓佳と同様、朝のうちに排便を済ませるのが習慣付いている。お腹を動かす原動力たる食事の時間も平日は同じなので、タイミングが重なり、一階と二階にそれぞれ一つずつのトイレが双方埋まることも珍しくはない。

楓佳は、長い闘いになることを見越して持ち込んだスマートフォンを数度叩く。液晶に表示されている時刻は七時三十三分。バスの時間を考えてもまだ三分以上は粘ることができる。

「……大丈夫。すぐに出るから」

とはいえ、諦めの悪さを發揮して、同じく朝は忙しいはずの妹に迷惑を掛けるのも気が進まない。楓佳はすぐにトイレトペーパーを手に取り、尻穴に押し付け、幾度か擦った——温水洗浄機能を使うほどには汚れてはいない。

「はあ……」

心地良い「すっきり」を得ることなく、重い溜息と共に水を流すのもこの五日間で慣れたものだった。

「お待たせ」

扉を開けば、彩花が壁に寄り掛かって、手持ち無沙汰と言わんばかりの表情で立っているのが真っ先に目に入る。楓佳もかつては毎日袖を通していたセーラー服姿。背丈は既に姉を抜いていて、その切れ長の目を覗き込めば受けるのは大人の印象。とはいえ、性格は活発で気

が強く、楓佳にとってはまだまだ生意氣盛りの妹である。今日も出て来るのが遅いと口煩く言ってくれば軽く受け流してやろうと身構えているところだ。

「いや、そんなに待ってないし……それよりお姉ちゃん、すごく苦しうにしてたけど大丈夫？ もしかして……出なかったの？」

予想に反し彩花の口を突いて出たのは純粹な心配と気遣いの言葉だったが、投げかけられた大人の背には嫌な汗が流れる。かあつと、顔面が熱くなる感覚は勿論気のせいではなく、傍から見てもはつきり赤く染まるのが分かった。

「なっ……え、えつと……へ、平気だよ。た、たまにはそれぐらい、あるし……」

目を逸らし、言い淀む——のも当然である。家族なのだから、お互い朝の日課も当然承知済みで、姉／妹の残り香が漂う中で済ませることに特段の不快感を感じることはなく、そして自身が事を済ませた直後のトイレに入られたとして恥じることもない。とはいえ、それは暗黙のうちに理解し、理解されることだからで、露骨に触れられれば、年頃の少女らしい気恥ずかしさも生まれるもの。下る詰まるといった不調のこととなれば尚更だろう。

「でも、昨日の朝もその前も長いことトイレに籠ってたし……本当に大丈夫なの？」

「……っ……」

そこまで知られ、察され、核心を突かれると、もう誤魔化しようがない。思考は固まり、唇は言葉を紡げず、わなわなと震えるばかりだ。

「ああ……その、変なこと聞いちゃってごめん」

「ううん……心配してくれて、ありがとう。彩花が優しくしてくれるのもなんか珍しいね」

触れられたくない知られたくないという青い感情もあるが、排便を果たせなかった憤懣もあるが……向けられた優しさに、それら生の感情をぶつけるほど楓佳は未熟ではない。

「べ、別に……大食いじゃないお姉ちゃん見てると調子狂うだけだし」照れ隠しに憎まれ口を叩く妹を見送ると、楓佳は階段を降りて洗面所に向かう。湯と石鹸で丹念に手を洗い、リビングで母親といくつかの会話を交わし、二階へと戻ろうとする時のことだった。

「あ、ふうちゃん」

ちようど用を足し終えトイレから出てきたのが下の妹の春香である。既に着替えを終えていたが、まだ小学生なので私服である。上は水色を基調とした厚手のパーカー。下はチェック柄のスカートと灰色のタイツという可愛げのある出で立ちだ。

「二階ずっと使ってたから、彩花ちゃんも来てたし急がせちゃったかな……ごめんね」

「私は早く済んじゃっただけだから、気にしないで」

お互い配慮に溢れるやり取りが交わされる。春香の常に柔らかく微笑むその顔立ちと、見つめてくるたれ目がちな瞳は、どこかおっとりとした雰囲気を出すが、実のところ気遣い上手のしつかり屋。社交的で、年齢以上に成熟した言動を見せるよくできた少女である。

「……ふうちゃんこそ、無理して出てきてない？ 最近朝のトイレ長いし……お腹の調子、良くないのかな……って」

そして人のこともよく見ている。気掛かりなのはやはり姉のお腹の

事情。春香の推察は真実と反対方向に逸れてはいるが、不調を察し、心配げな表情を浮かべのめ、家族なのだからと直球の問い掛けをするのも、先の彩花と同じだ。

「あつ、えつと……うん。お腹壊したとかじゃないから、大丈夫」

悪く言えば余計とも言える言葉に、気を悪くするような性格ではない。しかしながら、自らが溜め込んだ不浄について赤裸々に話してしまえるような性格でもない。やはり血の繋がった姉妹と言えど、隠したいことは、ある。

「そっか……でも、最近は寒くなって、おなかの風邪も流行っているみたいだし、ふうちゃんも気を付けてね」

自らの事情を秘めたまま春香と別れ、再び二階に戻り向かうのは、お世辞にも少女のものとは言い難い散らかり具合の自室だ。そして、部屋の片隅に掛けられたダブルタイプのプレザーをジャンパースカートの上から羽織り、高校生になって新調した紺のダッフルコートで身を包み、通学鞆を持てば一人の女子高校生が完成する。これでいつでも出発できる——彼女が自由気ままに大用を足せぬ外の世界へと。

(もしも外でしたくなっちゃったら……我慢、できるかな)

朝の忘れ物がもたらすのは、もやもやと、鈍重な気怠さと、大いなる不安。それらを心のうちに秘めながら歩き出す楓佳の足取りは重い。

\*\*\*

その日も、いつもと変わらない時間にチャイムが鳴って、同じ制服に身を包んだ集団を規律する。

楓佳もまた教室を埋める四十人の一人となって、一時間目と二時間目の授業を消化しきったところだった。やはり気分が優れないのか、休み時間に入った直後から、ずっと机に突っ伏している。

「おっ、楓佳どうした？ 授業中はともかく、休み時間は起きてた方がいいんじゃない」

「莉緒。授業中は起きてなさい。あんまり言ってるけど今度からノート見せないからね」

親しい知り合いのいない高校に入学し、口下手でお世辞にも人付き合いが得意とは言えない楓佳は、一人寂しく三年間を過ごすことも半ば冗談抜きで覚悟していたが、幸いにも、休み時間ごとに話し掛けてくれる、心通わせた友人がいた。

「ん、少し寝不足……なのかも。テスト前だし」

その友人達の問い掛けに應えるために今は顔を上げたものの、見れば血色が悪く、具合が良いとは到底思えぬ様子だ。

「辛そうだけど本当に大丈夫？ 保健室でちょっと休んできたら」

「うーん、智恵はやっぱり楓佳には甘いよねえ……まあ、でも確かに無理はしない方がいいと思うなあ」

やはり一日一度欠かさず、時には同じ日に二度三度と排便することを前提とした大腸に、五日分はあまりに重過ぎた。下した時のような鋭さはなく、しかし薄く引き伸ばされた痛みと締め付けるような圧迫感が常に付き纏っている。それが、授業に殆ど集中できない程の病的な気怠さを生み、楓佳の身と心を蝕んでいた。

「全然大丈夫だよ、風邪ひいたとかじゃないし……」

しかし正直にそうした事情を告げることにはせず、悩みの一端すら漏

らすことなく、ただ楓佳は外していた眼鏡を掛け直し、友人の心配を晴らすべく意図して力を籠めて話した。

背は高いが子犬のように人懐っこく陽気な莉緒に、背は低いが大人びていて落ち着いた智恵。どちらもあと少しで一年の付き合いになる大切な友人だが、腹の内の茶色は楓佳にとつての機微中の機微。糞便が詰まり、溜め込んで調子を崩しているなどとは言えるはずもない。

「ならないけど……あんまり無理しちゃダメだよ。楓佳、授業中に具合悪くなっても言えなさそうだし」

「んもう……高校生なんだから、きつくなったら言えるよちゃんと」  
言い返してみせるものの、友人の指摘は鋭く、もつともなものだ。勿論、楓佳には楓佳なりの、不器用には不器用なりの歩みもある。

中学生生活の終わりまで秘め続けていた恋心には、結果はどうあれ想いの丈は告げ、悔いの残らぬ形で決着を付けた。そんな一世一代の大勝負に挑んだことで自信を得たのか、高校生になってからは少しばかり前向きになった。登校初日、席が隣同士になった初対面の少女に自ら話し掛けたのは十代の少女としては小さな一歩で、しかし楓佳には大きな躍進である。そうして得た友人を熱心に誘って、部活動も始めた。両手で数えきれる程の生徒しか所属していない小規模な調理研究会だったが、今では楓佳の大切な居場所だ。

ただ、ささやかな成長を重ねていっても、根っこにある気質は変わっていないし、変えられない。楓佳は自分を主張することが苦手だ。楓佳は目立つことが苦手だ。楓佳は上手に話すことが苦手だ。人から奇異の視線を向けられることに耐えられない。

仮に、授業の最中、不調の原因たる茶色が動き出し、緊急に然るべ

き場所へ駆ける必要性が生じたとして、手を挙げ離席の許可を求めることなどできないだろう。やもすれば、十六歳の少女が、座したまま限界を迎え、その着衣と尊厳を自ら生み出した汚物で穢し尽くすことが起こり得る。未だ楓佳にそういった経験が――授業中や多くの級友達に囲まれた衆人環視の中では――無いのは、多少の暴飲暴食では下すことのない鋼鉄の胃腸と、毎朝登校前に必ず排便を済ませておける健康的な体質の賜物。それが崩れた今は、つつがなくこなされるべき授業の一つ一つが、最悪の事態を招きかねない。それ故に、悩みの重さは、腹に詰め込んだ質量以上だ。

「うーん、明日のお休みはどこか出掛けようと思ったけど、楓佳が具合悪いならやめておこうかな」

「莉緒。来週何があるか分かって言ってるの？」

「ほら、テスト勉強にも、たまには息抜きが必要でしょ。お昼ご飯食べに行くぐらいならいいじゃん」

出したいと願いながら、それと同じぐらいの切実さで、安息の場所へ帰り着くまではその時が訪れないよう祈っている。課業を終え、自宅で過ごしているうちにしなくなつて、五日分を何の憂いもなく全部出してすっきりする……そんな都合の良い未来ばかりを描いているのは、不安の影を見ないようにするためでもあった。

\*\*\*

(……ど、どうしよう)

息詰まる重苦しさを抱えたまま、楓佳は時間割通りに午前中の授業

をこなした。そうして迎えたのは昼休みの時間。楓佳の机に莉緒と智恵が椅子を持ち寄つて集まり、皆で昼食の時を過ごし、大概はそのまま午後の授業が始まる直前まで話し続ける。この日も普段と何ら変わらない日であった。

楓佳の昼食もまた平素と大差はなかった。母親が丹精込めて作った料理が満杯寸前まで詰め込まれた手作り弁当。箱は黒一色で飾りらしい飾りは見当たらず、少女の持ち物にしてはあまりに無骨……可愛げある意匠をしたものは、概して小さめに作られているもので、彼女の腹を満たすにはどれも不十分なのだから仕様がな。

(どうしよう……し、しちゃう……？ で、でも……そんなのっ)

外観への不満は大いにあったが、中身は楓佳にとつての幸福そのもの。今日もそれを綺麗に平らげた。腹に溜め込んだもののせいで、食欲が落ち込み、平素の倍近い時間が掛かってしまったが、それでも楓佳は辛うじて食べ切った。意地か、矜持か、母親を悲しませんとする優しさか……定かではないが、残すということは初めから考えてはいない。

ぐるぐる……ぐるぐる……つ

そして、口腔の内で咀嚼され、食道を通つてやってきたものを消化するため、胃袋が目まぐるしく揺れていた。消化管は入口から出口まで一繋がりであつて、一つの蠕動が、遙か彼方先の蠕動へと変わっていく――五日分を溜め込んだ大腸もまた、激しく揺すられていた。

ぐうう……ぐるぐる……

(今朝もあんなに頑張つたのに……なんで今になって……っ)

そうして、ずっと待ち望んだ腹のうねりが、何の前触れもなく訪れ



た。昼食を終え、十分程が経った昼休みの真つ只中、ずっと忘れられ、消え失せていた排泄の欲求が、紺色で隠された柔肌の内側で確かに蘇ったのである。

五日間積もりに積もった切なる願いがようやく天に届いたのだろうか。便意はまだ穏やかで、行為に駆り立てるような力強さはないが、とはいえ違和感という言葉で片付けられるようなものでもない。きつと、正面から向き合えば全てを吐き出せるはずだ。

それはまさしく、長きに渡り苦しめられてきた便秘を解消する最大の好機。しかし楓佳の表情に歓喜の色は見えず、滲むのは焦燥ばかり……楓佳に、学校で大用を足すという選択肢はないのだから当然のこと、むしろずっと恐れていた事態。うんちがしたい／うんちをしたくない。それぞれ正反対を向いている体と心。十六歳になった楓佳は、未だその矛盾を解決する術を持たない。

「楓佳、やっぱり、ぼーっとしてる。本当に、熱とかないか、保健室で測ってきたら？」

「あつ……うん、ごめんね。ちょっと考え事してただけだから」

智恵が身を乗り出して覗き込む。目と目が合って、少しばかり罪悪感を覚えながらも、誤魔化した。放課後まで、そして自宅に帰り着くまで大便を我慢できるか、静かに唸るお腹と相談中——などと正直に言えるような性格をしていたら、最初から悩んでなどいないだろう。

「楓佳がぼーっとしているのはいつものことじゃない？」

「ええ、いつもって訳じゃ……まあ、うん、多いかも。反省、します」

会話を交わしながらも、意識は常に腹腔の内に留め置かれていた。なにせ動き出してしまったのは五日分である。狂おしく絶大な欲求に

悶え、苦しむ未来はそう遠くないのかも知れない。今は椅子に縛り付けられることもない休み時間。ならばすることは明らかで、しかし自宅とは異なり、相応の公共性を持った場で、尻を晒して肛門を醜く開け、無様な息遣いとそれよりも遥かに下劣な音を響かせ、熟成を重ねた腐臭を振り撒くことを一度想像すれば、心の中の臆病な自分が全力でかぶりを振る。

「はあ、ちょっとトイレ行ってくるね」

「あつ、私も行くよっ」

先に智恵が声を上げ席を立つと、隣で話していた莉緒も同じように立ち上がった。そして、楓佳だけが残される。

「……私も、行こうかな」

陰湿さを漂わせる同調圧力。過度で敏感で幼い社会性……楓佳はそういった雰囲気を生理的に受け付けないし、今ここにいる友人達も決して求めているのではない。トイレに行きたいと言えば、行つてらっしゃいで送り出すことが殆ど。智恵が言い出したのに、莉緒と楓佳が乗ったのは、単にその必要があるからに過ぎなかった。

「やっぱり並んでるね……ほんと、もつとトイレ作ればいいのに」

三十年以上前の設計者を責めても仕方がないが、校舎にある便器の数は在校生徒の数のわりに少ない。それ故か、休み時間には多かれ少なかれ列ができてることが常であり、不便を強いられる女子生徒達には総じて改築を望んでいた。

「配管とかの工事があるから、増設って難しいのかなあ」

個室は和式が四つに洋式が二つの計六つ。その全てが埋まり、順番

を待つものが楓佳達を含めて五人。幸い、誰も切羽詰まった様子は無さそうだが、空き待ちが常態化していれば、落ち着きの無い様子で並んでいる者を見ることも時にはあった。

(うんちなんて……絶対できないけど、今のうちにおしっこは済ませちゃわないと)

代謝が良いせいなのか、楓佳は小用の回数も平均よりは多い。幸いそこらは済ませることにあまり抵抗は無いので、こまめにトイレに足を運ぶようにしているが、油断と不幸が重なれば危うい事態となることもしばしば。ほんの一月前に、僅かに下着を湿らせるトラブルがあったのは彼女だけの秘密である。

済ませぬまま五時間目を迎えればそんなピンチもあり得たが、今は十分に余裕がある。用を済ませた者が出てきて、名前を憶えていない先客二人に智恵と莉緒が入って行けば、次は楓佳の番だ。

「……はあ」

(和式かあ……やだな。でも、知らない人に順番譲つたら変に思われちゃうし、仕方ないよね)

溜息の理由は、眼下にある他に例えようのない形をした白い陶器——和式と言われる、しゃがみ込んで排泄をするように作られた便器だ。流石に、この年齢にもなれば支障無くそれを使うことができるが、幼い頃の楓佳は幾度となく、はみ出したり、バランスを崩して倒れたり、服を汚したりと失敗を重ねている。そうして根付いた苦手意識を今も漠然と引きずっていた……他にも、落ち着かない、脚がひどく疲れる、油断すると尻と陶器の縁が触れ合って不快な思いをするといったもつともらしい理由もあり、選べる余地があるのなら、洋式

を選ぶのが常だった

ぐるぐる……きゅるるっ……くううゝ  
(ううっ……やつぱりうんちしたい……しゃがむと余計に、したくなるっ……)

ヒトの大腸の構造は、しゃがんだ時が最も排便しやすいようにできている。膀胱の中身を空にするために、腹圧が掛かる。そして何より、そこはしてもよい場所なのだ。物心付く以前から染み付いた、最早本能と言っても過言ではない習慣が、楓佳を行為へと駆り立てていく——ここはトイレだから、うんちをしてもいい。

しゅいしゅいーちよぼぼちよろろ……!!

(うんちはだめ……うんちは我慢する……我慢……がまん……)

古めかしいタイル壁に後付けされた擬音装置を起動すると同時に、白い陶器と鮮やかな赤色をした秘裂との間に、真つすぐ一直線に黄金色の橋が架かる。誰もが避けられぬ、おしっこを出す瞬間。それを受け入れ、解放感に浸ると思いきや、楓佳の表情は一層緊張を増した。

しゅいしゅい……ちよぼぼ……しゅううう……!!

(ゆっくり……ゆっくり優しく……お腹に力を入れちゃ、だめっ)

力まなければおしっこは出せないが、あまりに強く力めば便塊が一層出口に近付くこととなる。しかし、早く終わらせなければ音消しの為の擬音が途切れてしまう……なんとも難儀なものだ。

ちよろろろろっ……ぶっ……ぶすっ……

(やつ……おならがっ……)

そして、溜まりに溜まった汚物は、別の汚辱をも活発に産み出している……それが僅かに漏れて出た。誰にも気付かれぬ、やつてしまっ

た、秘めやかな放屁。

腸管の中にガスが満ち、お腹が張るのはやはり不快であったし、何よりどんな状況であろうと唐突に襲い来る放屁の欲求は厄介なものだ。授業中でもお構いなしで。休み時間まで必死の思いで耐えて、廊下の隅に逃げ込んで、こそそこそとガス抜きをすることを強いられる。或いは、自宅で気が抜け、ふとした拍子に大きな音を立ててしまつて妹達に笑われる——これも、便秘をして大に困つたことの一つだ。

「はああ……」

(今、思いつきり力を入れたら……全部出せるんだろうなあ……)

しかし、排尿の為にすこしばかり力を掛けただけでおならを漏らしてしまふというのは、やはり大腸の運動が活発化していることの証左なのだろう。ガスが降りて来るのは、その奥に鎮座する本体の露払いとも言える。無論、お腹がむずむずするいじらしい感覚も続き、小水を出す間、ずつと抑え込んでいた欲求が、再び楓佳の体と心を揺さぶってくる——うんちがしたい。うんちがしたい。うんちを出したい。

プリプリニチチチ——

思い悩む最中、機械の奏でる偽りの流水音の間を縫って、緊張と弛緩が混ぜこぜになった息遣いと、名状し難い——敢えて例えるならば、チューブを強く握つて一気に歯磨き粉を出したような音が響いた。

——ぼちゃんっ！

(隣の子……うんちしてる……)

続く重たいものが水面を叩く音まで聞かずとも、楓佳には分かる。誰だつて分かる——大便をしているのだと。

清楚の象徴とも言える制服に身を包みながら、排便に動しんでいる。

同級生達が薄い壁を挟んで隣にいて、外にはやはり他の女子生徒が順番待ちをしている中で、うんちを出している。知っている人や知らない人に囲まれながら臭い立つ茶色を晒している——そう考えるだけで自分のことのように頬を赤く染める楓佳には到底できないことだ。

(うんち……ちゃんとできて、いいな)

すぐさま擬音装置を再び起動させたことからして、恥が無いこともないのだろう。しかしながら、顔も知らぬその少女は、恥と理性を天秤に掛け、正しく割り切ることができている。誰かに指摘され、軽口を叩かれても、自然に受け流すだけの社会性もきつとある。

(ううう……私も早くお家帰つてうんちしたいっ！)

自身の幼稚を突き付けられ、しかしそれでも楓佳は変わらない。むしろ、誰かの行為を知り、誰かと恥の心を共有して、拒む感情はより強くなつてすらいる。

(大丈夫……このまま……このままでいてくれたら、大丈夫だから) 後始末を付けその場を後にしても、授業が始まるまで友人と話している、楓佳の不安は尽きることがない。

\*\*\*

昼休みが終わり、時が流れ、教室は六時間目の授業の最中にある。科目は英語で、生徒が教科書を音読する声と、教師が文法などを解説する声が交互に発せられる。つつがなく授業は進行し、午後というところもあって眠たげにしている、あるいは既に夢の中にある生徒がちらほらと見受けられることも含め、平穩そのものだ。

ぎゅるるるるる……ぐるるるるるっ！

「っ……………」

しかし、その中にも一人、平穩を享受できぬ者がいる。険しい表情で時計ばかりを見遣り、黒板の書き写しもそこそこ、頻繁に腹を擦っては眉を傾け、眠ってはないにしろ明らかに授業を意識の外に置いてしまっている者——それが今の楓佳であった。

（お腹、苦しい……痛いっ……それに、も、もうっ……）

その原因はやはり、五日分の老廃物と、それを詰め込んだ肉の管の止むことを知らない蠢きである。

その悩ましくも正常な働きに、楓佳はまだ応えていない。五時間目——実験を伴う化学の授業の帰り道。喧騒から多少なりとも遠ざかった女子トイレの扉の前では、楓佳も大いに迷った。五十分を経て高まった圧迫感と、明らかに輪郭が確かになった欲求の下で揺れたが、結局は堪え切ることを選んだ。

そうして迎えた六時間目も既に折り返し地点を過ぎた。幸いまだ欲求に屈してしまうような段階にはなく、決壊は遠い。だがそれは一面的なことで、別の角度から見れば楓佳は確かに瀬戸際にいた。

ぎゅるるるるる……ごろろろろっ……

（っ……だめっ！ 教室でしちゃうなんて、絶対に、だめだから！）

破裂寸前の風船のように張り詰め膨らんだお腹の中には、大量のガスも詰まっている。昼休みに小用を済ませた際も、少しばかり漏らしちゃっていたし、五時間目が終わってからもこっそりと高まった内圧を秘かに逃がしていたが、今この瞬間の溜まり具合とは比べ物にならない。圧力計でも付いていれば、きっとその針はとうに振り切れて

いるだろう——今の楓佳は、どうしようもなく、おならがしたかった。

（便秘してるからすぐ臭いもんっ……だから、絶対、ぜったいに、しないからあ……！）

静粛と言つて差し支えの無いこの教室の中で妙な音を立てれば間違はなく注目を集めることとなるだろう。窓と扉の閉ざされた教室の中では、放った悪臭が薄まるまでに相当の時間を要するだろう。望む行為が許されぬのは明白だ。

「ごぼぼ……ごぼぼぼぼっ！ ぎゅるるるるる……！！

「っ、あう……………」

（だめっ……だめだめっ……もう、が、がまん……できないっ……！）  
体を硬直させ、目を見開き、猛圧の前に必死の抵抗を試みるが、肛門の小刻みな震えが限界を教えてくれた。出そうなどという生易しい領域はとうに越えている。

ふっ、ふすすっ——

考える暇などない。ただ、楓佳は僅かに尻の左半分を上げ、尻の穴の神経を極限まで研ぎ澄まさせる——この力の加減に、楓佳のこれからの高校生活が懸かっているととてもよい。そうして楓佳は、恥知らずがそうするように、自ら門を開いた。

ふっ……しゅうううううう……すううう……

（音は出しちゃだめ音は出しちゃだめゆっくり少しずつ慎重にっ！）

「……っ、ふうう……ん……………」

ふ、しゅ……すうううう……ふう……すううう……

（ううう……酷い臭い……ご、ごめんなさいっ……どうか、どうか私だつて、バレないでっ……）

振り撒いた悪臭の酷さは想像以上であった。不快を越え、吐き気すら催す腐敗臭に、幾人もの生徒が顔をしかめ、わざとらしく咳き込む者もあれば、犯人を捜すべく周囲を見渡す者もいた。

幸い、熱気が通り抜けてなおも残る下着の温かさも、異常な速さの鼓動も楓佳だけが知っている。耳までをも染める燃え立つような恥辱の色は、板書を書き写す振りで俯きやり過ごす。

きゅるるる……くるるる……ぐううう……

そうして絶大な恥に焼かれ、しかしそれでも根本にある問題は解決してはいなかった。

(ううう……い、痛いっ……おならしても、お腹苦しいままだ……) 腹の中に鎮座する大物が、じりじりと進んできている現状は一向に変わらない。どれだけ放屁に及んでも、便秘五日目の腹は、軽くはなってくれないのだ。

\*\*\*

「あれ？ 今日智恵の家で勉強会するんじゃないかったっけ？」

今日最後の授業である六時間目と、ホームルームでの担任教師からの簡単な事務連絡が終わわり、ようやく迎えた放課後。これで家に帰り、思い切り大便を出せると安堵し、そそくさと一人教室を抜け出そうとした矢先に、友人の莉緒からそんな言葉を掛けられた……元々抜けているところがある楓佳だ。切実なる欲求とその解消のことに思慮を巡らせている状態では、数日前に交わした約束は忘却の彼方にあった。

(ううう……やっぱり、夕方まで我慢だなんて無理っ！)

事情がどうあれ、腹の中に溜め込んだ便塊は依然として尻の扉を叩き続けている。自宅に帰り着くぐらいつままでならまだ我慢が効いても、まさか一時間、二時間とそのまま過ごせば限界を迎えるのは必至だ。

(莉緒や智恵に……うんちしたって知られるのも絶対嫌だし……)

ならばどうするか。選択肢の一つ目は、友人の家で、大便をするためにトイレを借りること。しかし、それができるかと問われれば答えは否——掛かる時間から大小の別は明らかで、毎日顔を合わせて毎日他愛もない会話を交わす人間に、自らの汚穢に満ちた行為の様を知られ、想像されるのだから。

友人達を信頼していない訳ではない。ただ、自身が済ませた直後のトイレに入って、残した悪臭を嗅ぎ取って、そこに不快の情が微塵も無いと言えるのだろうか。家まで我慢すればいいのにと、学校で済ませておけばいいのにと、わざわざ他人の家でしなくてもいいのにと……そういった感情が欠片も無いと保証できるのだろうか。恥じらい深い、そしてそれ以上に臆病な少女は踏み込めない。

(でも、せっかくの約束だから……断るなんて、よくない……)

選択肢の二つ目は、理由を付けて放課後の一時を過ごすのを避けること。しかし、約束を無下にするのには乗り越え難い罪悪感がある。それに楓佳の学業成績は上から数えた方が早いぐらいで、勉強会となれば教える側に回ることが多い。友人達もそこに期待し、頼ってくれているということもあつてか、尚更裏切る気持ちにはなれなかった。

結局、その場でどちらとも選べなかった楓佳は、決断を先延ばしにした——先生に呼ばれているから待っていてと言告げれば、容易に友人達の下から逃げ出すことができた。

そうして廊下を焦燥に駆られながら歩いた。喧騒をかき分け、喧騒から離れ、喧騒から隔絶した校舎の片隅を歩いていった。他者の視線から逃れようとする、速いながらも軽やかとは言い難い小さな足取り。その先には、二つ並んだ扉があった。

（誰も……いないよね……ここなら、大丈夫だよね……）

不安げな表情を浮かべ、周囲を二度三度と見回す姿は、さながら肉食獣から逃れようとする小動物を想起させる。心臓が早鐘を打ち、口の中が乾き、気付けば冷や汗が背中を濡らす。辺りに人影はない。ただ、「女子トイレ」と機械的なフォントで書かれた標だけが、そそくさと扉の内へ滑り込む楓佳の姿を、悠然と見下ろしていた。

（ここで……うんちを、する……今の内に、済ませちゃおう）

そこは音楽室前の女子トイレ。校舎の中でも特に隔絶した場所にある、吹奏楽部は幸いテスト前で活動中止。全個室が和式ということもあって好んで使う者は皆無であろう。そこが、熟慮に熟慮を重ねた楓佳を選んだ、秘め事を果たすための——五日間溜まり続けた、不安と不快の根源たる茶色を晒すための場所である。

（よかった……誰もいない）

四つ並んだ個室の扉が全て開け放たれていることを認めると、楓佳は胸を撫で下ろした。悩んだ末に覚悟を決めたからといって、これから果たすことが、絶対に誰にも知られてはならぬ禁忌であることに変わりなく、無人であることは絶対条件。選ぶ個室も、当然出入り口から最も離れた一番奥の個室である。そして、恥と躊躇いに追いつかれぬよう足早にそこへ飛び込んだ。

ぎゅるるるっ……ぐるるるる……

「っ……………」

四方を囲まれた一人だけの小空間に籠っても、鍵を掛け扉を閉ざしても、見下ろした先にある白色が、その心をざわつかせる。長年使われくすんだ和式の便器。そこに何か妙なところがある訳ではなく、平凡な形姿をしていたが、今の楓佳には特別な意味を持っていた。

「はぁあ……………すうう……………」

（やけど……恥ずかしいけど……けど、ここで、しちゃわないと）  
努めて深呼吸。しかし、張り詰めた緊張は、これからすることを思うとどうにも無くならない。

自宅以外では努めて排便をしない楓佳とて、差し引きならず、恥を嘔み締め尻穴を開いたことは幾度もある。この校舎でも一度ならず経験している。しかし、至って理性的に、自らの力を見誤ることもなく正しい決断することのできたのは、どう考えても着衣のままに脱糞をする未来しか見えなかった時ばかり。割り切れず、五分五分の勝負に挑んでしまうこともしばしばで、壮絶な闘いの最中、自らの判断の誤りを悔やんだことも数知れない……見据える白色の引力は、抵抗を振り切るにはまだ弱過ぎると言えた。

優しさは時に刃になりて

軟球ころぶ

ドアの鍵が閉まっている。私はその前に立ち、ドアに耳を寄せる。可愛らしく力み声がドアの向こうから聞こえる。

「ふうん！ ううくん！ んっっ！」

ぷっ、ぷっ、甲高いガスの放出音も聞こえる。

ぼちよ、ぼちよん。

出したものがトイレの水面を叩く音、私が最近聞いていない音。

「ふいふい、でたあ」

妹の気持ちよさそうな声、羨ましい。

がさこそと紙を取り出し、拭く音。

水が流れて鍵が開いた。

「わあっ！ おねえ、なに!?」

妹がドア前に立つ私の存在に驚き、後ろに下がる。

「おねえはもうトイレしたじゃん、なんでいるの？」

「ん、やつぱなんであんなだけそうやって毎日出せるの？」

私は素直に疑問を妹にぶつける。

「なんでって、そんなの知らないし！」

私からお通じの秘訣を聞かれて、妹は恥ずかしそうに目を逸らす。

「いいじゃんなんかしてるんでしょ？ けちけちないで教えて」

顔を赤くしながら逃げようとする妹の腕を掴んで振り回す。

「やゝめゝてゝ」

「おゝしゝえゝてゝ」

廊下でバタバタ騒いでいると

「うゝるゝさゝいゝ！」

我が家で一番怖い人がやって来た。

「なにトイレ前で騒いでるの！ 二人とも学校行きなさい！」

お母さんが手を振りかざし、今にも振り下ろさんとしている。

私達はさっと離れて、急いで玄関から飛び出していく。

ちよつと歩いて妹は私と別の道を歩いて行く。

途中で振り返ると

「べえゝゝ！」

なんて幼稚なことをしてきた。

「なによっ！」

私も下を出し返してやりたいけど我慢する。

あの子は子供、私は大人。

鞆から手鏡を出して顔のメイクを確認。

さつと上から下まで制服を確認。

今日もぼつちり決まっている。

『お腹の“アレ”以外は』

歩きながらさりげなくお腹に手を添える。

妹には出せて私には出せないもの、それが悩みのタネ。

しばらく歩くと友達と合流する。

「ういゝゝ、ハルカっちゝゝ」

「おういゝゝ、リカっちゝゝ」

指をピロピロと広げる謎の動きは仲の良い友達同士の挨拶。

「今日のスカート短くない？ ゴリがうるさいよ？」

「いーのいーの、怒らせとけば」

生徒指導も担当してるジャージのおっさん先生なんて怖くない。

生徒達をやらしい目で見ないのは評価できるけど、それ以外のムキムキを主張するようなびちびちシャツとか、はつきり言ってるセクハラもいいところ。

名前はなんて名前か忘れた。

ゴリラっぽいから皆『ゴリ』って呼んでる。

それも言うて怒る、当たり前か。

何にせよ女の子のオシャレにうるさく言わないでほしい。

化粧の話やらテレビの話やらをしていたら校門が見えてくる。

「あーあーゴリが生徒指導の担当だよ、めんでー」

「ササーって抜けたら案外バレなくね？」

リカっちの提案に無言で頷く。

竹刀を肩に担いで今日も威圧的な態度でチェックしている。

その竹刀は体罰がウルサイご時世でまさかぶったりするのに使ったりはしていない。それでも相手への威嚇には十分だ。

「おはざーす」

「おはざーす、ういっすういっす」

頭をペコペコしながら素早くゴリの前を横切る。

ばあん！ 竹刀が地面に叩きつけられる大きな音。

びくうっ！ と体が跳ねて固まる。

「お前らあ！ 戻れ、何素知らぬ顔で通ろうとしてんだ」

竹刀の音より通る大きな声が校庭に響き渡る。

「ちょっと、私大きな音苦手だから止めてって言ったよね？」

「そーだよ！ ハルカっちはデカイ音にトラウマあるんだから」

ゴリに負けじとこちらも大声で対抗する。

「お前らの身だしなみの乱れが原因だろうが！ 何度言っても直さない本当に」

自分より頭ひとつ小さい生徒達に、動揺なぞ見せるはずもなく、普通に正論で私達を言いこめるめてくる。

「先生のチェックが厳しいだけだったばあ」

「ほんとほんと、他の学校じゃ皆これくらいだよ」

リカっちは私と話を合わせながら、軽くスカートを摘む。

「止めないか、若いからってそんなに露出するな」

ゴリが太ももより上に上がりかけた手を止める。

「あれえ？ なにに先生照れてんのお？」

「生徒のエッチな姿に興奮するう？」

ここぞとばかりに私達は先生に攻撃を仕掛ける。

だけど、ゴリは私達の色仕掛けにため息をつき。

「あのなあ、お前らみたいな小娘に欲情するような変態じゃないんだ。俺は、好みは年上で年下には興奮しない」

「ええーっ！ ゴリより年上つてもうお婆ちゃんになるじゃん！」

「やばーっ！ ガチ変態じゃん！」

意外な回答に素で驚いてしまった。

「なっ！ 俺はまだ二十七だぞ！ そこまで離れてなくていい！」

「27!? うっそ、老けすぎじゃね？」

「もう四十くらいだと思ってたんだけど」

さらなる驚愕の情報に私達は驚くばかり。



「お前ら俺をなんて目で……それより俺をゴリとか呼んだよな？」

「あ、やべっ」

「それじゃあこのへんでー」

なんだか厄介なことになる前に私達は逃げていく。

後ろから「止まれ！」とか聞こえるけど足は止めない。

靴箱で急いで靴を上履きに履き替え、早足で廊下まで行く。

後ろを振り返るけど、ゴリはさすがに追いかけて来てなかった。

「ふうっ、間一髪ってやつ？」

「いやあ、後々なんかめんどろな事になりそう」

一安心して廊下をだべりながら歩く。

学生は限られた時間でしか成れないのだから、皆オシヤレとか

もつとすればいいのに。

そりゃあ先生にも注意されるけど、無個性な一人になりたくない。

教室前、私は立ち止まる。

「ん？ どつたのハルカっち」

「先行って、私ちよつとビックベン」

アレをすることをふざけて言うど、リカッチはギャハハハ！ と下

品に笑いながら教室に入って行った。

まだ人が全然いない女子トイレに入る。

私一人だけ、貸し切り状態。

個室に入って鍵を閉める、やけに音が大きく感じた。

静かなトイレは集中出来る。

『これならいけるかも』

下着を膝まで下ろして、便器に座る。

すう……

息を静かに吸い込んで

「ふううん！」

息を止めると同時に力む。

お腹を意識して、固まって動かないやつを想像しながら

「んんんんっ！ んっ！ ふんっ！」

腹筋に声と共に力が入るけれど、動きは全くない。次第に疲れてき

て息を吐き出して力を抜く。

はあ……。

『今回もダメかあ』

何となく水を流して個室を出る。少し暑くなった体が冷めていくの

を感じながら、鏡で身だしなみを軽く確認する。

化粧のノリも、ゴリに注意された制服も特に直さない。

問題はやっぱりお腹の中。もう三日も音沙汰がない。

今までは無理やり踏ん張ればなんとか出たけど、うんともすんとも

反応がない。

固くなったのが上から触ってもわかる。そうなるといつでも気に

なつて仕方ない。

便秘薬とか浣腸とか試してみるべきかも。

『今日の帰りに薬局寄って行こうかな』

少し気分が落ちながらトイレを出て教室に向かった。

教室に入って皆に挨拶しながら席に座る。

リカっちは私の右隣、左隣には

「委員長ういゝ」

「おはようございます、あと委員長じゃないです」

今どき珍しい三つ編みで大きなレンズの眼鏡の女子。

いかにもお堅い感じで、皆の推薦で学級委員になるのは当然。

でも、一年だからまだ委員長の立場にはなれない、それでもその厳格そうな見た目で委員長と呼ばれている。

主に私とリカっちらから。

「委員長はさゝ、ゴリから注意されることある？」

「ないです。あなた達と違って私は真面目なので」

さっきの挨拶から読んでいる本から顔を上げてくれない。

話題を変えてみる。

「じゃあさ、委員長最近うんち出てる？」

「下品ですよいきなり」

ようやく委員長が私の顔を見てくれる。

「私もう三日も出てなくてさあ、リカっちゃん野菜ダメだったわ、全然効き目無し」

「マジかあ、うちはすぐ出たけどなあ」

事前に聞いていたアドバイスも失敗。

他のアドバイスとして健康そうな委員長にも聞いておきたい。

「食生活が問題ないのなら、生活リズムに問題があるのでしょうか。夜更かしとかそういう不規則な生活とか」

それは親にも言われたから別のが聞きたかった。

手を組んで私は悩む。

「もつとなんかなあ。すぐにプリプリ出てくる運動とか」

「だから汚いです。もうこの話は終わり」

委員長は冷たくそう言うときまた本に顔を戻してしまった。

リカっちゃんと私は彼女の席を取り囲む。

「委員長、ラノベ読んでないで真面目に聞いてよ」

「えっ、なんでラノベだってわかって……」

「はえ、小難しい顔して読んでるから海外小説でも読んでるかと思っただわ。ハルカっちゃんよく分かったね」

横から覗き込まれ、委員長は本を勢いよく閉じる。

「何？ 悪い？ 私だってこういうの読むの！」

顔を赤くしてふんふんと怒る委員長

「そんなわーいわー言わないで、チラって見えた文章が私が読んだことあるやつだったから試しに聞いただけ」

「ハルカっちゃんもラノベとか読むんだ、それもなんか意外だわ」

今度は委員長そっちのけで会話をする。

「そうだよ、私オタクだから。漫画・ラノベ・アニメ、大好き」

「なんだあ、それ早く言ってくれよ、今度漫画貸しっこすんべ」

キヤイキヤイと話していると委員長が突然立ち上がる。

ぎいっ！ 椅子を引きずる音に私はビックッ！ と体を強張らせる。

「うるさいです！ 授業前の一時を邪魔しないで！」

今度は本当に怒ってしまっているようだ。

「なんだよお、別に馬鹿にしたわけじゃないって」

「そそそ、うちら同じ仲間よ？ 同士よ同士」

「例え同じ物が好きな繋がりがあっても、あなた達は下品で話してい

るとIQが下がります！ 同じにしないで！」

むむむ、私とリカっちは結構な強い言葉に口をとがらせる。

「リカっち、フォーメーションKだ！」

「おうよ！」

私達は素早く動き、委員長の前後に立つ。

「なっ、なにする気ですかっ」

委員長は少し怯えてる。委員長が前のリカっちを見た瞬間に

「はい隙ありい〜」

私は委員長を羽交い絞めにした。

一瞬間まる委員長だったけど

「何するんですか！ 話して！」

手足をバタバタさせて暴れ出す。

「委員長軽いねえ、ちゃんと飯食ってる？ そんだけ動いても全然解

ける気配ないわあ」

私より頭一つ近く小さい委員長、力も全然弱い。

「そんじゃあ今度はうちの番だな」

ジリジリとハルカっちが委員長に近付く。

「いや……来ないで」

恐怖に顔を歪ませる委員長。

「あんまり酷いこと言う委員長には、こうだ！」

一気に距離を詰めて両手をわきの下に差し込む。

「こしょこしょこしょこしょ」

「わはっ、あっぱははは！ やめっ、はははははっ！」

フォーメーション KUSUGURI

前にちよつと委員長の腋をくすぐった時、結構大きな反応したのを見て弱いかと思つたら、やつぱりくすぐったがりだった。こちらに身を預けるくらい仰け反ってくる。

「おつとつと、委員長暴れすぎ、パンツ見えちゃうよ」

「ふひゃひゃひゃ！ ひやめて！ ひやめて！ ひっひひひ！」

足をばたつかせるから委員長のスカート丈でも、ちらりちらりと危うく太もが見え隠れする。

「おつおつ、もうちょいで見えそうだぞつ、こしょこしょ」

リカっちが逃れようとする委員長に追撃する。

私も委員長の顔を見てみようと思つと手と手を緩めた。

「はあーつははは！」

委員長が振りほどけた手を振るう。

肘が見事に私のお腹にズン！ と入った。

「ぐふうっ」

委員長を放して崩れ落ちる。

「あれ、ハルカっちどした？」

「はー、はー、はああく、ふうふうふう〜」

くすぐりから解放された委員長は苦しうに息を吸う。

私はそれ以上に苦しみ、うずくまる。

「うぐぐ……」

「あらら、ハルカっち大丈夫？」

「はあ……はあ……、へ？ だ、大丈夫？」

呼吸が整いだした委員長はようやく私の異変に気付いたらしい。

お腹を抑えながらふらりと立ち上がる。

「委員長……いいエルボーだったよ……」

強がり、なんとなく親指を立てる。

「えっ、肘が当たったの？ ごめんなさい、痛い？」

急に委員長が心配しだすから、なんか申し訳ない。

「ちよつと痛かったけど、もう平気平気」

ホントはまだ少し痛いけど、私達がふざけた結果こうなったので、

あまり心配はさせたくない。

「まあ、ハルカっちが大丈夫って言うなら大丈夫なんですよ。委員長

もあんま気にすんなって」

「う、うん……ほんとにごめんなさい」

全然心配してなさそうなりカッチはともかく、委員長は心配で、保

健室に連れていきそうな顔をしている。

「もー謝らないで、ほら、元氣元氣！」

彼女の不安を吹き飛ばすため、私は自分で自分のお腹をパンパンと

叩いてみせる。

ちよつと痛い。

心配そうな顔が少し柔らかくなる。

リカッチにも安心するように何か言おうとした。

ぐぐう……。

私のお腹が小さく鳴った。

『あれ、この感じもしかして……』

懐かしい動き、私はこれをずっと待っていた。

『よし、今トイレに行けば』

キーンコーンカーンコーン

予鈴が鳴ると同時にゴリが教室に入ってくる。

「鐘鳴ったぞー、さつさと座れ」

何人かは固まり、慌てて自分の席に座る。

「なんでいるの？」

普段来ないはずの人が来たから何も考えずに声に出してしまった。

「今日斎藤先生は風邪でお休みだ。副担任の俺が来た、それだけだ。

何か問題あるか？」

ぎろりとこちらを睨む視線に、渋々席に座り込む。

そのまま出席確認が始まる。

くるる……

またお腹が鳴る。

『なんで急にお通じがきたんだろ、もしかしてさっきの』

お腹にぐりつと入った肘、それが絶妙な刺激になって塊が入ってい

るところを眠りから目覚めさせたのでは。

トイレ行きたい。

淡々と今後の行事や委員へ向けての連絡事項を告げるゴリ、これが

終わったら授業が始まる前にすぐ行こう。

秘めたるお腹、風ぐ時間。

ゆつきゅん

「……あ、起きた？ おはよう莉里。」

「……ん、おはよ……今何時？」

「八時過ぎたところ」

少し平べったくて湿ったようなベッドで目を覚ますと、先に起きていたらしい恋人が枕元から頭を撫でてきた。既に着替えていて、ペットボトルの水を飲んでいいる。なんでこんなに朝強いんだろ、と驚きつつも体を起こすと、背筋がビキ、と悲鳴をあげた。緩やかにベッドに倒れていく彼女を見て、恋人は笑う。

「どしたの？」

「……背中が痛い……」

「そりゃああんなに仰け反ってたら痛いでしょ」

「……遙香のせいでしょ」

「莉里がもつとして言うからでしょ」

言っていない……とは言えない。いつものことだが莉里には細かい記憶が無い。しかしデリカシーも無く翌朝に話題を持ち越した恋人に、抗議の意味を込めて枕を投げつけた。昨晚、最終的に莉里がずっと顔を埋めていた小さめの枕である。

片岡莉里と吉田遙香が出会ってから十五年、恋人になってからもう三年が経つ。無事に同じ大学に進学してからは、一人暮らしの権利を遙香が勝ち取ったのいいことに、金曜日になると彼女の家に入り浸るのが習慣になっていた。退廃的に過ごすことも、有意義に過ごすこ

ともあった。

どちらにせよ二人で過ごすことには変わらないし、目覚めたとき何より先に恋人の顔が見られることにも変わりはない。もちろん、遙香の体内時計は非常に朝型なので、彼女は寝顔を見ることになるが。

「ご飯食べる？ 一応炊いてはあるけど」

「ん……食べる……卵かける」

「はいはい」

到底人には言えない原因で傷んだ背筋をゆつくりと、伸びをする猫のように労わりつつ。莉里は何とかベッドから降りると、今日も空が青いことを確認しながらお腹を撫でた。少し張って固くなってしまっている。運動はできるが鍛えている覚えはなく、つまり腹筋ではない。

その中には考えるのもおぞましい、いまだ大学生になっても中学生にも間違われるような可愛らしさをもつ彼女とは正反対の汚らしいものが大量に詰まってしまっている。

特に体調が悪いわけでも、生活習慣が乱れたわけでもない。平日は大学、休日は朝型の遙香に起こされて、早寝……はともかく早起きはしている自信がある。食事も、料理が趣味だと豪語する遙香が弁当を作り、朝食を作り夕食を作り。特にストレスもなく、思い当たる節が全く無いまま一週間。そろそろ目に見えてお腹が張り、ふとした時に苦しくなってきた。

特にここ三日間は、ちょっとした圧迫感が思い出したかのように襲ってくる。たまに悲鳴のような高い音がして便意が来るものの、便器に腰掛けた瞬間引っ込んでしまうのだ。ポンポンと跳ね返すような硬さは一度諦めて、んん、とまた伸びをする。

「おかずいる？ 冷蔵庫のやつだけだ」

「しゃけ」

「しゃけね」

着替えるのは朝食後にして、ベッドを少しだけ片付ける。汚れていないかは重点的に確かめるようにしている。キッチンからは食欲をくすぐる温かな匂いが漂ってくる。まだ眠気で力が抜けるような体で、壁に立てかけてある丸テーブルを広げると、見計らったかのように遥香がご飯とみそ汁、それからほぐし身鮭のタッパを持ってきた。

「ありがと」

「はい。食べ終わったら片付けておいてね」

「どこか行くの？」

「うーんと……ごめんね、食べる前に言う話じゃないから……」

原因に思い至り、ごめん、と莉里は頭を下げた。少しお腹を撫でながら、遥香も申し訳なさそうに廊下の奥に消えていった。トイレだろう。それも、大きい方だ。少し早足だったところを見るに、結構な便意に襲われていたのだろう。ご飯を食わせておいて味を聞かないあたり、かなり切羽詰まっているように思える。

（私もうんち……うう、どうしちゃったんだろう……）

莉里より輪をかけて遥香は健康そのものだ。早起きの後のランニング、それから朝食。その一連の流れできちんと催しているようで、莉里にとっては羨ましい限りだ。きつと済ませて、一息ついて、臭いがあらかた消えるまで出てこないつもりだろう。わざわざ言わないが、パンパンの腸に押されて最近小さくなったように思える膀胱が自己主張を始めているので、早くしてほしいところだ。

「……おいしい」

「ご飯はともかくみそ汁と鮭は遥香の味がする。少し気がまぎれ落ち着くが、他人の排便を感じ取り、それができない莉里は少しだけ強い圧迫感を感じてしまった。もちろん便意にならなければ意味がないので、この食事で刺激されて催すのを待つばかりだ。

もくもくと食事を済ませ食器を片付けたら、音もしない廊下の横を抜けて脱衣所へ。歯ブラシに歯磨き粉を付けたところで、ふと嗜虐心が芽生えてきた。脱衣所の隣はトイレになっているが、莉里の小さな体と足音なら聞こえない。ずっとトイレのドアの前に立ち、便秘に苦しむ恋人をよそに気持ちよく済ませたのだろう彼女に言葉を投げかける。

「遥香っ！ ご飯おいしかったよ！」

「えちよ、あ、っ……くう……な、なにいきなり！」

「出た？」

「馬鹿じゃないの!？」

非常に焦っているようで少し気が晴れた。しかし、流石に能動的に嗅いだりはしないものの、中で済ませているにしては便臭が一切無い。他人のそれに触発されないかと少し下品なことを考えていたところも、無くはないのだけだ。

「莉里のせいで引込んだっての！ もう！」

「引込んだの？ 結構時間経ってるよ？」

「いいでしょ別に！ もう、どうするのよこれ！」

どうするのよと言われても。莉里は満足そうに悪い笑みを浮かべながら歯ブラシを咥えた。そもそも昨日、やけに長いトイレに、少しそ

わそわしなから消えていったのを覚えている。逆もしかり、それがどういふことなのかお互いに解るようになっていた。昨日もお通じがあつて、今日ダメだったくらいでそう怒らなくても。七日出ていないのもここにいてるのである。満足して歯を磨き顔を洗い、着替えに移ったところで遥香は水を流して出てきた。お腹を摩り、少し笑うような怒るような、複雑な表情で下着姿の莉里の首を後ろから掴んだ。

「莉里さん？　なんてことをしてくれたんです？」

「あはは……遥香さん、冷たい、手が濡れてて冷たいですよ？　一日くらいでそう怒らなくなつていいでしょ？」

「その！　一日で！　何日も続いちゃったりするでしょ！」

「やっぱりそつちだったんだ。言ってくれたら邪魔しなかつたのになあ」

「この……」

この土日は一日とも外出する予定なので、持ってきたのちやんとした外出着だ。あまりファッションに興味がない中、遥香が好きだというので買った白のワンピース。パシパシと頭を叩いてくる恋人は無視して、身だしなみを整えて。メイクはお互い気にしていないし、お互い不器用なのでやらない。莉里はすっぱんの遥香の方が美人だと思つているし、遥香は莉里のメイクはお絵かきだと思つている。

「出かけるんですよ？　行こ？」

「もう……勘弁してよね。大変なんだから」

冷蔵庫から牛乳を取り出し飲み出す遥香を見ながら、少しは気が紛れたかも、なんて、莉里は再びお腹を撫でた。

\*\*\*

遥香の一人暮らしの家は、少しだけ郊外にある。都会の真ん中は娘が心配だとした遥香の父親の配慮である。最低限売店しかない駅に莉里の運転で向かい、時刻表を確認しながら改札を潜る。

「どう？」

「ちょうど十分くらいで来るみたい。まあ朝だしね」

「そ。いつもこの時間は使っていないから……あ」

「何？」

ふと立ち止まった遥香が、眉を顰めて莉里の方を見た。少し切なげな、どこか上の空のような態度で、だいたい強めに息を吐いた。あたりを見回して、ハンドバッグを莉里に押し付ける。

「ごめん莉里、私ちょっと」

「何？」

「……言わなくても解るでしょ、今更」

すん、と莉里が鼻を鳴らす。特に何のこともない、ただ少しくずぐずたかただけなのだけど、途端に顔を真っ赤にしてバシン！と莉里を殴り飛ばす。ぐえ、なんてよろめく莉里に、彼女は自分の身体を抱くようにして怒鳴つた。

「何喚いでのよ！　正気!?」

「喚ぐって……あ」

大声に集まる少しの視線に少しだけ声を潜めて、遥香は恋人の耳を引く張る。自分を抱くにも少しお腹を庇うような態度と、そわそわと莉里を気にする遥香を見れば、十五年来の恋人のことなど手に取るよ

うに解る。

「お腹痛い？」

「……うん。歩いたし、牛乳飲んだし。ごめん、電車一本遅らせていい？」

遥香が普段から健康たる所以が見えていた。一度機会を逃しているのに、何か口にして少し体を動かせば再び便意が戻ってきてくれる。いまだお腹に突っ張ったような違和感のある莉里には羨ましい限りで、また少し意地悪をしたくなる。あえてとびきりの笑顔で肩を叩く。

「いいよ。ごゆっくり」

「……そういうこと言わなくていいの！」

抱えたものに少しだけ顔を擽めた遥香がトイレに駆け込んでいくのを見送る。ちら、と売店を見れば、当然たぐさんの飲み物が並んでいる。その中には、遥香を救ってくれた牛乳も並んでいる。ちょうど莉里の財布が小銭の重さにうんざりしていたところだった。

（……ま、まあ、水分補給は大切だもんね。うん）

自分に言い訳をしながらバックの牛乳を買い、ストローで流し込んでいく。お腹から腰元、お尻まで詰まったものが流れ出てくれるようにぎゅ、と押してみる。変な弾力は朝と変わらず、朝食が混ざってこれからさらに辛くなるのだろうと憂鬱になる。お腹は重いのに、莉里の肛門はまったくもって沈黙したままだ。少し腹筋に力を入れてみるも、何の音沙汰もない。出口には確かに鎮座するものを感じるのに、体が排便を拒否している。この土日で何ともならないのなら、恥を忍んで病院にでも行かなきゃ、なんて、さして好きでもない牛乳を飲みなが

ら樂觀的に考えていた。

とてもスムーズに事が進んだようで、遥香が帰ってきたのは莉里が飲み終わって、ピョンピョンと体内でお腹のものを下に落とせないと試し始めたころだった。ショートパンツの腹回りが心なしか少し余裕そうに見える。とても晴れ晴れとした表情の中に、少しの恥じらい。胸の高鳴りを感じながらも冷静に、莉里はハンドバッグを手渡した。少し冷たい手に触れる。

ありがと、とそのまま無言でホームに歩き出す遥香。もしかしくても正常に排便を済ませてきたのだ。莉里が希求しているように、自然の摂理に逆らうこともなく。いつものように手を繋ごうとして、少しだけ不安げにする恋人は愛おしいけれど、羨ましさからか少し強めに握ってみた。

他愛もない話をしたり、そうと思えばまったく会話が無くなったたりしてに十分ほど電車を待ち、乗り込む。休日午前の電車は空いていて、二人は誰もいない車両を選んでその端に並んで座った。終点まで行くのだ、荷物も網棚に乗せて、二人きりの車内でゆっくりと話していた。

「……ちなみにさ。そういう、毎日出るとて何かコツがあったりするの？」

「……あるわけないでしょ、もう。普通に暮らしてれば……こう、なるでしょ？」

「ならないから聞いてるんだけど……」

「ああ、朝しないからおかしいなどは思ってたけど……マッサージでもしてあげようか？ ん？」



そういう問題かなあ、とつぶやく莉里。お風呂でのマッサージにしろ独学ながら試したことはある。それとも、他人にやつてもらうのは違うのだろうか。ポンポンと莉里のお腹を叩く遙香はずっと運動部だった。莉里より力もあるし、その方が良いのかもしれない……なんて考えた、その時。

くう……きゅるるる……

キイイイイイイー……ツツツ!!!

二つの音がほぼ同時になった。一つは車内にも響くように劈き、一つは莉里の身体の中で静かに、可愛らしくすらあるように。

「……何？」

黙る莉里に代わり、遙香が立ち上がって窓の外を眺める。軽快に流れていた景色が止まってしまっている。車内に甲高い音が響き、慣性で遙香が莉里を押してしまっていた。経験が全く無いわけではない。電車の緊急停止だ。すぐに車内アナウンスが流れ、停止ボタンが押されたこと、しばらく停車する旨が告げられた。おそらくこれから一時間、早くとも三十分……電車の中で待ちぼうけすることになるだろう。

それに気づいて、莉里は青ざめた。数秒前、列車が止まったたちようどその時、莉里のお腹が出した音と、その感覚。それは確かに、ずっとお腹の中で溜め込まれていた巨大なものが、ずるずると直腸まで下りてきてしまった感触だった。溜めに溜めた重量が肛門に押し寄せる。電車の現在を認識する前に、圧力は確かな欲求になって莉里を襲っていた。

……うんちがしたい。

「ツイてないね、莉里……」

「う、うん、そうだね」

返事も当然のようにぎこちなくなる。ツイてない、と嘆くも、これから電車が動かないことは確定してしまっている。どんなにトイレに行きたくても我慢するしかなく、それに、普段のことを考えれば便意は一瞬で通り過ぎるだろう。

(ど、どうせ便秘なんだし……我慢すればそのうち引つ込んじやうよね……)

お通じ、とはつきり言ってしまったていいほど便意は強い。今すぐトイレに駆け込みたいくらいの便意ではあるが、今の莉里は重度の便秘である。後からどれだけ苦しむかと思うと背筋が凍る思いだが、それでも今この電車の中で我慢できなくなるよりはマシだ。少し背筋を伸ばして、お尻を窄める。ごつごつとした重みを抱えて息を飲み、退屈になって話出す遙香に向かっていく。

「あーあ……これは入場混んじやうなあ」

「だね……」

くきゅるるる……

「で……も、まあ、最悪家に帰って大人しくしてればいいんじゃない……」

「せっかくの休みなのに……」

「この間の……さ。ゲームの続きは……？」

「あれは難しすぎてできないって話になったじゃん。二人とも下手なんだからもっとシンプルなのじゃないと」

「っ……そ、そっか……」

お腹への強烈な圧力で言葉がつかえる。長い間排出を許されていなかった排泄物は、正規の手段で出てくるよりさらに強烈に、排泄を訴えかけてくる。話すには呼吸をしなければならないのに、息を吐くとお腹の力が抜けてしまう。お腹で何か形のあるものが、下へ下へと転がっていく。日数で大量に詰め込まれた大便是、経験したことのないほど急激に外に出たがった。

もちろん、それを遥香に気付かれるわけにはいかない。自分が遥香のそれに気付いてしまった事実はあるが、逆を許容できるかは別問題である。毎日のモノとは比べ物にならない量の汚いものが暴れまわっているのを知られるなど恥どころの騒ぎではない。必死になって笑顔を浮かべ、滲む汗に耐える。

くきゅるるる……きゅうう……

しかし、便意はまったく引いていかない。信じられないほど高まったまま、お尻に強く力をかけ続ける。またお腹がきゅるきゅると音を立てて、何か生き物があるかのように動き出す。お腹の中をあちらこちらと動いて、そしてお尻の一点に降りる。重みを抱えた腸が押し出そうと規則正しく動き出し、莉里に不規則な排便をさせようとする。少しでも誤魔化せないかと、あたかもただ硬めの座席に腰を痛めたただけだよ、とでも言うように、もぞもぞとお尻をずらして。

(んっ……う、くう……！)

こぼぼ、と、お腹の張りが一気に増した。排便のために活発に動き出した腸内で、急速にガスが湧き出てくる。気体で増した圧力が、ただでさえ固体を押さえようと必死に堪えている肛門を責め立てる。もちろん排出なんてできない。隣には最愛の恋人がいるのだ。生まれきた欲求の原因は、七日分の排泄物が溜まったところで湧き出たもの。まだ排出はしていないのに出口を熱くしているそれを解き放つてしまえば、たっぷりと熟成された汚らしいものの臭いをあたりに振り撒いてしまう。乗客は誰もいない。しかし遥香はいる。到底誤魔化せるような可愛いものではないだろう。

こぼぼぼっ……くるるる……

(だ、めえ……っ……が、我慢……！)

ぐぐぐ、と氣門に力を入れるも、もはや固体に占有された大腸には少しの余裕も残されていない。際限なく風船が膨らまされるように、本陣以上に寸前の欲求として高まっていく。

(ひっ……引つ込まない……で、でも……っ)

普段のガスなら、少し堪えていれば腸内で吸収されて終わりだろう。おならがしたいからといってそこで済ませる女性などほとんどいない。慎重深く我慢して、排便のついでに済ませる、せめて人のいないところでそっと出すのが嗜みというものだ。だが、もう我慢できない。内圧はもはや、何かを出しておかないと堪えられないほどに高まってしまっている。

ここで意地を張ってしまったら、きっと今度はもっと汚らしいものを晒すことになってしまう。それはもう、ひっきりなしに高い悲鳴と鈍い痛み、それからむずむずと排泄欲を伝えるお腹とお尻からよく解っている。もうどうしようもなく限界なのだ。会話をするのも忘れて、莉里は祈るように目を閉じていた。だから、遥香はそれを見て心配そうに声をかける。よもや彼女が、今この瞬間、崩壊を招くような穢れて茶色い、あるいは濁って黄色い欲求を堪えるのに精いっぱいだなんて思えなかった。

「莉里……？ どうしたの？ 具合悪い？ 大丈夫？ 私、車掌さん呼んでようか？」

「ち……違くて……これはその……ただ、少し……」

（や、やだやだ、で、出ちゃだめ、絶対無理、そんなの……ありえない……っ）

「あの……その……」

ごぼごぼ……っ!!

「だ、だめ……離れ……」

一際強く排泄を望む内なる声に、せめて離れたところで、醜態であろう臭いが届かない、車両の反対側まで離れようと莉里は立ち上がろうとして。すぐにそれが失敗だと悟ってしまった。堪えがたい便意に、莉里は排泄孔を無意識ながら座席に押し付けていたのだ。それが無くなれば、隙間ができてしまえば、我慢できよう理由なんてなくて。当

然の権利とばかりに、莉里の桃色の肉門を臭気がこじ開けた。

ぷす……ぶびっ、ぷすううっ……

「く、あ、ああ……っ」

口を開けたそこから、衝動に比べるならとても大人しく、下着の中に妙に熱いものが放たれた。気体は当然に布を通り抜け、中腰で動きを止めた彼女のワンピースを満たし、そこから外へ広がろうとする。そう長い時間はかからない。今から逃げての意味は無い。どうするのが一番恥ずかしくないのか、どうすればこの臭いものを嗅がせることになっても、遥香が嫌がらないだろうか、それだけを必死に考える。幸いにも、さっきまで頭の大部分を埋め尽くしていた排泄欲は、満足したのかほんの少しだけ落ちていくれている。焦った莉里は遥香の手を乱暴にとって、そのまま荒れ狂う自分のお腹に当てた。

「ごめ……んっ、遥香、私……」

ぎゅるるるるっ!! ぐううう……っ!

「り、莉里……これ……う？」

どうせお腹は鳴りっぱなしとそうした莉里だったが、お腹の方はまた変化していて。あくまで可愛らしい悲鳴のようだったそこは、出口を見つけたことで調子に乗って、汚い欲求と彼女が思っている通りに、明らかに尋常ではない重苦しい音を響かせていた。それに触れて、音

と蠕動を感じ取って、遥香は眼を見開いた。そして一瞬遅れ、遥香の鼻にも莉里の恥が知らされた。いかに恋人のものとはいえ、一瞬顔を顰めてしまうほど、腐ったような排泄物特有の酷い臭気が辺りに漂う。それは何よりも雄弁に、今莉里がどういう状態に置かれているのかを語っていた。

「ご、ごめん……その……大丈夫？」

「ぐ……だ、大丈夫……」

もちろん、大丈夫なはずがない。恥じらいのおならで少しは便意も引いたとはいえ、まだまだ本番、巨大な塊を出してしまうまでは根本的な解決は見られない。変わらず出口に信じられない圧力がかかっていることには変わりがないのだ。

「あ、朝しなかったのって……」

「最近……出てなくて……」

それで、遥香にそれを言っただけで何かが変わるのだろうか。お腹を捻じめるような排便欲求はもうバレてしまっている。音で知らせてしまった腹具合が限界だと教えたところで、何が変わるというのだろうか。むしろ、排便一つ我慢できない、それも下しているわけでもなく、溜めてしまった原因は知らずとも単なる「お通じ」を我慢するのが辛くて堪らない、ひくひくとお尻が開きそうなんて言えるはずがない。

ぎゅるるうつつ!!

「ひ……う……っ」

だが、そんな恥じらいにも関わらず、莉里の大腸は老廃物を押し出

そうとポンプ運動をやめようとしめない。ほとんど日焼けもない細身の腹の下で、焦げた色のものが暴れている。気を抜いていたわけでもないので、ぎゅっと押し寄せてくる衝動に声が漏れ出してしまう。反射的に、本当に反射で、ぶくりと盛り上がった出口に腹筋から力を入れただけ。確かな重量がお尻の穴の寸前から少しだけ戻っていく。それでも、すぐに戻ってきてしまうようだ。素っ頓狂な声を上げてがたがたと足踏みを始めてしまった莉里を氣遣ってか、遥香はすぐに手を放し背中を撫で始めた。

「莉里、い、いつから我慢してるの!？」

「さ……さっき……電車が止まったあたり……」

「……どれくらい我慢できそう？」

「わ……かない……っ」

ぐりゅうぐりゅうつつ!!

林間学校で便秘薬を使ってしまった少女たちのお話  
できずとりん

五月下旬の、ある日の朝、閑静な住宅街の一角にある一軒家で。

ぶびいっつ!! ぶうっ!! .....ぶすうーっ.....

家の中に響いているのは、朝食を作るフライパンの音でもなく、洗面所の流水音でもなく、トイレからの甲高い放屁音だった。

.....ぶうっ!! ぶっ!! .....プビビビッ!!

この時間にトイレに入る者の目的と言えば、男女問わず一つに限られる。トイレに行くのが恥ずかしくなってきた女子小学生も、朝から会社に向かう女性会社員も、駅で慌てて途中下車した女子高校生も——皆、大便をするためにトイレに向かい、そして用を足す。

「.....はあっ、うう.....くうっ.....だめ、出ない.....っ!!」

しかし一か月前に中学校へと上がった少女、香織の場合はそうもいかなかった。つい先週まで毎朝家のトイレで、或いは恥を忍んで学校のトイレをする羽目にもなっていた大便が、まったくもって出ない。便秘すら催さなくなっていた。

「お姉ちゃん早く出てきてよ!! 私もう漏れちゃいそう!!」

(出たな妹よ.....っ、しょうがないし、出てあげるか.....)

「はいはい、ちよつと待ってて」

ドアの外からは五年生の妹、彩音がトイレのドアを叩く音が聞こえてくる。お腹の緩い体質の彩音は、最近是学校でトイレに行くのを恥ずかしがり始めたようで、朝のトイレでかち合うようになった。

それでも、これが普通の日常であればまだ、問題ないであろう。

あきらめて表情で臀部を拭き——もちろんその紙が汚れることもなく——トイレを出た香織が手にしたのは、リュックサックと、そして二日の着替えが入ったポストンバッグ。

「ごめんね、お待たせ」

「ほんとだよ.....!!」

プチュプチュプチュプビーーッ!!

すぐに閉じたトイレのドアの向こうから水つばい音がするのをかわいそうに見つめながら、香織は玄関へと向かう。

普段の制服とは異なる私服姿で2つのカバンを持ち、晴天の下で香織は元氣よく母親の見送りを受け.....その姿が見えなくなるや、また曇天の表情を浮かべた。

(結局ウンチ、出なかった.....どうしよう.....)

家からすぐのバス停でバスに乗り、学校へと向かいながら香織は買ってもらったばかりのスマホを見ていた。

(林間学校.....皆いるから、ウンチできないかもしれないのに)

自分の快便体質をふと不安に思い、調べたページの数々。『朝のトイレが混んでいて、部屋のトイレも誰かが使っていた。あきらめて使ったけど恥ずかしかった』『三日だったから出さずにずっと我慢してた』

『お腹が痛かったのに、朝のトイレが並んでいて大変だった』そんな多くの情報を得るうちに、たちまち香織の心に一点の曇りが生じた。

もつとも、彼女が最後に排便した日と、このサイトを見始めて不安を覚えた日が同じということには、まだ気づいていない。

「川下り.....大丈夫、かな.....」

ぐるるるっ.....ぎゅるるるるるるっ.....

唸る腹を横目に林間学校のしおりを見れば、最終日の予定にはラフティングとある。調べてみるとウォータースーツを着なければいけないようで、そこに昨日見た、明らかに膨らんできている自分の下腹部が重なって見えた。体のラインが隠し切れない服を、女子更衣室の中はおろか男子もいるポートで晒せば……そう思うだけで香織は羞恥心でいっぱいになる羽目になった。

「あ、香織ちゃん、おはよう」

「さやちゃんおはよう、あ、その服……」

あつという間にバスは学校最寄りのバス停の近くまでたどり着き、次々と香織の同級生たちを乗せて走る。曇った表情を心の奥底にしまい込みながら、

（どうか三日目の朝までにはウンチ、出ますように……）

お腹に向かって祈るような願いを込める香織であった。

それからの一日は、幸運にも不幸にも、トイレのことを忘れられる一日となった。バスに乗って宿舎につけばすぐに昼食とレクリエーション。間髪入れず夕食を友人とともに食べ、体をうまく隠しながら入浴し、会議に出て、もう就寝時刻。同じ部屋的女子たちと恋バナをしていつの間にか寝落ちして、気が付けば二日目になり朝食を食べているところだった。

（あつ……なんか、お腹、痛い、かも……?）

そんな香織に自分の抱える問題を思い出させたのは、自分の下腹部

が発した鈍い痛みであった。林間学校初日の夕食は、調子に乗って食べすぎたからそのおかげかもしれない……そんな僅かな希望を抱きながら、彼女はお腹をこっさりさする。

ぎゅるるるるる……

『それでは朝食時間は終了とします』

鈍くお腹が鳴ったが、運よくアナウンスがその音をかき消した。そしてそのアナウンスは、食事時間の終了——つまり、これから自由に動いていいことを言っている。香織は一瞬悩み、そして意を決したように、食堂の出口のほうへと足を急いだ。

「よかった、まだ空いてるっ」

食堂から一番近い女子トイレ。便意を解消するべくそのトイレへと向かう女子も少なくはなかったが、しかし六つある個室はまだ満室ではなかった。一番右奥の洋式は誰かが使っているものの、その隣の和式トイレはまだ空いていた。それ以外の個室はもう埋まっており、香織が入ることのできる個室は最後の一つ。迷わず香織がその個室に足を伸ばし、そしてついに全ての個室の扉が赤色を示す。

（和式、久しぶりだけど……今はこっちのほうが良いかな）

数か月ぶりに使う和式トイレを一瞥してから、香織は下着とジャージを下ろし、便器にしゃがむ。わずかに息を込めれば、かなり濃厚な発酵臭となったガスが飛び出てきた。

ぶりりりいっ！ プブブウ、プビィツ!!

「ぬうっ……んぐ、ぐう……ううっ!!」

わずかな便意、その存在を信じて肛門を開けようとする。しかし開

いた肛門からは、その奥から出てくるはずの茶色い物体が一切姿を現してくれない。

(なんで、出てくれないのっ……)

まる四日間かけてため込まれた大便は、そうやすやすと排泄できるわけではない。息苦しくなったところで、一度息を吸いなおして呼吸を整えることにした。

にちちっ……ぶりゅぶりゅっ!! ブリッブウッ!

ブリュリユリユリユッ!! ビチビチ……プビチッ、ぶびびいっ!!

香織とは対照的に、周りの個室からは、排便しているとき独特の粘着質な音がしてきていた。或いは、最初に埋まった洋式トイレのように、下し気味な水っぱい音が聞こえる個室もある。いずれにしても排泄音が聞こえてくるのは同じで、ただ高音のオナラの音だけが聞こえてくる個室というのは、一つしかなかった。

(みんな、出てるのに、私だけ……)

ぷりっ! ぷすっ! ぷうっ! プププ……ぶびいっ!

別に下痢や便秘をしていて時間のかかる者が先に入るべきでないとか、そういった明確なルールなどは存在しない。ただ個室を占有している一人の女子として、香織は周りのことを気にしないわけにもいかなかった。いつまで経ってもオナラしか出てくれず、排便していない状況にただただ焦りばかりが募る。

そしてそのほんの少し後には、水が流れる音と、鍵が開き、また締められる音すら聞こえてきていた。

(うそっ、もう誰かウンチ終わったの……? 私なんて)

ぷうっ……ぶぶーっ!! ……………ブッ!

もうお腹に力を入れても、たいしてオナラも出なくなっている。朝食を食べ終わるころに感じ始めた便意は、強くなることもないが、しかし同時にトイレを諦めるには勿体ない程の希望として下腹部に居座り続けていた。

(もしかしたら、出るかもしれないのに……)

「んぐぐう、ああっ……ぐざいいい……はあっ、はあ……」

周りの個室でも気張ってる声が漏れているから——そんな言い訳を自分の中に用意して、香織はすべての体力を下腹部に捧げていた。大きめの声を出しても、別の個室では下痢をして唸っている女子もいるので気づかれてはいない。

ぶぶっ、ぶびいーっ!! ……………ミチッ。

そしてそのおかげか、わずかに肛門の広がる感触がして……しかし、それまでだった。肛門からは茶色い塊の先端がほんの少し顔を出しているが、それ以上どれほどに気張っても進まない。

そんな膠着状態のなか、個室の外からも声が漏れだした。

「ねえ、まだ空かないのお……?」

「あのー、みんなお腹痛いんで、早く出てくださいー!!」

「ちよっとアユミ、やめてよ恥ずかしい……」

「でも実際早く出てくれないと……ノック、する……?」

このトイレは食堂から一番近いトイレのため、駆け込んでくる女子はどちらかというと切羽詰まった便意を催していることが多い。まだ便意に余裕のある女子と違い、宿舍本館のトイレや部屋までは戻れない女子ばかりが集まるのだ。

そんな腹具合の女子に早くするよう言われてしまっっては、香織だっ

て便意もあきらめざるを得ない。今ならば、出るかもしれない大便を引つ込めることはできる。これ以上踏ん張れば、もう後戻りはできない。

(もういいや……出よう)

しかし個室の外には、まだ多くの女子たちが空くのを待っている。こんな状態でできるかも分からない排便を続ける勇氣は、香織には無いに等しかった。

仕方がないので、目の前のペーパーホルダーに手を伸ばして紙を巻き取る。おしりを拭いたところで勿論何も汚れがつくことはない。綺麗なままの便器に綺麗なままのトイレトペーパーを捨ててから水を流して、個室を出る。

「……空いたっ……!!」

入口の方まで伸びる十人以上の行列。恐らくほぼ全員が腹痛や便意に苛まれているはずだ。その先頭に立っていた女子が香織の出できた個室にダッシュし、たちまち赤い印が跳ね上がる。

朝のトイレにしては珍しく臭くないトイレに驚く余裕などないようで、すぐに周りと同じような音が響き渡った。

(みんなウンチしたいんだ……臭いし、早く戻ろう)

「いいなあトイレに入れて……」「お腹、痛い……」

様々にお腹に手をやりながら前方を不安な目で眺める女子たちの横を抜けながら、香織は自分に部屋へと戻った。

それからの半日も、あつという間に過ぎていった。山でオリエンテーリングをして、入浴して夜には全員が楽しみにするバーベキュー。帰る準備を整えながら就寝時刻を迎え、もはや誰も雑談をする氣力もありませんすぐに部屋の全員が寝静まり――

午前、一時。五人部屋で、香織以外の四人はみなすうーっ、と寝息を立てている。一日中動き回った疲れからか香織も睡魔に襲われてはいるものの、同時に別の欲求も感じ取っていた。

ギュルルルッ、ごろごろぐうーっ……………

(……もしかして、ウンチ出るかな……出そう……)

数日ぶりの体全体を動かすような運動。その直後にはバーベキューで多量の食物が胃へと入った。そして布団に入ったリラックス状態。四日間かけて大きな質量を溜め込んだ大腸が蠕動運動を行うには最適な条件だった。

(トイレ、行ってみよう、かな……?)

部屋のトイレはあるけれど、ここで大きな音を立てたら即バレしてしまうから駄目。香織は頭を巡らせながら、足の伸ばせそうな女子トイレを探す。

(確か各階の廊下の端にトイレ、あつたよね……)

氣付かれないように、ゆっくり、ゆうっくり。一分以上の時間を掛けて布団から這い出し、暗闇の中自分の靴を探す。防犯の名目で部屋のドアが開放されていたのは、せめてもの救いだつた。

(確か、こっち……)

幸いにも、香織の泊まっている三階には出歩いている者はいなかった。四階のトイレを目指していれば、下痢を長時間我慢しながら同じ



くトイレを目指して歩く隣のクラスの女子と一緒に、大変なことになっていたことだろう。或いは二階のトイレに行こうものなら、夕飯のバーベキューの後に便意を催した三人の少女により全ての個室が埋まった挙げ句、四人目の女子が扉を順番にノックし続けているという、真夜中の共用トイレとは思えない状況に唾然としていただろう。

(なんだ、『他にもウンチしてる子がいて気まずかった』とか書いてあったけど、そんなことないじゃん……一人でウンチできそう)

しかし、そうして辿り着いた女子トイレの入り口には、一足の靴が置かれていた。トイレを使うには中でスリッパに履き替えないとけないから、誰かトイレに居るということを示している。廊下で出くわさなかったからといって油断したせいで、既にトイレで誰かしら踏ん張っている女子がいるというのは、香織にとつて想定外だった。

(誰かいるの……? やだなあ……誰かに聞かれたら、恥ずかしい……)でも、せつかくの僅かな便意を逃がすわけにはいかない。香織は、意を決して扉を開けた。

「……んっ……んああっ……ぐう……」

ぶふっ!! ぶふっ……ぶびいっ!! ブスッ、ブボツ!!

閉まっていたのは、一番奥の洋式トイレではなく、その手前の和式トイレ。そして中からは荒い息遣いが聞こえるが、しかし伴う音は異常なまでに乾ききった音。

(この子も、きつと、私と……?)

トイレを諦めようと思う意思もあった香織だったが、その気持ちよりも共感のほうが先立った。恐る恐る、もう一つ空いている和式トイレに入り、鍵をかけて迷うことなくしゃがむ。

ぶびいっ!! ぶぶうーっ!! ブリリリリッ!! ……ブブウ……すぐに大きな音のおならが出て……しかし、それだけだった。香織の願う、茶色くて質量のある物体は、一切姿を見せない。

「……………」

その隣の個室からは、息む声も、オナラの音も、一切の音がしなくなっていた。それもそうだろう。誰もいない瞬間を狙ってわざわざ真夜中に共用のトイレまで来ているというのに、ここで排泄音を晒したくはない。香織が出ていくまで我慢したいことだろう。

「んぐう……はあ、ううっ……ッ!!」

ぶびいっ!! ぶすすうーっ……ブブツ!! ツブボボオーツ!!

でも、一番手前の個室に入った香織も、また目的を同じくしているのである。今朝はトイレが混んでいたために叶わなかったが、今改めて、腸に溜め込んだ大きな塊を自力で外に出そうとしやがんでいる。そんな状態で、二、三分は経つたのだろうか。

「……………つ。はあ……………んうーっ……ぐはあっ、うっ!!」

ブボボボボボボツ!! ぶびびびつ、ぶうーっ!! ブスス……困惑し、何かに耐えるような息遣いから一変。小さなため息に続いて大きく息む声がしたと思うと、大きなオナラの音がし始めた。

それは香織がすぐに終わってくれないと諦めたからなのか、それとも単純にガスが溜まってきて我慢できなくなっただけなのか——それは分からない。しかし現実として、隣同士でしゃがんだ二人の少女は、共に便秘に悩み、あたかもそんな者同士で意思疎通をしているかのようひたすら排泄を続けた。

「……………ううっ、んっ……!! ぐう……」

「ぐう……ぐはっ、ぐぎい……はあっ、はあ」

プウビイイイッ!! プリリッ……ぶびっ!! ぶぶぶっ……

それからしばらくの間、人気のないはずのトイレは、しばし周期的な音に支配されていた。息む音と、放屁の音。等間隔に、二つの音源からその音は繰り返される。しかし、どれだけの時間が経とうとも、その音が質量を伴った粘着質な音に変わることだけはなかった。

(うそ、もう一時半……なの?)

……ぶびっ、ぶうーっ……

(でない……明日までには出さなきゃなのに……)

三十分格闘しても、香織のお腹の中の代物は遂に姿を見せなかった。明日の川下りに心配を残すものの、これ以上居座っても体力が持たないというのが睡魔に覆われた頭の中ではつきりと思っていた。

(だめだあ……もういいや、帰ろう。眠い!)

しゅいしゅい……ちよろろっ。

夜中に起きたのは、小用を足すため——そうとでも言いたげに、僅かに便器を黄色に染め上げて、香織は立ち上がる。やがて金属音が響き、香織が個室の外に出たとき、もう一つ、金属音がした。

「……ねえ、もしかして、あなたも、その……便、秘……」

「え……? あ、うん……便秘、しちゃって……」

「そっか……ねえ、ちよつとまってよ」

水を流す音と同時に突然現れた少女は、そう言い残し、トイレから出ていく。どうすればいいかわからないまま香織が立ち尽くすこと数分。彼女は戻ってきた。

その手には、薬の箱のようなものが握りしめられていた。

「……これ、今から飲めば六、七時間後……ちょうど朝ごはんが終わる頃には、効き始めるはずだから」

「え、でも……」

「明日、川下りだもんね……だから、でしょ」

「うん、ありがとう……」

その手から一錠渡されたのは、オレンジ色の錠剤。良くも悪くも便通問題に悩まされたことのない香織は、この錠剤の名前すら知らなかった。

「……ねえ、名前は？」

渡すものを渡し、さっさと立ち去ろうとする少女の背中が出口へと消える前に、香織は最後の一声を絞った。

「……三組の、吉川真緒。んっ……そっちは？」

「錠剤を飲みながら、その少女——真緒は答える。」

「私は、香織。篠原香織。一組。んっ……ありがとうね」

「……うん、それじゃ」

伏目がちな二人の少女が、初めてほんの少しの笑顔を見せた瞬間だった。

そして翌朝、朝食会場にて。あまり思い出したいこととばかりに、昨夜のことは香織の頭の中から消え去り、朝食を迎える。

『それでは朝食時間は終了とします』

そんなアナウンスと同時に、多くの生徒が動き出す。香織も動き出そうとして、そして、その瞬間だった。

——昨日の出来事を、ハッキリと思い出してしまったのは。

ごろぎゆるるるるるるるるるるるっ!!

(え、ちよつと、なにこれ、ウンチが……………あつ)

《ちょうど朝ごはんが終わる頃には、効き始めるはずだから》

今行けば、出るかもしれない……………どころの騒ぎではなかった。「出るかもしれない」、ではなく、「出る」「出そう」。今すぐに出したい。

身体中が熱烈に便器を、あの白い陶器を求めている。

(入り口、混んでるけど……………早く戻らなきゃ)

トイレに行きたい——身体がそう認識した時には、半ば遅かった。

昨日よりも速いペースで出口に人が殺到している。その波に飲まれながら、香織は手近なトイレを目指した。

しかしそのトイレとは、香織が昨日の朝踏ん張った場所である。それはつまり一番混雑しているということ。

「もういっぱいなの……………」「こんな、並んで……………」

早くも昨日と同じかそれより多い十人以上が、香織と同じように便器を求めて行列をなしており、

「ふうん……………」「……………んぐっ」「ううっ……………痛い……………」

ニチチチチ……………ブリュブリュブリュブリュ……………!!

ぶびびびっ、ビチビチビチ!! ぷりりりいーっ……………

そして昨日と同じように閉ざされた、六つの個室。その全てから排泄音が聞こえるが、昨日よりも下し気味な音である。昨晩はバーベキューということで、食べすぎた生徒が多いのは男女共通のことだ。

それゆえに今朝は、何かに中った訳ではないが、便意、それも下痢気味の便意を抱えている女子が昨日よりも多い。

(だめ、こんなに待てない……………)

多くの女子たちと同様に、しかたなく香織もまた、部屋へと戻る流れに乗る。次に辿り着いたトイレは、宿舎の一階にある女子トイレだった。しかしこのトイレも、四つしかない個室が全て埋まり、十人近くの女子が中にいる。

(ここも一杯……………あとは、どこか、トイレ……………)

トイレから離れながら、他のトイレの場所を懸命に探す香織。それは彼女に限った話ではなく、他にもお腹を不安そうに見つめながらトイレを探す女子が確認できた。数名は部屋のトイレに戻ったようだが、香織にとつて、あの壁が薄いトイレを使うのだけは嫌だった。何より、部屋のトイレも誰が使っている可能性は高い。

ごろろろろろ、ギュルルルル……………

にもかかわらず、便秘薬により蠕動運動を活性化させた大腸は、他の女子よりも激しく中身を外に出そうとして、肛門に今まで経験がないほどの圧力をかけていく。

(我慢、やばい、どうしよう……………あつ、あれは)

ふとその目には、トイレを見て絶望しかけた一人の女子が映った。

「あつ、真緒、ちゃん……………真緒ちゃんも、もしかして……………」

「ええ、昨日の、効いてきたみたい、なんだけけど……………うっ」

二人の少女は、思わず一度立ち止まってしまふ。互いに見つめ合い、そして同じ状況に陥っていると悟る。

「ねえ香織、どこか、空いているトイレ、知らない……………」

「だめ、他のトイレ、どこも一杯で……空いてなくて……でも、お腹痛くて漏れちゃいそう」

「私も……食堂のトイレ、混んでた？」

「多分……昨日の朝も一杯飲んで、ウンチしてる子も多かったから、多分無理だと思う……」

「うそでしょ……あつ、宿舎の、トイレなら……」

「あつ、確かに……行こう!!」

香織と真緒、二人の少女が出した結論は、宿舎の廊下の端にあるトイレ。それは、昨日二人が出会った場所でもあった。

そこならばまだ、彼女たちを、いや彼女たちのお腹の中身を、受け止めてくれる便器があるかもしれない。そう信じて、お尻を引き締めながら階段を登ったのだが。

「だめ、ここも……?」

今にも暴れそうな便秘ウンチを抑えながらやってきた女子トイレは、あいにく四つの個室が全部埋まっていて、便臭が漂ってくる。そしてどの個室にも、二、三人の女子が並んでいた。

「ねえ、まだ掛かるの?」「私もうんこしたい!! 唯はやく!!」

どうやらここでも、全員目的は同じようで……これだけの人数が大便を済ませるまで我慢するというのは、便秘薬の強烈な便意に苛まれる香織にとって到底不可能だった。

「どう、しよう……」

「他に、何処か、トイレ……早く、行きたい……」

ごろごろ、ぎゅるぎゅる……どちらのものとも分からないお腹の音

を立てながら、香織と真緒の顔が徐々に絶望に染まっていく。何処かにトイレはないか。しかし考えれば考えるほど、どこにも使えそうなトイレはない。このまま三階や四階のトイレを目指しても、空いているとは思えなかった。

(どこか、探してあげないと……薬、貰ったんだし……)

その中でも、香織は懸命に打開策を考えていた。自分のお腹をどうにかしたいという思いは勿論のこと、それ以上に、あの便秘薬をくれた一人の少女のお腹も助けなければいけないという思いがあった。

薬をくれた同胞への、唯一できる恩返し。少し熟慮した香織は、やがて一つの可能性に行き着いた。

「つ、……大浴場………」

「……え?」

その声を聞いた真緒の表情は、怪訝そのものだった。それもそうだ。この状況でそう言われて思い当たるのは、便器ではなく最後の手段、洗面器程度である。

しかし、香織の頭の中はそうではなかった。

「大浴場の中って、トイレ、なかったっけ……」

「……あつ!!」

もちろん、相当に危険な賭けではあった。ここから離れた大浴場。そのトイレが使えなければ、もう打つ手なしに陥る可能性は大きい。大浴場の鍵が開いているかわからないが……しかし二人にとって、この行列に並ぶよりも勝算があるように思えた。

「……行こう。」

二人は秘密を持っている

温雲智子

カレンダーも残すところ後一枚。

今日も朝から、寒風かんぷうの名に違わず、素晴らしいお天気です。

果てしなく澄み渡る青空に、煌めく太陽。窓際の籠で、カナリアは歌い、空っ風がくたびれた庭の芝生を優しく撫でています。

お勤め前のお父様も、朝のお仕事を終えたばかりの婆やや使用人達も、先程まで朝食の席で、クリスマス晩餐会の予定について、楽しみに語らっておりました。

お母様も、この頃はどことなく表情が穏やかに見えます。私がそう思ったならそうなんです、半分位の割合で。

ともかく、この家はいつもと同じように平和で、笑顔で、円満で、それはもう大変に結構なことです。ええ、本心です。本心ですとも……。

「ふっ……！ ふうん！ んんっ！」

ぶすっ びすっ

「あうあ……うんんっ！ ふうんっ、んんうっ！」

ところで、どうしてその円満な家の長女たる私は、今日も朝から屋敷のトイレに籠り、一人だけ死に物狂いで唸らねばならないのでしょうか？ 誰か教えて下さりませんか？

「くくっ……！ ……んー、んーっ！」

ペーパーホルダーの上にある黄金の稲穂畑の写真も、マットの鮮や

かなイラクサ模様も、花瓶に挿されたダリアも見飽きてしまいました。た。

残念ながら、そんな美しい物には今は用はありません。

こんなことになるなんて、八日前には思ってもいませんでした。約一五分の格闘の末、あんまり見ないようにしながら流した、いかにもおぞましかったあの黒い塊が、またもこんなに逢い難い存在になるなんて。

顔すら見せず、図々しくお腹の中に居座ってしまう厄介な同居人になるだなんて。

ぶすう ぶす ぶす

悪戦苦闘する私を嘲笑うように、また大変芳しい香りが私の下の口から漏れます。

芳香剤が切れているのか、このトイレの中も、すっかり悪い空気で充満してしまっていますが、最早臭いとすら思えません。

尾籠なお話になってしまいましたが、私の願いは唯一つ。

うんち、したい。

それさえ叶ってしまったら、こんな狭くて陰鬱な一角などさっさと飛び出して、いつも通り、気品と慈悲の笑みと共に、皆と来る聖夜について語り合いたいと思っているのに。

「……はあ、はあ……うう、ふううーん、ん、ひ、ひひんっ！」

びっ ぶびっ ぶびっ

……馬みみたいな声が出てしまいましたわね。本当に恥ずかしい。久塚辺りが聞いていないことを祈ります。

しかし、どうして私のお腹はこんなにも意固地なのでしょう。紛

れもない自分の体なんだから、少しは思い通りになってくれてもいいのに。

「……だから、いい加減出てよ、もうっ……！」

そう呟きながら、背中をぐっと丸めた瞬間。

こん　こん

目の前の木の扉から、小さくも忘々しい拳の音が響きました。

\*\*\*\*\*

私が仕える立華<sup>りっか</sup>お嬢様は、今日もこの向こうで、美貌にそぐわぬ獣のような声を出して息まれている。

そして、それをトイレの前ですっと立って待っている私はいえ、足が少しずつくたびれて、棒のようになっていくのをただひたすらに耐えていた。手に持った二人分の通学鞆を置いて、床の上に座り込みたい衝動に駆られるが、ぐっと抑える。

私は懷から、ここに来た時に貰った懷中時計を取り出した。

盤面では、立華様が入られてから既に二〇分は経っている。後五分もすれば学校への出立の時間だ。もう車の準備は終わっているだろうし、立華様も私もこのまま行かないという訳にもいかないだろう。

この状況自体は何も初めてではない。最近数日間ずっと続いているし、もう慣れている。面倒なのはここからだ。

私は時計をしまい、意を決して扉をノックした。

「……なあに」

ノックしてから一呼吸つくかないかの間に、案の定というか、い

かにも苦しい立華様の声が聞こえた。万一の事態が今日も来なかったことに胸を撫で下ろしながら私は告げる。

「立華様、そろそろ時間です。お出になれませんか」

「……お願い、後少しだけ待って頂戴」

「これ以上待っていたら、学校に遅れてしまいます。今は諦めましょう」

「学校なんて知らない。私、今日は休むことにしたわ。久塚さん、あなた一人で行けばいいでしょう」

「毎日言っていますがそれは無理です。私は立華様のお世話を任されている身。勝手にあなたを置いていくなど許されません」

「……では、一緒に休みませんか？　久塚さん、家では仕事で、学校では勉強で疲れているでしょう？　確かに最初の内は自主欠席するのってなんとなく罪悪感があるけど、実はそんなに悪いことじゃないし、慣れるといいものよ」

「無理です。というより、実際に悪いことです。勝手に巻き込まないで下さい。第一、いきなり学校を休んだりしたら、先生方もお友達も心配しますよ。後、家にも連絡がいきますよ」

最後の言葉の後、扉の向こうのご主人様は、ややうすら寒い気配と共に黙り込んだ。

「……少しは私のことも考えて下さらないの、あなたって人は。仮にもあなた、私の使用人でしょう」

沈黙を挟んでの反駁、いや口答え。立華様は感情的な戦術に切り替えられたようだ。その声には、微かに苛立ちが混じっている。

「立華様のお体の事情については同情します。ですが、私も仕事上、

どうしてもやむを得ないからこうして声をかけさせて頂いている訳です」

「毎朝そう言いますよね、久塚さんって。たまには他のことも言ったらどうなの。私だって出れるものなら出たいですわ、むしろ出したい位ですよ！ できないからこうして頼んでいるというのに、どうしてあなたはそんなに冷たい態度をとるのよ！」

本当に苛々している時の口調だ。

立華様はよっぽど切羽詰まっていると見える。だが、それは私も同じだ。こうしている間にも出立の時間は刻一刻と迫っている……だから。

「本当に申し訳ありません。私は決して立華様のことを軽んじてなどおりません。ただ、このままお休みとなると、お母様は一体なんと仰るでしょうね」

途端に、扉の向こうが再び冷たい静寂に包まれた。

「……分かったわ。出ればいいのでしよう、出れば」

……数秒の空白を挟み、いかにも腹の中の煮えくり返るものを押さえてます、といったような口調で、立華様はしぶしぶ答えた。

最早すっかり恒例となった、ご令嬢と使用人の扉を挟んだ応酬は、今日も私の勝利に終わった。

\*\*\*\*\*

お母様の名前を出してくるなんて。私と同年で、使用人見習いにくせに、久塚は本当に生意気で、血も涙もない人です。秋口にこの方

が世話役になってから大分経ちますが、未だに慣れません。物凄く不遜な使用人です。特に主人が入っているトイレの扉を叩いて、早く出るよう急かすなんて、失礼極まります。本当にここに来る前に、ちゃんとした教育を受けてきたのでしょうか？ ここ一ヶ月で急に悪化したお通じ。これがなかなか治らないのも、少なからずこの人のせいなんじゃないかって、この頃は思います。

何はともあれ、早くここを出なければなりません。私は何回か紙を巻き取って、お小水で濡れた股の辺りと、後申し訳程度に後ろの口の所を拭きました。念のために後ろを拭いた後の紙を見ましたが、情けない程しわくちゃんになった紙の他、何もありません。黄色く染まっただけの水溜まりに紙を投げ入れると、ショーツを上げ、タンクの横のレバーコックを捻りました。

ばじゃあああああああ……

派手な音を立てて水が流れていきます。

これ位勢い良く、私のお腹に溜まった不愉快な同居人も出ていつて下さればいいのに。日々、緩めていたスカートのホックを締める度、きつくなっているのを感じます。お腹が重いと心も重くなるのは、私だけでしょか？

すぐ横の洗面台で手を洗い、扉を開けると、久塚がひどく生意気な顔をしながら、ぺこりとお辞儀をしました。

「お急がせして申し訳ありません」

そう言いながらも、扉の中から漂ってくる臭いのせいでしょか、少し眉をひそめています。私はといえば、顔から火が出そうな気持ちになります。

「車庫の方へ急ぎましょう。早くしないと遅刻します」  
言われなくても分かっておりますわよ。

私は自分の鞆を受け取ると、リノリウムの床の上を、二人で音を立てながら駆けていきました。

\*\*\*\*\*

一五歳の春、バイト先から家に帰ると、母が玄関先で倒れていた。突然のことだったから、葬式を挙げるお金すらなかった。泣く暇もないまま、役所の福祉係と相談し、何とか形だけの埋葬を終えた後、抜け殻になったアパートの一室で呆然としている時に、その知らせはやって来た。縁もゆかりもないとある地方の金持ちの男が、私を引き取りたいと願いだしたというのだ。

彼と母の関係、そして私の戸籍と現実の相違に関する、霞のように掴めない「真実」について聞かされた時は、正直に言って何が何だか分からなかった。分からないまま、私は今まで住んでいた町とは遠く離れた、その金持ちの屋敷に引越すことになった。何もかもが突然起きて、あつという間に進んでいった。

初めてその金持ちの奥さん——つまり私の義母にあたる——に会った時のことは、今でも忘れない。普段はいかにも取り付く島もない貴婦人といった感じの彼女であるが、その時だけは穏やかな顔をしていた。私を見るなり、ぎゅっと両手を握りしめ、目を細めながらこう言った。

「今までごめんなさい。本当に苦しかったでしょう。夫がほったらか

してきた分、これからは幸せにしますからね」

我が子のように語りかけてくるその姿に、たまらず嗚咽を漏らしてしまったのを今でも覚えている。心の底にわだかまっていた薄暗い不安も不信も、それ以来どうでもよくなった。

現在、この屋敷で私は、表向き新しく入った使用人志望者ということになっている。彼ら曰く、世間体の問題から、流石に妾の子だとか大っぴらにはできないし、いきなり養子として迎え入れるのも難しいという。今更理不尽など感じない。ただただ、金持ちの問題がいっぱいあって大変だな、と思う。いずれにせよ、明日も分からない日々を送るよりはずっとましというのに変わりはないのだ。

という訳で、この夏までの間、私は他の使用人達と一緒に共同生活を営みながら、彼女らの働き方というのを一から学んできた。ベッドの手入れ、食事の準備、屋敷の掃除と学ぶことは多かったが、先輩方は、身寄りのない（という体の）私に気遣ってか、一つ一つ丁寧に教えてくれるし、ましてやいじめられるようなこともなかったのだ、しばらくは平和な夏を過ごした。仕事もやっていく内にだんだん慣れてきて、楽しくやるようになったと、今では思う。

私を除き、この家の数少ない問題の一つが、この家の元々の娘、立華お嬢様の素行である。

別に彼女が特別傲慢だとか、引きこもりがちだとか、そういう訳ではない。まあ確かに、人見知りの割に見栄っ張りなところは明らかに否定できないのだけど、それ以上にどうにもそそかしい所があると



いうのは屋敷の者の共通認識だった。

良く言えばおつちよこちよい、悪く言えば要領が悪い。ある時はどういうことか来賓用のスリッパを履いたまま、通学の車に乗ろうとしたとか。ある時は食器を運ぶ使用人を手伝おうとして、廊下中に散らばった磁器の欠片を片付けなければならなかったとか。幸いにも屋敷中の助けのお陰で大事には至らずに済んでいるが、このままではいつか独り立ちする時が心配だ、せめてもう少し要領良くなつて欲しいと義母は絶えず口にしてている。

ちようど仕事にも幾分か慣れてきた通りだっただろうか、そのお嬢様の何代目かの世話役に、同年の私が任せられることになった。そして、特別な計らいにより、秋から彼女と同じ学校に通うことも決まっていた。勿論私も特段文句はなかった。

初めて立華様と顔を合わせる直前、義母からしきりにこう言われた。

「決して根は悪い子じゃないのよ、だから嫌いにならないで頂戴。できるならお友達になつてあげてね」

立華様は、応接間の格子窓の傍に一人、不安げな表情で佇んでいた。ふんわりとウェーブを描いた髪、愛くるしい子猫のような顔立ち。雰囲気も何もかも違っていて、本当に私の妹なのだろうか、と少し信じがたい気分だった。

「えっと、はじめまして、お嬢様。これからどうかよろしくお願いします」

そう言いながら、私は恭しく手を差し出す。立華様といえば、何か言おうとしているのだろうけど、緊張のせいか黙って震えるばかり

だ。

「こら立華、あの子がお挨拶しているんだから、ちゃんと返事なさい」

立ち会っていた義母に背中をぽんと叩かれて、ようやく彼女も口を開く。

「……ひ、久塚さんですっけ？ ま、まあ、聞いているだろうけど、私の使用人になったからには、し、しっかり働いてもらうことになるわよ。くれぐれも音をお上げにならないよう、気をつけるのね」

「立華！ なんですか、その口の利き方は！ ちゃんと言い直しなさい！」

険しい声に、立華様は、ひい、と小さな悲鳴を上げた。

「ご、ごめんなさいお母様！ ……ど、どうぞ、よろしく、久塚さん」

そう言つて、あからさまに不器用な笑顔を浮かべながらも、私の手を握るお嬢様。

「はい、誠心誠意務めます」

私もまた、少しばかりの緊張と共に、微かに汗じみた彼女の手を握り返した。

自身が私とは誕生日が四ヶ月遅れの、いわゆる腹違いの妹であることを、この子は未だ知らない。

この学校に来て以来、今のところどんな日の昼休みも例外なく、この食堂は多くの生徒の姿で賑わっている。いるけれども、クリスマスが迫っているからか、近頃は壁にデコレーションの類が施され、そ

のせいでいつもに増して一段と活気づいてきているように見えるのは気のせいだろうか。その辺り、総じて季節のイベントに疎い私にはよく分からない。

私と立華様とはいえば、そんな大多数の生徒と同じく、その食堂の一角で向かい合って、共に昼食をつついていた。

「しかし、もうすっかり寒くなりましたわね。今日は体育がなくて良かったと思いますわよ、こんな時に外なんて嫌ですし。ね、久塚さん？」

「そうですね」

「それにしても、このパーティーモールだけは、どうも地味だと思いませんか？ 飾りつけの発想がどうも貧困ですわ。この辺り、うちの宮島さんなら、もっと上手くやりますわよ。ああ、一度私の家にこのデコレーションをプロデュースさせてもらえないかしらね。久塚さんもそう思うでしょう？」

「そうかもですわね」

今日も口だけは達者な立華様。しかし、よく見るとその顔色は随分と悪い。加えて、先程からしきりに手をお腹の方にやっではさするような仕草をしている。朝から、いやここ数日ずっとこうだ。

「……あの、返事が素っ気なさすぎない？ せっかく私が話しているんだから、もうちよっと乗ってくれてもいいんじゃないかしら」

「申し訳ありません、立華様。ただ、ちよっと、お箸が進んでおられないのが気になりました」

慌てて立華様は視線を落とす。テーブルの上の唐揚げ丼は、まだその半分も片付いているようには見えなかった。

「……そ、そうね、分かってるわよ。でもそう急かさないでよ。別にまだ時間はたっぷりあるんだし」

そう言って立華様は、嫌々と丼を持ち上げる。口の端からぼろぼろ米粒を散らしつつかき込むけれども、テーブルに戻された器の中には、まだまだたっぷりと中身が残っていた。レディースサイズだし、決して大きくはないはずなのに。

「どうしました、立華様。何かお悩みでもあるんですか」

「別にそんなことないわよ」

「もしかして、先程の数学の授業のことをまだ引きずっていられるんですか？ でも、答えられなくて困っていた子の代わりに手を挙げたのは素直に素晴らしいですよ。肝心の立華様がどもってしまっでは意味がないですけどね。しかも教科書が中学生の時のものに何故か気づいておられませんでしたし。まあ、私がフォロワーしなきゃ、大惨事だったとは思いますが、そこまで気に病まなくても」

「違うわよ！ というか、せっかく忘れてたのに、また穿り返すのは止めて頂戴！」

「ああ、では一昨日の化学実習の件ですか？ もう気にしなくていいって言ったじゃないですか、あれは説明しない教師も悪いかと——」

「だから違うわ！ あなたが思い出させるから気にしたくないことも気にするわ！ 何それ、わざとやっているでしょう？」

「くすす、違いますよ」

「いや何笑っていらっしゃるの、絶対わざとでしょうが。あなた本当に私の使用人？」

色をなして怒る立華様の姿はいつ見ても面白いものだ。悪いこととは分かっているがらついついからかってしまう。

「失礼しました。……真面目な話、私、使用人ですので、立華様の様子をしっかりと見るよう、お母様にきつく言われておりまして。立華様が昼食をお残しになるのは今日が初めてではないでしょうか？」

「そういう時だけ立派なことを言う……」

「はつきり言いますねそろそろ便秘の方、何とかしないといけないのでは」

「そうはつきり言わないでよ！ もう、いざ言われると恥ずかしいんだから……どうしても、食欲が湧かないの」

立華様は顔を茹蟬みたいにながら話す。両眼に涙を溜めてふるふると震えている。

「もう一週間以上になりますが、光明は見えそうですかね」

「今朝の様子見てそう思うのかしら？」

「危うくする休みさせられるところでしたからね、私も」

「厭味ったらしく言うの止めてくれない？」

「流石に今回は長過ぎますよ。いつもなら五日もすれば自然と出てくるのに」

「自然……うん、まあね……」

そう、至極自然だ。例え一〇分、二〇分かけて何とか絞り出した結果だとしても、出てしまえば、立華様の中では健康そのものだ。そもそも出ないから困っている訳で。

「立華様の身を託されている身として、何もできないのは、私、とても不甲斐ないと思っていますのです。ですので今から二つ提案があるの

ですが」

「久塚さんにしては珍しく殊勝ね。分かったわ、今の苦しみから逃れられるのなら」

「一つ目。このまま帰ってお母様に今の立華様の体調のことをご報告します」

「ふぐっ」

赤から青へ、立華様の顔色が変わる。

「何を仰っているんですか久塚さん!？」

「仕方ないでしょう。立華様に散々懇願されて今まで黙ってあげていましたが、本来は私も看過してはいけませんのです。元々一週間は言わないという約束だったじゃないですか」

「でも、もしそうしたら、私がまた家でどんな大恥をかくことになるか分かっているの!? きつとお母様のこともだもの、お食事係のお給仕さんや自宅訪問のお医者さんにも言うでしょうし、そしたら皆に知られることになるのよ、家中の皆に、私のお通じのことが!」

「今更じやないですか。立華様の体が良くなることに比べたら、そんなことはどうでもいいですよ」

「他人事だと思って!」

「私は立華様のことを想って……」

「あー、お母様と同じこと言う! 嘘だあ、こういう時は絶対嘘だあ、この人でなし!」

そう言つて立華様は、テーブルに顔を突っ伏して泣き始めた。いや、実際は泣いてなどいないと思う。立華様がよくする、抗議のためのポーズ。そっちこそ嘘泣きだ、と私は言い返したい衝動をいつも抑

える。

ただ実際、今の立華様が相当堪えていることは確かだ。とはいえ、このままではどうにもならない。もし何もしなければ、最悪病院に担ぎこまれるかも分からない。そうなれば、私も怒られるだけでは済まない。

いずれにせよ、話し合いがこうなるのは昨日から予想していた。だからこそ、私は既に準備しているのだ。

「安心して下さい。提案は二つあると言ったでしょう、立華様」

「……何よそれ。バレたりしないの、そっちの方は」

顔を上げた彼女の顔は、明らかに疑心暗鬼といった表情。私は心の底でそっとほくそ笑んだ。

「ええ。これなら私と立華様以外、誰にも知られずに済みます」

\*\*\*\*\*

日も山の間に隠れ始め、空は次第に赤みを帯び始めました。グラウンドの方からは、運動部の者達が力の限り叫ぶ声が響いてきます。遠方の燃える稜線も、そんな彼らの内なる思いを語っているかのようです。

……なのに。

「早くして下さい、立華様」

「……いきなり目の前で脱げる訳ないでしょうが！」

「一人でできるなら一人でもいいんですよ。立華様ができるといいうの

なら」

「久塚さんって、本当に、生意気な、卑怯者よね！」

「そうかもですね、敢えて否定はしません」

私達は今、あまり人が来ないことで知られる、旧校舎二階の女子トイレの個室の中にいます。私はひび割れた和式便器を跨がるようにして立ち、久塚はその後ろで薄桃色のイチジク浣腸を持って、不気味な笑みをお浮かべになられていやがります。

……どうしてこうなったのかしら？

お母様に報告する代わりに、久塚が提示したもう一つの案。それは、今日の放課後、彼女の指示に従い、浣腸治療なるものを受けることでした。

……ええ、嫌でしたわよ。浣腸など九つの頃に別の使用人にされたのが最後ですけど、あれはもう思い出したくありません。あの時の、臀部を人前に晒す羞恥、冷たい液体が腸に流れ込む時の衝撃、腹の中で何かが暴れまわるような激痛、便器に座ったまま動けない屈辱、そして何故か分からない謎のかいか……ごぼごぼん！……とてもかく！ あんな体験は二度としたくないというのが本音です。でも仕方ないでしょう。だって――

『どうするかは立華様の自由ですよ。今日まで耐え忍んでこられたその苦痛を、私と二人だけの秘密にしてしまうか、それとも明日ご盛大にご家族の前で恥をかかれるかは、立華様の決断次第です』

——こんなこと言われて断れますか！

頼んでもないのに、毎朝トイレ前でお待ちになられる辺りから薄々疑問でしたが、果たして久塚は人の恥ずかしい気持ちなどを理解しているのでしょうか？ それとも考えたくありませんけど、世間一般でいうところのサディストなの、あなた？

「ともかく心の準備つてのが必要なのよ！ 久塚さん、もしあなたが友達に突然『お尻を出せ』なんて言われたらどうします？」

「決まってるじゃないですか、そんな変態とは絶交ですわ」

「どの口が仰るのかしら!? 私から見れば、あなたも既に立派な変態よ！ というか、あの、人並みの心があるなら、私がすぐに脱げない気持ちも分らないかしら？」

「痴漢と治療は違うものだと思いますが……。第一、そんなに私に見られるのが嫌なら保健室にでも行けばいいのに」

「あなた、知ってて言ってるじゃないか？ 他の生徒もいるというのに、そんな所に行ったらそこからどういう風に噂が広まるか分かりませんわ」

『立華お嬢様、重い便秘で保健室へ緊急来訪』なんて噂を立てば未代までの恥です。そもそも、そこから直接家族に連絡がいくのは間違いないのは久塚も分かっているでしょうに、本当にこのお方は……。

「まあいいでしょう。いずれにせよ、立華様もう断るつもりはないみたいですし。昨日遅くにわざわざ遠出して、恥を偲んでこれを買ってきた甲斐があるというものです」

そう仰りながら、久塚はわざとらしく手を伸ばし、浣腸を目の前に持ってきて、軽く揺すってみせます。本当に嫌な使用人です。かさかさ紙が擦れる音が本当に不愉快。

「さあ急ぎますよ。迎える車が来るまで後一時間です。治療や移動を考えても今からしないと間に合わないでしょう」

「急かすなど言っているでしょう……」

ああ嫌だわ。家族以外の人の前でお尻を晒すのなんて、二年前の修学旅行で温泉に行った時以来です。あの時のクラスメイトの好奇に満ちた視線ときたら、本当に嫌で嫌で堪らなかったと言うのに……。

……仕方ありません。もうここは覚悟を決めましょう。きつとこういうのを「背水の陣」と言うのね。ちょうど水場もあるし、逃げ場もないし、こういう時こそびったりの言葉だわ。

私は、いつもトイレするよりも、やや震える手つきで、スカートのホックを外しました。重石のような感覚が、ほんの少し和らいだ気がします。ちよつと視線をずらすだけで、お腹の線にウエストベルトが隠れて見えません。改めて、自分のお腹がどれほど張っているのか実感させられます……。

凹みながらも、いよいよ両手の親指を、腰とショーツの間に差し入れます。

「先に言っておきますが、スカートも一緒に脱いだ方がいいですよ。汚れますから」

血も涙もない久塚の言葉を聞き、私は泣きだしそうになるのを抑えて、スカートとショーツを掴み、一瞬の逡巡の後、勢い良く引き下ろしました。

\*\*\*\*\*

立華様のお尻は、意外な程に肉付き良く、一見するとシミ一つない、まさに白桃という形容が当てはまるものだった。膨らみの下の赤みが、そんな白い肌によく映えている。別に他人のものをそんなに見てきた訳でもないが、こんなに綺麗なお尻は、私を含めて見たことがない。同性の私ですら、(誓って、うん誓って)別にそんな趣味はないのに、思わず見惚れてしまいそうになる程だ。

一見すると、と言った。立華様のお尻に唯一つ欠点があるとすれば、お尻の裂け目の辺りに、本当によく見なければ分からない大きさではあるが、小さな白ニキビがあることだ。玉に瑕。確かに便秘がちの人はニキビが多いとは聞いているが、こんな所にも影響が及ぶものなのだろうか。見ている内に、これまでの立華様の苦勞を思い返し、無性に同情心が湧いてきた。思わず涙が出てしまいそうだ。

立華様といえば、恥ずかしさからか体をわなわなと震わせながらも、脱いだスカートとショーツを、丁寧に畳み、私の横の鞆の上に置いた。こういう手間を惜しまないのは、流石に名家のご令嬢らしいと思う。それが終わると、立華様はその場にしゃがみ込み、手でパイプを掴み、腰を上方に突き出すような格好をした。

「……さあ、脱いだわよ。は、早くして頂戴……」

立華様の上ずった声が個室の中に響く。

顔は見えない。見えないが、きつと、捨てられそうな子猫のように、目に涙を溜めて、凄まじい恥辱の波を、小さな歯を食いしばって耐えておられるに違いない。現れた表情をしているにそうだ、そうに違いない、うふふ。

私は心なしか口角が上がるのを抑えながら言った。

「準備はできたようですね。ちよつとヒヤツとするかもしれませんが、注意して下さい」

\*\*\*\*\*

ひいつ。

久塚の手が私の尻たぶを掴んだ途端、その性根と同じ位おぞましい感触が、氷柱のように私の頭を駆け巡ります。そのまま裂け目の辺りを押し広げようとしているのまで逐一伝わってきて、体中がぞくぞくする気分です。お尻をまさぐられるのは、何度経験しても良いものではないかもしれません。これが治療でなければ、きつと私は彼女を訴えるに違いないでしょう。

## 劣等種のペルソナ

早川オコゼ

姫川椿は苛立っていた。

五月の大型連休が明けた最初の日曜日。文化会館のホールで行われている舞台稽古の貴重な時間が、無意味に浪費されているからだ。

一年生は簡単な段取りすら掴めておらず、堂々と朝の集合に遅刻してきた二年生たちは、先ほどから台詞を間違えるたびに陰でへらへら笑っている。三年の部長でさえ、台本に書かれた文字を声に出しているだけで、椿の求める水準には程遠い。もう一人の最上級生に至っては、それ以前の問題だった。

椿にとって、高校生活最後の舞台となる演劇コンクール。その配役を決める部内オーディションが、来週に迫っていた。

不満を抱えながらも、演目『夏芙蓉』の主役・千鶴を演じる椿は圧倒的だった。言葉には感情が乗り、指先まで神経を通わせた所作からは心情が滲む。長く癖やかな黒髪をスポットライトが照らすと、舞台の上が非日常に彩られた。その中心に立つ椿は、自分の身体を千鶴に明け渡し、繊細な台詞の糸を紡いでゆく。だが、

『そうなんだ、ねえ、ちー……』

椿と向かい合う背の高い女子生徒は、そこまで口にして、沈黙。続く台詞は、舞子が千鶴に向かって感情を吐露する、作品を象徴する一言。だが、台本すら危うい方の三年生——山田優子は、野暮ったい眼鏡の奥でしばらく目を泳がせると「ごめん椿ちゃん、台詞飛んじった……」と俯いた。

優子が台詞を飛ばすのは、今日の午後だけで四度目だった。

「……もういい、一回止めましょう」

誰にも気付かれないほど小さく舌打ちする椿。彼女の声色は、つい今まで千鶴を演じていたとは思えないほど低く、鋭い。

「こんなじゃ稽古にならない。……どうしてみんな、台詞を入れてきてないの？ ホール稽古は何回もできないって分かってるよね。オーディションが来週の今日だって、知ってる？」

舞台上がしんと静まり返る。……誰も、何も答えない。

椿は切れ長な二重瞼の端を吊り上げ、部員たちの顔を舐めるように睨みつけた。身長こそ平均値だが、自信とプライドでピンと伸びた背筋と抜群のスタイルが、彼女の身体を実際よりもずっと大きく見せる。目鼻立ちのくっきりした派手な顔立ちも相まって、十代の少女とは思えないほどの存在感と迫力が、姫川椿にはあった。

目が覚めるほどの美人が放つ剣幕に晒され、四人の一年生は泣きそうな顔で直立不動。逆に、二年生たちは露骨に不満な顔を浮かべ、それを隠そうともしない。それが、椿の神経をいつそう逆撫でした。

「……一年は、初めてだから仕方ないにしても、二年と三年は何やってるの？ 配役固まらないうと、演出プランも衣装も用意できないでしょ。なんで貴重な時間を無駄にして平気なの!? せつかくオーディションと同じ会場なのに。本読みは家でしてきなさいよ」

語気を強める椿。しかし「だいたい二年は……」と不満をぶちまけんとした言葉が、途切れた。身体を強張らせ、一瞬、唇を小さく噛む。

部員たちの顔に微かな困惑が浮かぶ。何事もなかったように表情を取り繕った椿は、ステージ脇の時計にサッと目をやった。

「……もういい。じゃあ、二〇分休憩。その後は各班ごとに第四幕を頭から通すから、台詞危ない人は台本をちゃんと確認しておいて」

早口でそう言うのと、少し離れた場所で見守っていた部長の越智まどかに近づく。椿の額から、汗がたらりと流れた。

「まどか。あたしはホール職員の来週の仕事の打ち合わせしてくるから部長がさばらないように休憩中もちゃんと見てて」

どこか焦ったように小聲で捲し立てた椿は、まどかの返事も待たずに舞台袖へ歩き出した。

裏の通路を抜けて、ホールのエントランス右手の階段を上った先にある職員事務所。その入り口を速足で通過した椿は、会議室が並ぶ薄暗い廊下の突き当り——女子便所と朱書されたドアに瘦身を滑り込ませた。扉が閉まった途端、制服のスカートの隠された桃色のすばまりから、プチュプチュと水っぽい放屁。椿は堪らず腹を抱え、乱暴に靴を脱いでスリッパに履き替えると、四つ並んだ個室の一番奥に駆け込んだ。下着を膝まで強引に下ろし、冷たい便座に着座——

「ふうううっ……………」

プブツ……プリリリッ！ プリュプリュプリュプリュ！

形の良い尻の中心が醜く膨らむと、昼食後からずっと我慢していた軟便が、便器の中へ勢いよく注がれた。レースをあしらった白いショーツが汚損していないと胸を撫で下ろす暇もなく、大腸がギュルリと蠕動し、鋭利な腹痛と共にペースト状の大便が肛門から噴き出す。下品な破裂音を響かせながら、椿は祈るように腹を抱えた。

幼少の頃より胃腸が弱かった椿は、冷たいものや乳製品は当然、緊張や不安が重なると、必ず下痢に襲われる。高校入試の休み時間も、

市民劇団の本番前も、便器に向かって尻の穴を晒してきた。

それでも、自尊心の絵の具で便意の苦痛を塗りつぶし、腹痛を誰にも悟らせず、常に成功を収めてきた自負がある。友人にも、家族にすらも、椿はこの体質を伏せたままだった。

脇腹をさすり腕時計を確認すると、休憩終了まであと一〇分。

胆汁のアルカリ成分で腫れた肛門をペーパーで拭う。粘膜が酷く痛んだ。付着した黒緑色の泥状便からは、海苔が腐ったような悪臭——心の調子が悪いときの二オイだと、椿は思った。

「……わかってる」念入りに肛門を清めながら、呟く。

原因が来週に迫ったオーディションにあるのは明白だった。台詞は完璧に頭に入り、千鶴の心情は精密に作りこんだ。役を争う二年生の榎原（まはら）しずくも、筋は良いがまだ荒い。そも、台詞を間違えて笑うような奴に負ける気はしない。だが、それでも捨て去れない、今年こそは主役を掴むのだという気負い。椿の下痢は、二週間以上も続いていた。

「やっと落ち着いた。……早く戻らなきゃ」

渋り腹をさすりながら立ち上がり、ショーツを履きなおす。尻の割れ目に残るベタつきが不快で、自宅のウオッシュレットが恋しかった。

水を流し、怪しまれないうちに舞台へ戻ろうと、個室を出た。

「……えっ」

しかし、その足が止まる。誰も居ないと思い込んでいた便所の中に、人が居たのだ。目が合い、はっと固まる。が、椿はすぐに顔を取り繕うと、入り口の扉を背にして立つ眼鏡の女との距離を詰め、便所の奥まで続く動線を塞ぐようにして立った。

「……優子、なにやってるの？」



長い前髪で隠れた瞳をしばらく彷徨わせてから、山田優子は腹をさする。「その、舞台袖のトイレ、すつこく混んだから……」

「あー……混むよね」

視線を落とした先には、優子の長いスカートと太ましい服脛。かひもも 椿は何も言うなど心の中で祈るが、それは叶わなかった。

「……あれ、椿ちゃん、休憩入ってから舞台に居なかったけど、ずっとトイレ？ だ、大丈夫？ もしかして、お腹の具合とか——」

「そんなわけないでしょ」はっと顔を上げ、優子を睨む。「ホルルの職員と打ち合わせして、そのあと、おしっこしてただけ。事務所からだところちのトイレの方が近いの。変なこと言わないで」

圧倒され、俯いてぼそぼそと謝罪する優子。排泄音を聞かれてはいないようだと思堵した椿だったが、個室に残る臭いを嗅がれてしまえば、直前まで下痢をしていたと自白するも同然だと気が付いた。

「……優子、台詞の確認した？ このままだと今年も後輩に役盗られて、また裏方だよ？ 演劇コンクールは照明も音楽も生徒がやるから、裏方も大事だけども。でも、最後なんだし、もっと頑張ろうよ」

「う、うん。でもほら、しずくちゃんとか二年生なのに上手だし、しかたないかなあって……それに、わたし、裏方も好きだから……」

「大丈夫だって。今年はいけるよ」——だから下手糞なんでしょ？

内心と外見を切り離せてこそその役者。心にもない励ましの言葉で臭いが消えるまでの時間を稼ぎながら、椿は笑顔を浮かべた。

主体性も能力もなく、他人の背中に寄生する金魚の糞。あたしとは違ふ、劣等種——それが、椿の優子に対する偽らざる評価だった。

「つ、椿ちゃん、そろそろ、わたしも、トイレしたいかなって……」

申し訳なさそうに告げられ、椿は迷う。個室の大便臭が消えたのか、確証が持てなかった。仕方なく「優子……お腹痛いの？」と強引に話題を変える。優子は、居心地が悪そうに眼鏡を触った。

「……その、ペンピでお腹苦しくて。久しぶりに出そうになってきたから、音とか……臭い、が目立たないこっちのトイレに来たの」

「そう……休憩終わるまでには済ませてよ」

そして会話が途切れる。流石にもう引き延ばせないと観念した椿は、せめて奥の個室には入ってくれるな、と思いながら優子に道を譲る。

しかし、すれ違いざまに優子の発した言葉が、椿の逆鱗に触れた。「椿ちゃん……さつきは、たくさん間違えて、ごめんなさい。ペンピのせいで、集中できなくて……でも、治ったらわたし頑張るか——」

「え？ たかが便秘でしょ」椿は呆れ顔を隠そうともしない。「お腹下してるわけじゃないんだからさ、我慢できるよね？ そういう言い訳してないで、もっと頑張ろうよ」

腹痛と軟便を堪えながら午後の稽古に挑み、完璧に千鶴を演じきった椿にとつて、優子の不用意な一言がどうしても許せなかった。

そのまま手も洗わずに、椿は便所を後にした。

帰りの電車の中で、ボロボロになるまで読み込んだ『夏芙蓉』の台本を握りしめる。椿は溜息をつき、小さく唇を噛んだ。

酷い稽古だった。休憩が終わっても弛緩した空気は元に戻らず、一〇分遅れて便所から戻ってきた優子もミスばかり。顧問の江頭直美は

「日曜稽古だったので、明日はお休みです。皆さん帰りは気を付けてください」とだけ言って、さっさと帰宅した。

帰りがけ、一年生の早紀<sup>さき</sup>からタビオカミルクを飲みに行こうと誘われたが、渋々断った。勇気を出してくれた後輩を無下にするのは気が引けたが、台本を読み返したかったし、何より、今の腹具合で乳製品を飲めば、二時間は便器から離れられなくなる。

駅に着くと、停めておいた自転車に跨り、筑後川<sup>ちくごがわ</sup>を右手に県道走る。その先の高台にある住宅街をしばらく道なりに行ったところに、椿の自宅はある。長方形を基調とした、モダンな建物だった。

「つ、椿ちゃん……また明日、学校でね……」

自転車を下りたところでようやく、帰宅中ずつと無言で後ろをついてきていた山田優子が口を開いた。椿の反応を待たず、優子の背中が椿の家の向かいに建つ古めかしい二階建てに消えた。冷めた目でそれを見ていた椿が、はあと溜息を漏らす。家が近所というだけで優子と幼馴染扱いされるのが、昔から苦痛だった。

夕食後に再び催した下痢を絞り出し、入浴と日課の体幹トレーニングを終えた椿は、自室のベッドに寝転んで台本を開くと、台詞の確認を始めた。『夏芙蓉』——小学校の行事で観に行った演劇コンクールで、将来入学する大河高校<sup>おおかわこう</sup>が上演していた思い出の演目。終演と同時に感動で号泣し、演劇を始めるきっかけになった、大切なお話。

いつの間にか椿の意識は、まどろみの中へと落ちていった……。

——夢の中で椿は、唇を囁んで笑う自分自身を俯瞰していた。二年前、三年生と部内オーディションで主役を争い負けた日だった。小学生のときから所属する市民劇団の経験で、勝ち目はあると踏んでいたが、一年で主役は早かった——と、自分を誤魔化すための笑顔だ。

景色が変わる。薄暗い駐車場の隅で、声を殺して泣いている自分がいた。圧倒的な実力を見せつけたにも拘わらず「三年生は最後だから」の一言で、稽古を休まないだけが取り柄の先輩に主役を奪われた、去年のオーディション後のことだ。

蹲<sup>うすくま</sup>って悔し涙を流す自分自身を見るのは奇妙な感覚だった。しかし椿は、それが不思議と嫌ではなかった。新鮮な屈辱を思い出し、背筋が今一度伸びるのは、悪い事ばかりではないと思えたからだ。

——目覚めて最初の違和感は、部屋が薄暗い事だった。記憶は曖昧だが、昨晚照明を落とした覚えがない。椿は首をひねった。

「ママが……消してくれたのかな……え？」

椿は困惑した。プールの中で目を開けたように、視界が滲んでいたのだ。ベッドを出ようと足を延ばすと、布団と同じ高さ<sup>たかさ</sup>に床があった。

感触は畳のそれに間違いない。椿の部屋はフローリングで、そもそも姫川家には和室が存在しないはずだ。

「……えっ？ え？」

ゆっくり上体を起こすと、違和感が数え切れなくなった。重たい身体。ぼやける視界。蒸れた腋<sup>わき</sup>。汗ばんだ体臭。よれたTシャツ。太くたるんだ脚。爪の短い指。腹にずっしりと感じる、不快感。

「痛っ……！」前髪が目に入った。

椿は手鏡を取ろうと、タンスの前まで移動した——つもりだった。

「えっ……いや、いやあああああああ！」

悲鳴を上げて尻もちをつく。向かい合う大きな鏡の中でも、長身の方が尻もちをついた。椿は恐々と自分の顔に触れ、息を飲んだ。

——椿の外見が、山田優子になっていた。

慌てて立ち上がり、身体をまさぐる。腹の贅肉も、汗臭い巨乳も、太い二の腕も、低い鼻も荒れた肌も——山田優子そのものだった。

「そんな……嘘、こんな事って……。いや、いやあ——ッ！」

いくら脳が理解を拒んでも、目の前には現実があつた。洋服や教科書の散らかった見知らぬ和室で、椿は茫然と立ち尽くす。ふと、足元に転がる野暮ったい眼鏡を見つけ、震える手で拾い、掛ける。途端に視界がクリアになり、涙があふれ出した。

眩暈がした。その場にへたり込みそうになるのを堪え、窓枠に手を突いて身体を支える。この部屋は二階らしく、眼下には見慣れた住宅街の路地が見える。そして——その人物が、そこに、いた。

椿は慌てて部屋を飛び出し、古い板張りの階段を駆け落ちるように駆け降った。「あら、今朝は珍しく早起きなのね」どこか聞き覚えのある中年女性の声を無視して、磨りガラスの張られた玄関の引き戸に体当たりするようにして、裸足のまま外に出た。

「はあっ……はあっ……そんな」

鈍重な肉体を引きずり、椿は目の前に立つ少女——姫川椿に歩み寄った。大河高校の制服に引き締まった体躯を包み、長い黒髪を揺らしながら、不安そうに眉を寄せる、自分自身の見慣れた顔。

これは今朝の妙な夢の続きだと、そう信じたかった。だが、自分こんな情けない表情をしないことは椿が一番良く知っていたし、膝が隠れるほどスカート丈を長くしたこともなかった。

「まさか……優子、なの……？」祈るように、尋ねた。

無言の肯首。信じがたいことに、椿の身体がユウコになった代わり

に、優子がツバキの中にいた。

「あ、朝、起きたら……わたし、椿ちゃんに……なってる」

しばらくして、優子が言った。だが、声はツバキのものだ。

自分が話しかけてくる不快感で、椿の全身に鳥肌が立った。

「なってるって……何よそれ」「……どうしよう」「わ、分かんないよ。あたしだって」「でも、でも……」「泣かないでよ」「椿ちゃん……どうしよう」「どうしようだったって、そんなの……」「どうして、こんなことに」「あたしが聞きたいよ」「うう……うええ」「泣かないでよ!!」

ユウコの声帯から出た怒声は野太く、発した椿が一番驚いた。優子はツバキの顔ををしわくちゃんにし、鼻を鳴らして泣き始めた。再び訪れた沈黙。椿は唇を噛み、普段よりも高い目線から足元を睨む。裸足に刺さる道路の小石が、今更になって痛かった。

新聞配達のバイクが二人の後ろを通り過ぎ、エンジン音が聞こえなくなる頃、まるで深いため息をつくように、優子が喉を震わせた。

「わたしたち……ずっと、このまま、なのかなあ……」  
「そんなわけない!」

椿が反射的にそう言うのと、今まで隠れていた太陽が顔を出した。五月の朝日が雲間から差し込んできて、椿の目の前で泣いているツバキの涙が光る——椿は、自然と拳を握っていた。

夢であって欲しいと願った。だが、これが夢ならば、この馬鹿げた状況がああ屈辱的な経験の続きになるのではないか？ 必死に自分を納得させた一年生の椿。大粒の悔し涙を流した二年生の椿。そして、山田優子の入れ物になり果てた三年生のツバキ。

このままでは、これが、今年の結末になってしまふ気がした。

「……それは、嫌だ」

椿は目の前で震えるツバキを――優子を、力強く見据える。今年こそは掴むと誓ったのだ。必ず元に戻れると、椿は信じている。ならば、戻る意味を失うわけにはいかなかった。

「協力して、優子」

新緑の春風が、対照的な二人の少女の髪を揺らす。

「優子が、あたしの代わりにオーディションを受けて」

\* \* \*

午前の授業が終わり昼休みになると、途端に教室が賑やかになった。椿と優子は目配せして、目立たないよう別々に席を立つ。教室がある本館を出て、人があまり来ない別館の階段下、古い机や椅子が押し込められているスペースで、二人は顔を突き合わせた。

無事に半日を切り抜けたことに安堵するも、問題は山積みだった。無口なユウコを演じるのは椿には造作もなかったが、逆はそうもいかない。苦肉の策が「風邪で声が出にくい」という嘘だった。

「夜は鉄橋公園で稽古ね。今日が部活休みでよかった……。最低でも明日までにオーディション箇所は通せるようにならないと」

「でも……わたし、自信ない……」

目を伏せる優子。だが、彼女に頑張ってもらわねば、仮に元の身体に戻っても、椿が主役を取りこぼした現実だけが残る。

「大丈夫だから」椿は語気を強めた。

二人はそれから、後回しにしていた細かなすり合わせを行った。制

服の着こなしや友人関係、両親の呼び方に食べ物の好み。

「あたし牛乳嫌いだから、家にあっても飲まないで」椿が念を押す。

「でも、わたし……朝は、牛乳とパンが、いいなあ」

「わがまま言わないで」声に苛立ちが混じる。「普段と違う事したら、その、ママが怪しむでしょ」椿は目をそらし、足元の埃を蹴った。

飲んだら下痢するからダメ、とはどうしても言えなかった。

打ち合わせのあと、椿は優子だけ先に教室へ戻るよう促した。

「あたしたちが一緒に居たら変でしょ」

不安そうに立ち去る優子の背中を見届け、耳を澄ませる。校庭の喧騒が僅かに届くだけで、別館に人の気配はない。椿は、苦しげに息を吐き、肉厚なユウコの尻を両手で掴んで、ぐっと押し開いた。

ブブウウ！ ブビビイイイイ！

大型車のエンジンを思わせる排気ガスの爆音。遅れてきた猛烈な悪臭。椿は涙目で咳き込んだ。初めて至近距離で嗅ぐ他人の放屁は、ゴミ捨て場の臭いがした。大腸に詰まった硬い感触で背筋が凍る。

「……最悪。お腹、気持ち悪い……。吐きそう」

下腹に感じる圧迫感と鈍痛。「ペンピでお腹苦しくて」と告げた優子の顔が浮かび、椿は眉間に皺を刻む。腹の中で存在を主張するゴロツとした大便の肌触りが、制服の上からでも感じ取れた。

翌、火曜日。朝食を終えた椿は、山田家の便所に籠っていた。慣れない和式便器に苦戦し、息を荒くした表情には、苦痛の色が濃い。

苦手なウンコ座りが、柔軟性を欠くユウコの足首のせいで不安定さを増し、金隠しの奥のパイプを握りしめて何とか姿勢を保った。足が

しびれてバランスを崩した拍子に、全身に鋭い痛みが走る。昨晚、いつもの癖で行った体幹トレーニングで、肉体が悲鳴を上げていた。

「なんで……あれくらいで、筋肉痛になる、のよ」

はち切れそうな太ももとたるんだ腹。肥満と言うほどでもないが、体型に人一倍気を遣ってきた椿には、それが許容できない。

「ふんっ……！ ふうう、くうっ……」

垂れた尻の中心で、色素の沈着した肛門が開閉し、腐敗した腸内ガスが漏れる。鼻の粘膜にこびり付く臭いだ。

「野菜嫌いで、運動不足。だから……便秘になんかなるのよ」

食生活の見直しと適度な運動で、腸内環境を改善する。そう意気込んだ拍子に、ぶうっと間抜けな屁が鳴った。

ユウコを演じるのは容易い。俯いて前髪で視線を隠し、黙っていればよいからだ。だが、思いもよらぬ苦勞があった。

「では姫川さん。四つの英文の中で、間違っているのはどれ？」

五時間目の英語。教師に当てられたツバキは、一瞬呆けたあと、慌てて立ち上がった。優子が油断していたのは明らかだった。

黒板の英文を見て、椿は瞬時に三つ目が誤り——関係代名詞が制限用法になっていない、と見抜いた。しかし、肝心のツバキは、

「……す、すみません。分かりません」と言葉濁す。

「あら、姫川さんにしては珍しい。じゃあ……隣の、山田さんは？」

簡単な文法すら解さない優子を睨み、椿はゆっくり立ち上がる。誤りは三つ目だと、答えない。しかし、今の椿は、ユウコなのだ。

「……分かり……ません」

爪が食い込むまで拳を握り、初めから期待していなかった、と言わ

んばかりの教師の視線に耐えた。

放課後も、椿は苦虫を噛み潰す気分、台詞を棒読むツバキを見つめていた。昨晚の特訓の成果が、何一つ出ていなかった。

演目『夏芙蓉』は、卒業式が終わった深夜の教室に忍び込んだ女子高生四人による会話劇だ。オーディションは一人ではなくグループ単位のため、日曜までは各班での稽古となる。よって幸い、台詞を囁んで狼狽えるツバキを目にしたのは、椿の他には、後輩二名に留まった。

優子の演技は集中力に欠いていて、酷く冗長だ。昨晚はできた事さえ頭から抜け落ちている。一方椿も、心をどす黒いもので満たしながら、ユウコとしてきちんと台詞を間違え、感情が乗らぬよう演技を抑制する。無様な自分を鑑賞し、出来損ないを演じる惨めさ。

劣等種の仮面を被る屈辱が、椿の自尊心を掻き立てた。

「椿先輩、やっぱりまだ風邪が……？」

「なんだ。センパイも、台詞間違えたりするんすね」

タピオカに誘ってくれた一年の早紀がツバキを気遣い、二年の梓は、ツバキの失態を嘲笑う。優子はただ、言葉を詰まらすばかり。

椿は人生で初めて、早く稽古が終われと思った。

鉄橋公園はその名の通り、筑後川に架かる昇開橋の袂に隣接している。椿と優子の家からは、自転車で一五分ほどの距離だ。重厚な朱色の橋桁が目に入るベンチに座り、身体が入れ替わってから毎晩、二人は公園の街灯を頼りにして稽古に励んできた。

優子は覚えが悪く、理解力も低い。稽古には根気を要した。元に戻った自分のために千鶴役を勝ち取らせる——椿は苛立ちを隠し、丁寧に

優しい口調で優子に接するよう努めた。だが、その鬱憤が澱<sup>おち</sup>となって心の底に溜まり、モチベーションは目を追うごとに低下していった。

それに呼応するかのように、水曜日は朝から雨だった。

昼休み、別館の一階女子便所。半開きの窓から、雨粒の心地よい音色が漏れ聞こえる。そこに、獣の鳴き声を思わせる、苦痛な響きが差し込まれた。

「ううっ……ふんっ！　ぐうううっ——ッ！」

奥の個室。くすんだ洋式便器に腰掛けた椿は、鼻の穴を膨らませて両手を握り、鬼気迫る形相を浮かべていた。

太ももから尻の方でつぶりと広がるユウコの下半身。光沢を帯びるほど強引に拡張された肛門の粘膜、その奥に続く桃色の洞窟から、黒茶色の糞塊が顔を覗かせた。過剰に脱水された大便の粒が石垣のように圧着している。全身に力を込めると、大便は僅かに出口へ向かって進み、やがてすぐに、巢穴の奥へと戻っていった。

「——はあっ、はあっ、はあっ……！」

酸素を求めて顔を上げると、昼休み終了の予鈴が鳴った。

「雨粒の音を聞きながら、椿は便座の上で項垂れる。この身体になつて既に三日、一度も大便が出ていない。それに加え、入れ替わった時点で、体内には優子が生成した大便がどっさり堆積していた。」

ねえねえ、何百グラムのうんこが溜まってると思う？　——常に付きまとう胸のむかつきと頭痛が、椿にそう問いかけてくる。

ゴムの伸びたユウコの下着を履き、立ち上がる。便器の底に沈んでいたのは、真っ白なペーパーの切れ端と、歪な形をしたチョコボールがたった三粒。少なすぎる戦果を前に、椿は奥歯を噛んだ。

放課後になると、雨は勢いを増した。気乗りしない鉄橋公園での稽古も、今日は中止にしようか——そう思った椿だったが、部活でツバキの拙い演技を目の当たりにし、考えを改めざるを得なかった。

帰宅した椿はしぶしぶ食卓へ。献立は豚の生姜焼きに大根の煮物、海藻サラダ。椿は優子の両親と話を合わせながら野菜を頬張った。膨れた腹をさすって食休みしていると、玄関のチャイムが鳴った。

「あらあ、椿ちゃん！　ウチに遊びに来るのって小学校ぶり？　もう晩御飯は食べたの？　あらそう。ゆっくりしていいってねえ」

今晚の稽古場に決まった山田家を訪れた優子は、制服のままで。自分の母親から熱烈な歓迎を受けて戸惑っている。本来の住人を招き入れる違和感を押し殺し、よれたTシャツ姿の椿は階段を上った。

「わ……すごい。わたしの部屋、きれいになってる」

あちこち視線をやりながら、優子は声を弾ませた。

「優子が散らかしすぎなのよ」椿が吐き捨てる。

布団の上にあつた台本を乱暴に掴み、「じゃ、やるよ」と椿はぶつきらばうに言った。どかんと畳に腰を下ろし、ため息。「何してるの優子、早く」自室を物珍しげに見ていた優子を感じて睨んだ。Tシャツの奥で大腸がグルグル……と小さくうねる。夕食を食べすぎていた。

あぐらをかいてツバキの演技を見る椿は時折、舌打ちを漏らし、嘆息をこぼす。昨日までと違う態度に、優子は戸惑った。

「違う！　そうじゃないって、何度も何度も言ってるよね」

「あっ……えっと、ごめんなさい」

「何がダメか、分かってて謝ってるの？」

「えっ、あ、うん、いや、えっと……ごめん、なさい……」

「ごわごわした髪を乱暴に掻き、『何でこんな簡単なこと』と椿は独り言ちた。千鶴は、舞子や他の二人とは違うでしょ？ 千鶴だけが真実に気づいている。台詞を表面的になぞつてもダメなの」

ふっと、椿が息を吐く。刺々しい空気が、それだけで一変した。

『夏芙蓉って、夜見るのがきれいなんだって』

椿が発したのは千鶴の台詞。優子は慌てて、舞子の言葉を続けた。

『……そうなんだ』

『うん。昼間はね、真っ白でしょ？ でも夜に見ると、光線の影響で青っぽく見えるんだって——』

何度も聞いた台詞。しかし優子は、自ら千鶴役を演じたことでようやく、椿が如何に高い次元で演技をしていたのかに気づいた。

シーンを終えた椿は、スマホをいじり——入れ替わっても元の自分の端末をお互いに使っている——一枚の写真を優子に見せた。

「それが実在する芙蓉の花。実は『夏芙蓉』自体は架空の品種なの。けど、だからこそ、千鶴の不安定な心情が象徴されるんだと思う」

胡坐をかいた椿の隣に正座し、優子は画面を覗く。五枚の花弁がバラバラ状に重なった、手のひら大の立派な花だった。

「仕草や台詞の語尾まで神経を通わせないとダメなのよ」

身振りを交えて説明しようと、椿は腰を上げようとした。しかし運悪く、膝に手を突いたその時、大腸でゴボボッ……とガスが動く。まづい、と思う間もなく、それは畳から少し浮いた肛門に殺到した。

ブッ！ プリプリイイイッ！！

尻の割れ目から、盛大に爆音が放たれた。椿は動けない。顔面が、

燃えるように熱い。間もなく、二人の鼻腔に暴力的な臭いが届く。

沈黙を破ったのは、優子だった。

「椿ちゃん……ウンチ、出ないんだよね？」

「そ、そんなこと……」ない、と言いかけて口を嚙む。部屋に充満する臭気が全てを物語っている。椿は首まで真っ赤になった。

「椿ちゃん、ずっとイライラしてる。……分かるの、わたしの身体だもん。あのね、最後にわたしがウンチしたの、先週の月曜日なの」

椿は衝撃を受けた。今日が水曜日だから、ユウコの大腸には約九日分の大便が格納されている計算になる。吐き気が込み上げた。

「あ、あのね、椿ちゃん」優子がおずおずと切り出す。視線は部屋の隅にある学習机に向けられていた。「どうしても出なかったら、一番下の引き出しに、ベンピのお薬があるの」

椿は、はっと顔を上げた。激情がその表情を覆いつくす。

「説明文には一回三錠って書いてあるけど、溜まってるときはそれじゃ効かないから、四錠、寝る前に飲んで。そしたら朝には——」

「うるさい!! あたしには、そんなものが必要ない!!」

反射的に怒鳴っていた。羞恥で上気した目には涙が溜まっている。

「……今日はもう、帰って」

消え入りそうな声で、椿はそう呟いた。

だらしのない優子ならいざ知らず、自分がきちんと管理すれば、便秘なんて大した事ない——当初、椿は樂觀的だった。筋肉痛になってもトレーニングを続けた。野菜嫌いな娘の変化に驚く優子の母の前で、山盛りのサラダを平らげた。すぐ出るだろうと思っていた。

それが二日経ち、三日経ち、食物繊維で膨れた新しい大便が内臓を圧迫し、常に吐き気がする。食欲不振。頭痛に肌荒れ。ドブのような口臭。気が立って、些細なことにも苛立った。努力が否定された気がして、下剤を勧める優子についての激高したほどの。

「うううっ！ ふんうううっ……！ ぐううううううー！」

プピッ！ プススウウウウ……！

土曜日。

十二日分の大便を貯めた椿は、山田家の便所で泣いていた。

倦怠感で目覚め、鉄球が入ったように重い腹を抱えて便所に向かい、ガスしか出ない肛門を開くと、自然と涙がこぼれた。

「出て……出てよ、お願い。お願いだからあ……ふんっ！」

情けなさに瞳を濡らし、全力で息む椿。その時だった。

「痛っ……！」肛門にピリッとした痛みが走る。椿は目を見開き、恐る恐るペーパーで尻を拭く。白い紙にうつすらと血が滲んでいた。

一瞬で涙の引いた椿は、逃げるように便所を出た。肛門の裂傷はごくごく小さな、排便には影響のない些細なもの。しかし椿には、尻から血が出たという事実そのものが耐えられなかった。

それでも、牛のようなユウコの乳房をブラジャーにしまい込むと、制服に袖を通して部活に出かけた。水曜日の自主稽古を経て、優子の演技が見違えるように良くなり、希望が見えてきていた。その一点で椿は、便秘で荒んだ心をつなぎとめていた。

だから、後輩が演じる魅力的な千鶴を見て、均衡が崩れた。土曜の稽古は明日に備え、グループで練習したものを他の部員の前に見せ合うことになっていた。観客の視線に慣れるためだ。

ここで、千鶴役を争う二年の楨原しずくが、椿たちとは違う解釈の演技プランをぶつけてきた。先週の舞台稽古では荒かった部分も仕上がっている。椿が優子に仕込んだものとは、別種の良さがあった。

椿は焦った。好みの問題もあり、審査がどう転ぶか分からない。

やがて椿たちの番が回ってきた。優子の演技も悪くないが……不安が椿の頭をぐるぐる回ると回る。腹がゴロゴロと鳴った。うっとおしい——椿は大便で張った腸腹の痛みを思考の外へと追い出し、次に言うべき優子の台詞を口にしようとして、

『そうなんだ、ねえ、ちー……』

その先が出てこなかった。

沈黙。心配そうな優子の視線。「あ……」後輩部員の呆れ眼。「えっ」と……その「滴る汗。心臓の鼓動。——椿は、頭が真っ白になった。

夕方。沈む夕日を受けて、鉄橋公園のベンチに座る華奢な少女と大柄な少女の影が伸びる。視線の先では、昇開橋の鉄骨が西日を背に黒々と浮かんでいた。悠然と流れる筑後川に架かるその武骨な佇まいは、巨大な生物の背骨を思わせる存在感があった。

「明日は朝九時集合だよ。起きれるかなあ……あつ、大丈夫、ちゃんとするから。ほんとの椿ちゃんなら、寝坊なんかしないもんね」

顔を伺うように取り繕う優子。一方の椿は、足元を歩く一匹の蟻をぼんやり眺め、不安を押し殺すように、唇を噛んでいる。

一週間続いた鉄橋公園での稽古も、今日で終わり。

優子は付箋だらけになった『夏芙蓉』の台本を撫でた。

「椿ちゃん、いっぱい練習に付き合わせちゃって、ごめんね。わたし



バカだから、台詞覚えるのも遅いし、演技も下手だし……」

はにかむように笑う優子。椿はさりげなく腹をさすり、感情を押し殺すように深く息を吐いた。瞳には、自制心が揺れている。

「わたし、明日は頑張るから。椿ちゃんみたいにはできないけど、でも、教えてくれたように、やるから」

椿の返事はない。

あるいは、ここで解散していれば、均衡を欠いた椿の精神が破裂することはなかったかも知れない。

しかし優子がまたも、余計な一言を口走ってしまふ。

「ごめん椿ちゃん。わたしのフリとかするの、嫌だったよね？ 今日だって、わざと皆の前で台詞を間違えたり……」

その刹那、椿の目が激情に染まる。わざとではなかった。臍腑で蠢く大便に氣を取られ、椿は人生で初めて台詞を飛ばしたのだ。羞恥と屈辱が口いっぱいに広がる。そして——自制心の糸が、切れた。

「ふざけないでよ……」

「え……？」

「ふざけないでよ！ 何？ 他人の心配？ どうしてそんなに余裕なわけ。教えたことの半分もできてなくせに。榎原の演技観てなかったの？ もっと危機感持ちなさいよ！」

「あ……椿ちゃん、わ、わたしは」

「練習に付き合わせて？ アンタが下手糞だからに決まってるでしょ。あたしみたいにできない？ 当然でしょ。あたしと優子じゃ、今までの努力が、才能が、全然違うの。優子のフリ？ 嫌に決まってるでしょ！ アンタみたいな劣等種の真似なんか、こんなバカげた状況で

もない限り、死んでもやるはずないじゃない！」

もはや、椿自身にも制御が効かなかった。

唾を飛ばし、自分の肉体を奪った優子に、獣のように吠える。

「余計な感傷に浸ってないで稽古してよ！ ちゃんと千鶴を演じてよ！ 明日まで時間あるでしょ!? もっと台本読み込んでよ!!」

椿が直面した未曾有の糞詰まりは、彼女の情緒を破壊していた。

自転車で走り去る優子の背中が見えなくなり、西日で伸びた影がベンチに置いたカバンに届く頃、椿は我に返った。

そのとき類に流れたのは、一筋の罪悪感だった。

そして、運命の日曜日が訪れる。

朝の大河中央駅は閑散としていた。

時刻は八時二〇分。電車を降りた椿の背中は、改札の手前にある女子便所の中へと吸い込まれた。清掃直後の濡れた床を蹴り、個室に入るや否や、スカート越しに尻を左右に押し開く。ぐつと腹圧をかけた。

ブウウ！ ブビビビビイイ！ ブボボボツ！

尻を便器に突き出して、豪快に放屁。たつぷり八秒間、噴出する激臭で臀部の肉を震わせる。ほうつと、安堵のため息が漏れた。

肛門の裂傷を恐れ、家の便所で息んでこなかった。そのせいで、電車に乗った途端に猛烈な屁意に襲われ、約四〇分間、肛門を絞り上げて悶える羽目になった。車内にはちろちろ他の乗客の姿もあり、宿便の隙間で熟成したガスを開放することは、許されなかった。

「……はあ」

ブラウスの上から腹をさする。ガスを抜いてなお、強い張りが残っていた。指の腹で押すと、岩のような大便が押し返してくる。

椿は、ここで排泄を試みるべきか逡巡し、かぶりを振って着衣のまま便座に腰掛けた。肩を落とす、床に敷かれた鼠色のタイルをローファーの踵で擦る。下腹をさすっていた手で前髪を整える。ぼんやりと彷徨う瞳には、憂鬱な陰りが浮かんでいた。

今日、すべてが決まる。元の身体に戻る方法探しを先送りしてまで取り組んできた悲願。主役が獲得できなければ、肉体を取り戻す意味もない——それほど椿は入れ込んでいた。故に、大一番を他人に任せる不安と緊張、何より、頼みの綱の重要人物に言ってはならない言葉をつけた昨日の自分を思い出すにつけ、暗澹たる気分になった。

「……あ、いけない。時間」

ふと我に返り、腕時計を確認すると、八時四十九分。便器に座ってあれこれ悩むうちに、半刻が経過していた。遅刻しては示しが付かない。椿は立ち上がって、一応水を流し、身なりを整えて外に出た。

「あ……！」

「あ……」

そこで、電車から降りてきた優子と鉢合わせたのだった。

不意を突かれてしまい、二人はしばらく見つめ合って足を止めた。

椿は何か言おうと唇を震わすも、言葉が続かなかった。

向かいのホームに入ってきた電車のブレーキ音が響く。はっとした優子が、視線を斜めに滑らせた。その先にあった駅の時計は、八時五〇分を示している。集合時刻まであまり余裕がない。

椿と優子は無言のまま、最近導入された自動改札に切符を通し、並

んで歩き出した。文化会館へ続く道路の脇には、ツツジの樹が並んでいる。枝は腰の高さで綺麗に剪定され、赤紫の花をつけていた。

「朝ね……実はちよつと寝坊したの。昨日しないって言ったのにね」  
進行方向に視線を向けたまま、優子が言った。

「台本読んでたらつい夜更かししちゃって。……ごめんね」

「……まあ、間に合ったなら、別に」椿はぼつりと言った。

「うん。でも、電車の時間がギリギリで、椿ちゃんのお母さんが用意してくれてたお味噌汁と卵焼き、食べ損ねちゃった」

「朝ごはん抜きつてこと？ ……その、大丈夫なの？」

「あ、うん」優子の表情が僅かに和らぐ。「朝ご飯はコンビニで買って、電車で食べたから平気だよ」優子はどこか嬉しそうだ。

「なら、いいけど」

それっきり会話が途切れる。昨日は酷いこと言つてごめん——たつた一言が言えないまま、椿は文化会館にたどり着いてしまった。

オーディションでは、千鶴、舞子、サエ、タマイを希望する四名からなるグループで、約二〇分ほどのシーンを演じる。これを三組ぶん繰り返し、各役ごとに最もふさわしい人物を決定する。

審査員は三名。顧問の江頭直美に、名ばかりの副顧問・佐伯花子。

そして、椿が所属している市民劇団で演出を務めている黒川和夫という初老の男性だ。黒川は、厳正な審査を実現すべく、今年初めて招聘された。これを強く推進したのは、他ならぬ椿だった。

発声練習と体操を済ませた部員たちは、部長から黒川氏の紹介を受け、初めて出会う外部講師の存在に表情を引き締めた。

それが終わると、各グループ代表者によるくじ引きによって上演順が決められる——椿たちの出番は三番目。トリだった。

椿班はステージ上手側の客席に、バラバラと腰を下ろす。二番目に出番となる横原しずくを筆頭とする集団が反対の下手側に陣取り、ステージ正面の座席には審査員の三名が並んで腰を下ろした。

第一組の演技は緊張からか、終始危なっかしかった。千鶴を演じた二年生もから回っており、椿はほんと胸を撫で下ろす。

次に、問題の二組目。横原しずくの演じる千鶴は、椿にすれば明るすぎるのだが、それでもうまきはまっている。——と、舞子を演じていた部長の越智が台詞を一行飛ばした。一瞬硬直した横原は慌てて台詞を言おうとして、囁んでしまった。ペースを崩されたのか、昨日の稽古で見せた良さをさせぬまま、横原らは演技を終えた。

これがあるから気を抜けない。椿は気合を入れ直した。

三組目のグループが呼ばれ、椿たちは舞台袖へと移動した。薄暗い緞帳の奥で待機していると、顔を曇らせた優子が近づいてきた。

「つ、椿ちゃん……」

「大丈夫だって」椿は優子を励ますように肩を叩く。「稽古の通りにやるだけだから。ほら、今はツバキなんだから、しっかりね」

何か言いたげな優子を残し、椿は先に舞台へと足を踏み出した。

不安は杞憂に終わった。緊張しているように見えた優子は、演技が始まると吹っ切れたのか、椿も驚くほどの集中を発揮したのだ。

実際には稽古よりも固い部分があったが、その目には鬼気迫るものがあり、千鶴の抱える不安や葛藤がよく表現できていた。

——いける。そう確信した椿は、稽古との違いで下級生二名が戸惑

わないよう、さりげなくフォローを入れ、演技のギアを上げた。

『夏芙蓉って、夜見るのがきれいなんだって』

終盤。優子が情感たつぷりに言う。ここからが一番の盛り上がりだ。椿は満を持して柵を外し、手加減なく気持ちを言葉に乗せた。

『……そうなんだ』

『うん。昼間はね、真っ白でしょ？ でも夜に見ると——』

台詞の途中で、優子の動きが止まった。椿の背筋に、ぶわっと悪寒が広がる。優子が台詞を飛ばした——椿はフォローを入れようと、優子に近づく。そうしてようやく、違和感が気が付いた。

目を見開いて口を開く優子の息は荒く、身体は小刻みに震えている。額には尋常でない量の汗をかいていた。

「……あ」シャーペン買い忘れた、と続きそんなほどに何の感情もなく、優子の口からぼそりと声がこぼれる。それが合図だった。

ブボポッ!! ブチュブチュ!! ブリブリブリブリブリ!

優子のスカートの中から、粘っこい破裂音が響いた。ブクブクと下品に弾ける気泡が、沈黙していたホール全体を包み込む。

客席に座る審査員も生徒も、舞台上の椿さえ、何が起ったのか分からずに、ぽかんと口を開けた。ひゅーひゅーと息を吐く優子の太ももを、黄土色の筋がゆっくりと伝い、ガタガタと震える膝を通過して、真っ白だったソックスを汚した。

「つ、つばつ、椿ちゃん……あつ」

ブジュブジュビビュルジュオ!! ——ベチャベチャ!!

優子の最後の言葉が紡がれるより先に、限界は訪れた。くぐもった音がホールに反響した直後、液状便が下着から溢れる。

「つ、椿先輩が、漏らしました！」

動転した一年生がそう叫んだのを合図に、一斉に悲鳴が上がった。

慌てて立ち上がる教師。鼻を覆う一年生。二年生からの嘲笑。啞然とする越智。非難の声。誰かの咳。口を押えて退出する下級生。汚物の中心でへたり込む優子。椿はまるで映画でも観るように、衆人環視の中で下痢便を漏らすツバキの姿を見つめていた。

入れ替わり生活において、習慣の変化は大きなストレスだった。例えば山田優子は、姫川家の和風朝食が、どうしても口に合わなかった。

——朝ご飯はコンビニで買って、電車で食べたから平気だよ。

優子は、メロンパンと、そして家族の前では飲むなど椿に厳命されていた牛乳を抱えて電車に乗った。空腹に流し込まれた冷たい白濁液は、ツバキの脆弱な胃腸を破壊し、ちょうど二時間四十四分後、舞台上で大爆発したのだった。